

さきやまかいづか わせとち
崎山貝塚第20次調査・早稲栃Ⅱ遺跡第7次調査

— 市内遺跡発掘調査報告書 5 —

2006.3

岩手県宮古市教育委員会

さきやまかいづか

わせとち

崎山貝塚第20次調査・早稲栃Ⅱ遺跡第7次調査

— 市内遺跡発掘調査報告書 5 —



遺跡遠景航空写真

2006.3

岩手県宮古市教育委員会

序

本州最東端に位置する宮古市は、海・川・山の営みとともに歩み続けているまちです。私たちは豊かな自然の恩恵を肌で感じることができると同時に、欠かすことなく生活の中に受け継いでできました。平成17年の6月には新しい宮古市が誕生し、今後の発展を誓うとともに、今まで先人が築き上げた財産を残せるよう努力する所存でございます。

宮古市には崎山貝塚をはじめ貴重な遺跡が数多くありますが、この貴重な財産を保存し活用することで後の世代にも伝えていかななくてはなりません。今後とも宮古市の歴史の調査研究を尽くしていきたいと考えております。






本書は個人住宅の建築に伴う崎山貝塚第20次調査と早稲栃Ⅱ遺跡第7次調査の成果をまとめた発掘調査報告書です。特に早稲栃Ⅱ遺跡第7次調査では、当遺跡として初めて縄文時代晩期終末あるいは弥生時代初頭期の竪穴住居跡が確認されました。これらの資料が今後、崎山地区のみならず市内における貴重な調査例として活用され、且つ埋蔵文化財の周知に繋がることを期待しております。

最後に、発掘調査および本書の刊行にご協力を賜りました地権者をはじめとした関係者の皆様に心から感謝を申し上げ、本書の序文といたします。

平成18年3月

宮古市教育委員会
教育長 中屋定基

例 言

1. 本書は宮古市崎山地区に所在する崎山貝塚の第20次調査と早稲枋Ⅱ遺跡の第7次調査についての発掘調査報告書である。
2. 本書は「Ⅰ概説編」と「Ⅱ本編」から成る。概説編では主として調査報告の要旨である。本編は通常の報告書の体裁をとっている。
3. 崎山貝塚第20次調査と早稲枋Ⅱ遺跡第7次調査は個人住宅の建築工事に伴う事前調査であり、平成15年度の市内遺跡発掘調査事業として実施されたものである。
4. 調査主体は、宮古市教育委員会である。発掘調査及び報告書の執筆は、崎山貝塚第20次調査は文化課の加納が、早稲枋Ⅱ遺跡第7次調査は江口と長谷川が担当し、編集は江口が担当した。また、その他文化課担当職員がこれを補佐した。
5. 調査の平面記録は公共座標第X系を基準とし、レベル数値は標高値を示している。座標値は崎山貝塚第20次調査が $X=-35,800.000\text{m}$ 、 $Y=+97,000.000\text{m}$ を原点とし、早稲枋Ⅱ遺跡第7次調査は $X=-36,000.000\text{m}$ 、 $Y=+96,000.000\text{m}$ を原点とした。また、図版中は調査用の局地的な座標であることを明示するためにRを冠した。
6. 土層観察及び文中の色調表記にあたっては、『新版標準土色帖』（小山正忠、竹原秀雄編著 1990年度版）を使用した。
7. 早稲枋Ⅱ遺跡第7次調査では自然科学分析を依頼した。依頼先については以下の通りである。
炭化材の樹種同定 木工舎「ゆい」
放射性炭素年代測定 パリノ・サーヴェイ株式会社
8. 図版中のスクリーン表示は図版内で定めのない限り以下の通りである。
遺構図版 ・  石 ・  焼土
遺物図版 ・  土器附着物 ・  繊維混入 ・  磨石、敲打磨石の磨面
9. 図版中の記号、略号の表記は以下の通りである。
D…土坑 K…攪乱 P…竪穴住居内ピット S…石
10. 遺物の観察はすべて肉眼観察により行っている。
11. 本書に収録した遺跡の調査記録及び出土資料は、宮古市教育委員会で保管している。

目次

序
例言
目次

I 概説編	1
II 本編	5
1 立地と環境	5
(1) 市の位置と環境	5
(2) 遺跡の位置と立地	7
(3) 周辺の遺跡	9
2 崎山貝塚第20次調査	10
(1) 本調査に至る経過	10
(2) これまでの調査概要	10
(3) 調査経過	12
(4) 調査区周辺の概況と基本層序	13
(5) 遺構と遺物	15
(6) まとめ	16
3 早稲枋Ⅱ遺跡第7次調査	22
(1) 本調査に至る経過	22
(2) 調査の経過とこれまでの調査概要	22
(3) 調査体制	26
(4) 調査内容	26
・ 調査地区	
・ 基本層序	
(5) 遺構と遺物	31
・ 竪穴住居跡	
・ 土坑	
・ 遺構外出土遺物	
(6) まとめ	60
(7) 分析・同定	65
参考文献	70
報告書抄録	92

挿 図・写 真・表 目 次

(内表紙) 遺跡遠景航空写真

概 説 編

写真1	崎山貝塚航空写真
写真2	早稲栃Ⅱ遺跡第7次調査状況(1)
写真3	早稲栃Ⅱ遺跡第7次調査状況(2)
写真4	早稲栃Ⅱ遺跡第7次調査状況(3)
写真5	第7号竪穴住居跡土器出土状況
写真6	第8号竪穴住居跡
写真7	竪穴住居跡出土土器
写真8	前期の土器
写真9	中期の土器
写真10	後期の土器
写真11	出土石器
挿図1	早稲栃Ⅱ遺跡第7次調査全体図

本 編

挿 図 目 次

第1図	宮古市位置図	5
第2図	地形分類と遺跡分布図	6
第3図	遺跡位置図	7
第4図	周辺遺跡分布図	8

崎山貝塚第20次調査

挿 図 目 次

第5図	崎山貝塚周辺地形図	11
第6図	崎山貝塚第20次調査全体図	12
第7図	調査区土層断面図	14
第8図	第1号土坑平面・断面図	15
第9図	出土遺物	16

表 目 次

第1表	調査区土層観察表	14
-----	----------	----

写 真 図 版

PL1		
1.	調査区全景	19
2.	第1号土坑土層堆積状況	

3. 第1号土坑完掘状況

4. 出土遺物

早稲栃Ⅱ遺跡第7次調査

挿 図 目 次

第10図	調査地区と周辺地形図	23
第11図	第5～第7次調査区全体図	24
第12図	調査範囲図	27
第13図	基本土層図	28
第14図	早稲栃Ⅱ遺跡第7次調査全体図	29
第15図	第7号、8号竪穴住居跡平面・断面図	32
第16図	第8号竪穴住居跡平面・断面図	33
第17図	第7号、8号竪穴住居跡出土土器	34
第18図	土坑平面・断面図(1)	36
第19図	土坑平面・断面図(2)、出土土器	37
第20図	土坑平面・断面図(3)、出土土器	38
第21図	遺構外(Ⅱ層)出土土器(1)	40
第22図	遺構外(Ⅱ層)出土土器(2)	41
第23図	遺構外(Ⅲ層)出土土器	42
第24図	遺構外(Ⅳ層)出土土器(1)	44
第25図	遺構外(Ⅳ層)出土土器(2)	45
第26図	遺構外(Ⅴ層)出土土器(1)	46
第27図	遺構外(Ⅴ層)出土土器(2)	47
第28図	遺構外(Ⅵ、Ⅸ層他)出土土器	49
第29図	遺構外出土石器(1)	50
第30図	遺構外出土石器(2)	51
第31図	遺構外出土石器(3)・銭貨	52
第32図	市内における後期前葉の土器出土例	63

表 目 次

第2表	第1次～第6次調査要旨	25
第3表	基本土層注記表	28
第4表	竪穴住居跡出土土器観察表	52
第5表	土坑内出土土器観察表	53
第6表	遺構外出土土器観察表	53
第7表	遺構外出土石器観察表	59
第8表	遺構外出土銭貨観察表	59

第9表 放射性炭素年代測定結果	69
第10表 曆年較正結果	69

写真図版

PL 2 第8号竪穴住居炉跡出土材	67
PL 3	73
1. 本調査区内完掘基本土層Ⅲ層除去後近景	
2. 本調査区内東壁土層堆積状況	
PL 4	74
1. 本調査区内完掘	
2. 本調査区内北壁土層堆積状況	
3. 第8号竪穴住居炉跡検出状況	
PL 5	75
1. 崎山地区航空写真	
2. 調査地区周辺航空写真	
3. 第1次～第7次調査地区航空写真	
PL 6	76
1. 調査区遠景	
2. 本調査区内完掘近景	
PL 7	77
1. 本調査区内基本土層Ⅲ層除去後近景	
2. 確認調査区内完掘	
3. 確認調査区内土層堆積状況	
4. 本調査区内基本土層Ⅱ層除去状況	
5. 本調査区内北部基本土層Ⅲ層除去状況	
PL 8	78
1. 本調査区内基本土層Ⅴ層以下断面	
2. 本調査区内基本土層Ⅳ、Ⅴ層検出状況	
3. 本調査区内基本土層Ⅴ層検出状況	
4. 本調査区内東壁土層堆積状況	
5. 本調査区内東部基本土層Ⅴ層以下断面	
PL 9	79
1. 本調査区内基本土層Ⅶ・Ⅷ層検出状況	
2. 本調査区内基本土層Ⅶ層断面	
3. 第7号竪穴住居跡調査状況	
4. 第7号竪穴住居跡検出状況(1)	
5. 第7号竪穴住居跡検出状況(2)	
PL 10	80
1. 第7号竪穴住居跡内土器出土状況(1)	

2. 第7号竪穴住居跡内土器出土状況(2)	
3. 第8号竪穴住居炉跡検出状況	
4. 第8号竪穴住居炉跡検出状況	
5. 第8号竪穴住居跡出土礫	
PL 11	81
1. 第8号竪穴住居炉跡上面確認状況	
2. 第8号竪穴住居炉跡炭化材確認状況	
3. 第8号竪穴住居炉跡土層断面	
4. 第8号竪穴住居炉跡完掘	
5. 第11号土坑土層断面	
6. 第11号土坑完掘	
7. 第14号土坑土層断面	
8. 第14号土坑完掘	
PL 12	82
1. 第15号土坑土層断面	
2. 第15号土坑完掘	
3. 第17号土坑検出状況(1)	
4. 第17号土坑検出状況(2)	
5. 第17号土坑土層断面	
6. 第17号土坑完掘	
7. 第19号土坑完掘	
8. 第20号土坑完掘	
PL 13	83
1. 第21～第23号土坑完掘	
2. 第24、25号土坑完掘	
3. 第8号竪穴住居跡内土器出土状況	
4. 本調査区東端部基本土層Ⅳ層中土器出土状況	
5. 基本土層Ⅸ層中出土石器	
6. 基本土層Ⅴ層中出土石器	
7. 基本土層Ⅳ層中出土石器	
8. 調査状況	
PL 14 遺構内・遺構外出土土器(1)	84
PL 15 遺構外出土土器(2)	85
PL 16 遺構外出土土器(3)	86
PL 17 遺構外出土土器(4)	87
PL 18 遺構外出土土器(5)	88
PL 19 遺構外出土土器(6)	89
PL 20 遺構外出土土器(7)	90
PL 21 遺構外出土石器・錢貨	91

I 概説編

はじめに

この発掘調査報告書は平成15年に調査した宮古市^{さきやまかいづか}崎山貝塚の第20次調査と早稲栃^{わせとち}Ⅱ遺跡の第7次調査の成果を報告するものです。発掘調査のほとんどは遺跡の中で土木工事をすることが原因で行われますが、調査の内容は、工事の前に失われてしまう範囲を対象に図面作成、調査状況の写真撮影、出土した遺物の実測などの記録保存が中心で、調査後は調査成果を公開するために資料を整理し、報告書が刊行されます。その詳細は「Ⅱ本編」にあります。ここでは写真を交えて調査の要旨を報告します。

(1) 崎山貝塚第20次調査

崎山貝塚は宮古市崎山地区に所在する縄文時代を中心とする遺跡で、平成8年には集落の跡（縄文人の生活の場）と貝塚（縄文人が世代を越え積み上げていった貝や土器などの捨て場）が国指定の史跡^{ししき}として指定されました。教育委員会では昭和61年から平成15年まで19次にわたり遺跡の範囲確認、保存・活用を前提とした発掘調査を行ってきました。崎山貝塚の遺跡範囲は国指定の史跡範囲よりも広いので、貝塚の周辺で工事をするときは事前に遺跡に含まれるか検討しなければなりません。今回の第20次調査は住宅建築に伴うもので、調査場所は遺跡の南端にあたる宮古農協崎山支所の向いです。



写真1 崎山貝塚航空写真

発掘調査では生活跡を証明する竪穴住居跡などの落ち込み（遺構）を壊すことがないような慎重さが求められます。特に崎山地区は土があまり堆積していない所があって、表土（現在の地表面）を剥ぎ取るとすぐに基盤（地山）が顔を出す場合もありますので、調査は注意を払って進められます。14日間の調査の結果、土坑（竪穴住居跡とは異なる比較的小規模の穴）が見つかりました。

土坑の中からは陶器の欠けら^{とろき}が出土しました。しかし、土坑の性格や時期はよく分かりません。この他、古代の土器や石器の破片が出土しました。調査の結果、調査地では崎山貝塚の集落跡に関連する縄文時代の集落跡は確認されませんでした。これは集落跡や貝塚がある台地とは立地が異なることや、台地から離れていることが理由と考えられます。しかし、調査により古代の土器や中世以降の陶器が出土しました。このことで周辺に古代または中世以降の生活跡が広がっていると予想されます。

(2) 早稲栃Ⅱ遺跡第7次調査

遺跡は崎^{さき}鋏^{くわ}ヶ崎^{がさき}地区の国道45号線から南西に約500m、先の崎山貝塚から西に約1 km

離れた住宅地が点在する閑静な場所にあります。遺跡内は南向きの緩斜地が南北に広がり、その脇を大沢海岸へ通じる通称「メクサレ沢」が流れています。日当たりが良く、沢が近くにあるのは当時の人々にとって恵まれた環境でした。今回で遺跡内の調査は7回を数えますが、これまでの調査によって縄文時代中期（今から5,000年前ころといわれています）の竪穴住居跡が少なくとも4棟見つかっています。調査地点は竪穴住居跡が発掘調査された所から北西60m程の距離で、遺跡の中では目と鼻の先くらいの距離です。調査は住宅建築に伴うもので、近くに竪穴住居跡が発掘されていることから、工事する場所に遺構や遺物が土の中にあるかどうかを確認する「試掘調査」を実施しました。試掘調査の結果、遺構や遺物が確認され、住宅建築の前に発掘調査を行うことに決まりました。

調査の前は縄文時代中期の遺構が検出されることが予想されていました。つまり、今まで調査された竪穴住居跡と同じものが北へ続いていると考えていました。実際はどうだったのか、次に調査の経過を見ていきましょう。

調査の経過

右の3つの写真は調査の移り変わりが見てとれる写真です。上の写真は現代の表土と整地を目的としていた現代の盛り土を重機で取り除いた直後の状況です。黒い部分は試掘調査により遺物が確認された所で、ここからは人の手で調査が進められます。次の写真は、調査が進み遺構の位置や遺物が包含している堆積土（遺物包含層）の様子を写しています。左奥の褐色の部分は土坑で、底からは縄文土器の破片が出土しました。写真手前の黒い部分には遺物が出土し、上の写真の時よりも20cm掘り下がっています。この間、遺物だけでなく竪穴住居跡も検出することができました。一番下の写真は調査地区の基盤まで到達した状況です。ここまできますと縄文時代の遺物は出土しません。結局、遺物包含層は厚いところで50cmもありました。中からは縄文時代の土器・石器が出土しました。



写真2 早稲栃Ⅱ遺跡第7次調査状況（1）



写真3 早稲栃Ⅱ遺跡第7次調査状況（2）

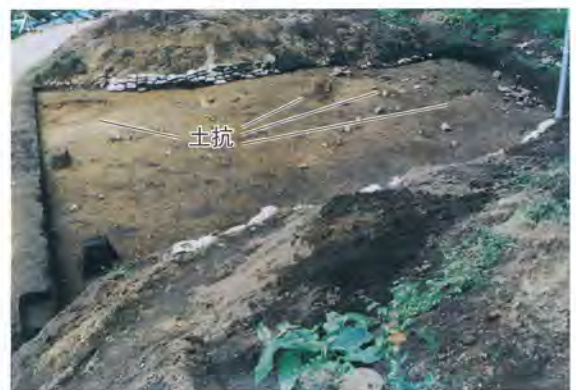


写真4 早稲栃Ⅱ遺跡第7次調査状況（3）

竪穴住居跡

竪穴住居跡は重複している状態で2棟検出されました。竪穴住居跡の時期を知る手がかりは、住居内のある時期に特定される土器や建物内の構造や形です。写真は竪穴住居跡から出土した土器の状況を写したものです。この土器は縄文時代晩期（今から2,500年頃前といわれています）の終わり頃特有の土器です。調査区の南東端で検出された竪穴住居跡には火を使っていた炉跡が確認され、床の面と炉跡から出土した土器から縄文時代晩期の終わり頃から弥生時代の初めに作られた土器の破片が出土しました。このことから、2棟の竪穴住居跡は縄文時代晩期の終わり頃から弥生時代の初め頃に居住していた竪穴住居跡と考えられます。



写真5 第7号竪穴住居跡土器出土状況



写真6 第8号竪穴住居炉跡

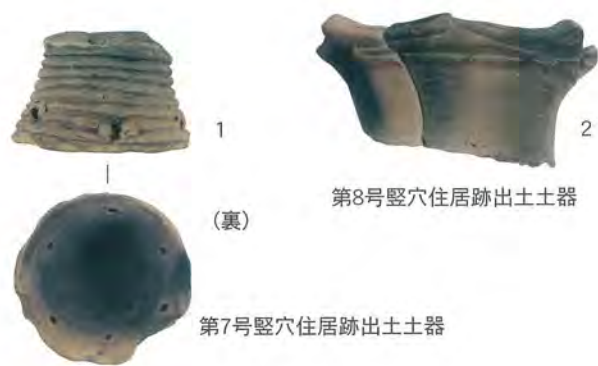


写真7 竪穴住居跡出土土器

出土遺物について

約50cmにおよぶ厚さの遺物包含層からは縄文時代前期から晩期の土器が出土しました。縄文土器は縄文時代の中に同じ形、同じ装飾をしていたのではなく、世代ごとにその形や装飾は変化しています。先人の研究により「土器の年表」は精度を極め、今日では破片でも時期が分かる場合もあります。下の写真の土器も縄文土器の時期を知ることができます。



写真8 前期の土器



写真9 中期の土器



写真10 後期の土器

遺物包含層からは石器も出土しました。石器は物を切ったり削ったり食料を磨り潰したりする「生活の道具」が出土しました。右の写真の1は石の面のほとんどに手を加えた先の尖った鋭利な石器です。手に隠れてしまう程の大きさで、袂により摘みを付けています。摘みに紐を巻き付けて携帯していたのでしょうか。はっきりとは分かっていません。



写真11 出土石器

早稲栃Ⅱ遺跡第7次調査の結果

今回の調査では縄文時代の終末期または弥生時代初頭期の竪穴住居跡が検出されました。今までの第1次～第6次の調査では全く検出されていなかった時期の竪穴住居跡が検出されたことにより、早稲栃Ⅱ遺跡は縄文時代中期の集落とは別に縄文時代の終末期以降の集落が広がっていることが分かりました。このことは早稲栃Ⅱ遺跡が長きにわたり縄文人が住んでいたことを証明するものです。さらに、今までの調査と今回の調査の成果を合わせると縄文時代前期、後期にも生活の跡があったと考えられます。



挿図1 早稲栃Ⅱ遺跡第7次調査全体図

Ⅱ 本 編

1 立地と環境

(1) 宮古市の位置と環境 (第1図、第2図)

岩手県宮古市は県の沿岸中部に位置する都市で、盛岡市からは東に約100km、同じく三陸沿岸の拠点都市である釜石市からは北に約50km離れている。主な産業として、昭和30年に国立公園の指定を受けた浄土ヶ浜を代表とする観光業と、農業、鮭・秋刀魚の水揚げを代表とした水産業があげられる。特に県により名勝として指定された浄土ヶ浜は、「日本の渚・百選」、「日本の水浴場八十八選」に認定され、鮭の水揚げは全国有数の漁獲量を誇っている。また、浄土ヶ浜から北に約2km離れた日出島は、クロコシジロウミツバメの繁殖地として国の天然記念物に指定されている。

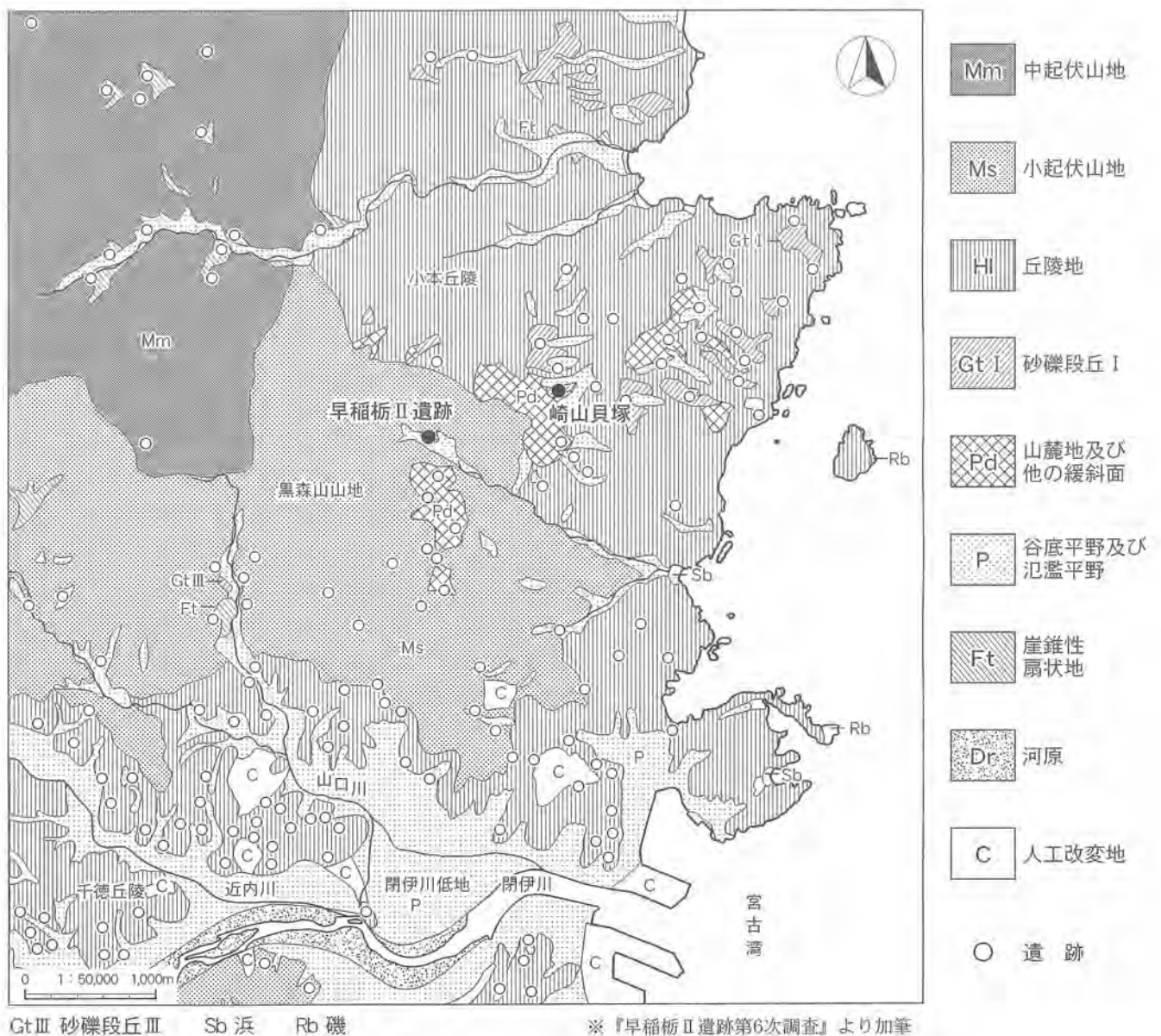
現在の宮古市は、平成17年6月に旧宮古市、旧田老町、旧新里村の合併により新市として市制が施行され、これにより市の人口・面積は合併時の人口で約6万3千人、総面積が696.8km²で、それぞれ旧宮古市の1.17倍、2倍となった。これは人口1人当たりの面積で見ると、旧宮古市が6.2m²であったのに対し現在の宮古市は11m²となった。特に市域が広がり、北は岩泉町、西は川井村、南は山田町と接している。太平洋と接する海岸は宮古湾以南がやや複雑で、鮭ヶ崎を最東端とする



第1図 宮古市位置図 (1:400,000)

重茂半島が角状に形成され、宮古湾が深く入り込んでいるが、宮古湾以北は、県指定天然記念物の三王岩を代表とする海食崖や隆起海岸が田老以北で見られるが、他は直線的な海岸線が続き、丘陵地と浜が形成されている。気候は県の内陸に比べ海からの風が入るため夏は涼しく、冬は温暖で降雪量は少ない。

市内の地形は主に山地・丘陵地で占められ、河川・海岸周辺の低地は山地に比べ少ない。山地は標高731mの十二神山と、標高455mの月山を代表とする重茂半島の山地帯と、北上高地から続く山地帯からなる。市の北西部では峠ノ神山(1,229m)、川井村との境にある堺ノ神岳(1,319m)から続く標高1,000m前後の大起伏山地が広がっているが、市内の山地帯の多くは黒森山(310m)、猿壁山(349m)から続く小起伏山地と、原地山(485m)、高取山(565m)、種刺山(530m)などの標高400m～800m前後の中起伏山地からなる。また丘陵地は、山地帯と河川流域の間に発達した河岸段丘と海岸段丘が多くを占め、河岸段丘は主に、宮古湾へ流れる閉伊川の支流である山口川・近内川周辺に広がる千徳丘陵、宮古湾へ北流する津軽石川周辺の豊間根丘陵、八木沢川周辺の八木沢丘陵など樹枝状に段丘が形成されている。海岸段丘は小本丘陵と呼ばれる段丘が宮古湾から市の北部まで続き、小河川や沢の開析に



GtⅢ 砂礫段丘Ⅲ Sb 浜 Rb 磯

※『早稲栃Ⅱ遺跡第6次調査』より加筆

第2図 地形分類と遺跡分布図(1:50,000)

より所々で緩斜面が形成されている。河川・海岸周辺の低地は先述した河川の他、閉伊川の支流である長沢川・刈屋川、太平洋へ注ぐ田代川、撰待川、田老川、その他の小河川や沢の流域に谷底平野及び氾濫平野が形成されている。

(2) 遺跡の位置と立地 (第3図)

宮古市では現在、約580箇所の埋蔵文化財包蔵地を確認しているが、今後、その数が増えると予想されている。遺跡は丘陵地、砂礫段丘上に多く分布している他、谷底平野及び氾濫平野の緩斜面上にも所在している。今回報告する2遺跡もこれらの立地に当てはまる。

崎山貝塚は宮古市崎山地区に所在し、宮古市役所から北に約3.5km、県立宮古病院から北北東に約2kmの距離にある。小本丘陵中の砂礫段丘上に立地し、貝塚は東西に広がる舌状台地上にあるが、周りの低湿地も遺跡内として含まれている。平成8年には台地と斜面部が国の史跡として指定されている。この他、崎山地区には崎山貝塚をはじめ多くの遺跡が小本丘陵中に分布しているが、この小本丘陵は西側の山地帯とは異なり、段丘面の標高は90~150m前後と地形上は平坦で海に向かって傾斜し、段丘の原面は小河川や沢により開析が進み、基盤岩の露出や丘陵の尾根が残存しているなど残存状態は良くないため、丘陵地に遺跡は集中していても小規模である。

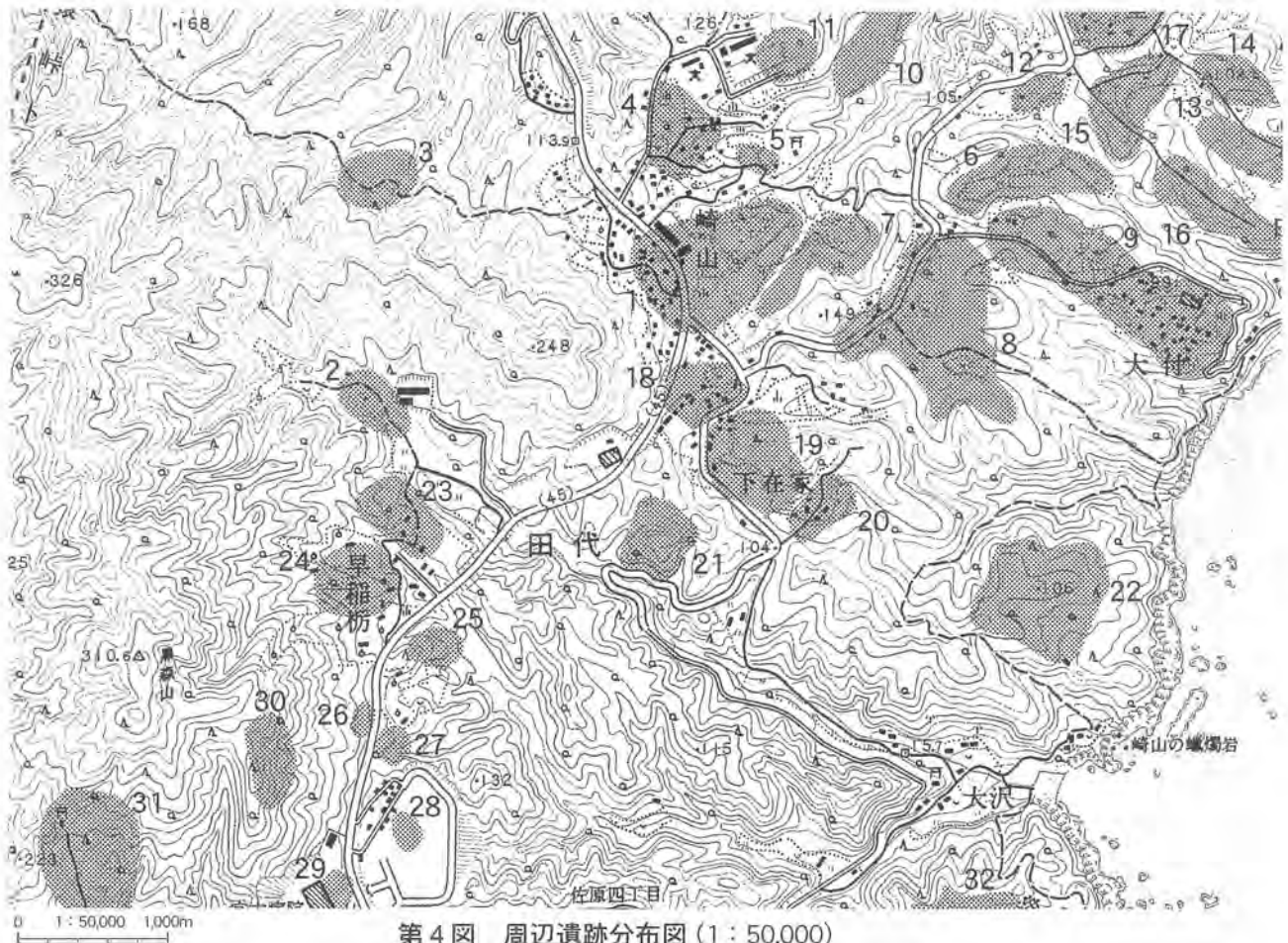
早稲栃Ⅱ遺跡は宮古市崎鉾ヶ崎地区に所在し、宮古市役所から北北西に約3.5km、崎山貝塚から



※『早稲栃Ⅱ遺跡第6次調査』より加筆

第3図 遺跡位置図 (1:50,000)

南西に約1kmの距離にある。地形分類上は崎山貝塚と異なり、黒森山山地の南東部に位置し、通称メクサレ沢の最上流部にある。メクサレ沢は黒森山の北東域から東すなわち太平洋へ流れる沢で、最終的に大沢海岸へ到達する。遺跡はメクサレ沢により山地・丘陵が開析されたことで形成された谷底平野に立地し、周囲には早稲栃Ⅱ遺跡と同じくメクサレ沢により形成された谷底平野上の南向きの緩斜面に遺跡が分布している。



第4図 周辺遺跡分布図(1:50,000)

番号	遺跡名	主な時代	番号	遺跡名	主な時代
1	崎山貝塚	縄文(早期～晩期)	17	古里Ⅰ	縄文(前・中期)
2	早稲栃Ⅱ	縄文(早期～晩期)	18	下在家Ⅰ	縄文(中期)、近世
3	長平	縄文(中期)	19	下在家Ⅱ	縄文
4	トロノ木Ⅰ	縄文(中期)、近世	20	塚場	縄文(後期)
5	トロノ木Ⅱ	縄文(中期)	21	大石	縄文
6	萩沢Ⅱ	縄文(前・中期)、古代	22	長磯	縄文(前・中期)
7	千束長根	縄文(前～後期)	23	早稲栃糠森	縄文(前～中期)
8	白石	縄文(中・後期)	24	早稲栃Ⅲ	縄文(中・中期)、平安
9	大付	縄文(前～晩期)、弥生	25	早稲栃Ⅳ	縄文
10	トロノ木Ⅲ	縄文(前・中期)	26	南沢Ⅰ	縄文
11	トロノ木Ⅳ	縄文(中期)	27	早稲栃Ⅴ	縄文
12	萩沢Ⅰ	縄文	28	早稲栃Ⅵ	縄文(中期)
13	潮吹Ⅰ	縄文(前期)	29	寒風	縄文(後期)、古代
14	潮吹Ⅱ	縄文(前～晩期)	30	黒森	古代
15	潮吹Ⅲ	縄文(中期)	31	黒森山	古代
16	わたのは	縄文(前・後期)	32	平松Ⅰ	縄文(前・中期)

(2) 周辺の遺跡 (第4図)

崎山貝塚・早稲栃Ⅱ遺跡とともに縄文時代を主体とした遺跡である。そして周辺にも同様の立地に縄文時代を主体とする遺跡が分布している。

崎山貝塚西方を除く周辺には、白石遺跡、トロノ木Ⅰ遺跡、トロノ木Ⅳ遺跡、大付遺跡で縄文時代の竪穴住居跡が検出されている。白石遺跡は砂礫段丘上の遺跡で、第1、3～5次調査において竪穴住居跡が合計24棟確認され、縄文時代中期末葉大木10式から後期前葉までの集落遺跡であることが分かっている。崎山貝塚に近接するトロノ木Ⅰ遺跡は砂礫段丘上の遺跡で、第4次調査において複式炉をもつ竪穴住居跡が3棟検出され、炉跡、土器埋設ピットからは大木8b式の土器が出土している。トロノ木Ⅰ遺跡から400m離れたトロノ木Ⅳ遺跡は尾根上の遺跡で、昭和60年の調査で竪穴住居跡、住居跡に伴うと思われる石組炉が2基検出され、昭和63年の調査では竪穴住居跡1棟が調査されている。竪穴住居跡の時期は不明であるが、昭和63年の調査で検出された竪穴住居跡では、後期前葉と思われる土器片が出土している。大付遺跡は白石遺跡に近接する砂礫段丘上の遺跡で、晩期中葉の屈葬人骨が調査されたことで知られている。現在まで報告された9次に亘る調査では、縄文時代～弥生時代に所産された竪穴住居跡が8棟検出され、8棟の中で縄文時代の住居跡は5棟で、前期が1棟、中期が2棟、後期と思われるものが1棟、晩期が1棟である。遺跡範囲は東西に広く舌状であるが、地形は一様でなく、深い谷筋が入り込んでいる。現在のところ、遺跡東部の緩斜面では屈葬人骨と晩期の竪穴住居跡が検出され、遺跡西部の段丘上で前期～後期の竪穴住居跡が検出される傾向にある。これら4遺跡の他にも周辺の遺跡には縄文時代の住居跡が未確認ながらも、縄文土器が出土している。

このように縄文時代、とりわけ中期後半には、崎山貝塚とその他の近接した遺跡が共存していることが考えられ、また遺跡の規模から崎山貝塚を拠点に、その近辺には段丘上を選んで形成された遺跡が崎山貝塚を囲んで生活していたと想定される。

早稲栃Ⅱ遺跡周辺は崎山地区ほどの遺跡分布の濃密さはなく、現在までは緩斜面上あるいは尾根上に点在していることが確認されている。早稲栃Ⅱ遺跡は尾根上の遺跡で、これまでの調査により縄文時代中期後半の竪穴住居跡が検出されている。また、早稲栃Ⅵ遺跡では同じく縄文時代中期後半の竪穴住居跡が1棟検出されている。この他、早稲栃Ⅱ遺跡に近接する早稲栃糠森遺跡では縄文時代前期末、中期後半の土器が採集されている。

この他、縄文時代以後では弥生時代前期の竪穴住居跡と弥生時代後期の土坑跡が検出された大付遺跡、古代の住居跡が検出された寒風遺跡、早稲栃Ⅲ遺跡、製鉄炉跡と炭窯跡が検出された萩沢Ⅱ遺跡、近世の建物跡・井戸跡が検出されたトロノ木Ⅰ遺跡、近世の掘立柱建物跡が検出された下在家Ⅰ遺跡がある。

ここまでの参考文献

- 1986 『宮古市遺跡分布地図－昭和60年度版－』 宮古市埋蔵文化財調査報告書9
- 1988 『崎山遺跡群Ⅱ－昭和62年度発掘調査概報－』 宮古市埋蔵文化財調査報告書15
- 1989 『トロノ木Ⅰ遺跡－第1次～第7次発掘調査報告書－』 宮古市埋蔵文化財調査報告書17
- 1990 『崎山遺跡群Ⅳ－平成元年度発掘調査概報－』 宮古市埋蔵文化財調査報告書23
- 1992 『大付遺跡－平成3年度発掘調査報告書－』 宮古市埋蔵文化財調査報告書35
- 1996 『大付遺跡－平成5、6年度発掘調査報告書－』 宮古市埋蔵文化財調査報告書48
- 2000 『宮古の遺跡発掘史』 第12回ふるさと歴史展解説図録
- 2003 『早稲栃Ⅱ遺跡第6次調査－市内遺跡発掘調査報告書4－』 宮古市埋蔵文化財調査報告書61
- 2003 『下在家Ⅰ遺跡－平成14年度発掘調査報告書－』 宮古市埋蔵文化財調査報告書62

2 崎山貝塚第20次調査

(1) 本調査にいたる経過

宮古市では、平成9年度より国指定史跡崎山貝塚の指定範囲の公有化を進めてきた。これに伴い平成15年度に移転する個人住宅の移転先も崎山貝塚の隣接地であったため（史跡指定範囲外）、市教委と地権者の協議の上、平成15年4月11日に現地確認を行った。当該地は崎山貝塚の遺跡範囲の南限より25m南に位置する。現地確認の際に微量の遺物が採集された。

平成15年4月25日付けで地権者から文化財保護法第57条の2の規定による埋蔵文化財発掘の届出があり、これに対し岩手県教育委員会より平成15年5月6日付で工事着手前に埋蔵文化財の試掘調査が必要との通知があった。

このことから市教委では平成15年5月14日より試掘調査に入ったが、精査の結果土坑1基が確認されたため発掘調査に切り替え、調査・記録作業をおこない同6月13日に発掘調査を終了した。市教委は平成15年5月20日付で岩手県教育委員会に文化財保護法第58条の2の規定による発掘調査の報告をしている。

(2) これまでの調査概要（第5図）

宮古市では崎山貝塚の保存を目的として、これまで昭和61年度から平成15年度まで19次にわたる範囲・内容確認調査をおこなってきた（そのうち第6次調査・第10次調査は個人住宅建築や農道敷設に伴う緊急調査である）。

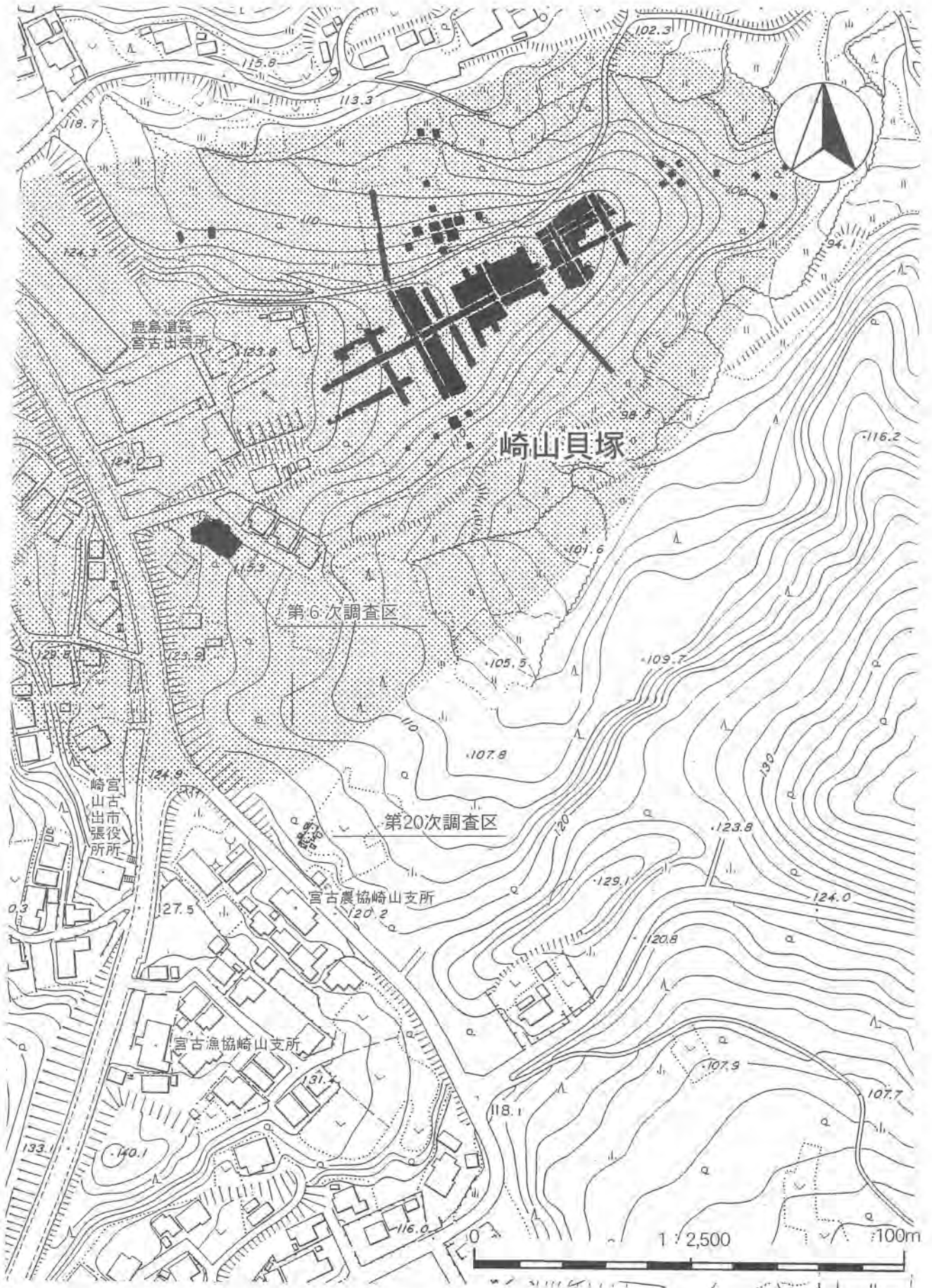
昭和61年度から平成5年度までの9次にわたる範囲確認調査で、崎山貝塚は台地上の縄文中期を中心とする集落跡、斜面部の縄文前期から中期を中心とする貝塚や遺物包含層、それらを取り囲む低湿地からなることが判明した。集落跡は中期中葉に中央広場とそれを囲む環状の掘り込み（環状溝）が形成され、居住域はこの東西に分布する特徴的な形態であった。また、遺跡の保存状態が良好で、周辺の景観までもがそのまま保全されているとの評価も受けた。

このような調査結果を受け、宮古市は崎山貝塚を保存・活用していく方針を固め、史跡指定に向け準備をすすめることとした。文化庁及び岩手県教育委員会の指導のもとに平成6年度に「崎山貝塚調査指導委員会」を設置し、以後はその指導のもとに内容確認調査を行ってきた。

平成7・8年度の第12次・13次調査では台地上の集落の調査がおこなわれ、中央広場と環状溝・集落の変遷が明らかになった。また以後第19次調査まで北貝塚の精査がおこなわれ、層厚2mに及ぶ貝層から、おびただしい量の遺物が発見された。なかでも縄文前期から中期初頭にかけての骨角器が200点以上出土しており特筆される。

宮古市は平成8年2月20日、国指定史跡申請書を文化庁に提出し、同年4月19日の文化財保護審議会による指定答申を経て、同年7月16日に史跡指定する旨の官報告示がなされた。これをうけ、発掘調査と並行して保存管理計画・整備基本構想が策定され、現在史跡公園整備の準備がすすめられている。

崎山貝塚の調査成果については、昭和61年度から平成5年度までは各年度ごとに調査概報を刊行し、平成7年度に第11次調査までの結果を正式に報告するものとして『崎山貝塚範囲確認調査報告書』を刊行している。また、第12次・13次調査については平成10年度に概報を刊行している。第14次調査から第19次調査までの北貝塚の調査報告については現在整理作業が進められている。

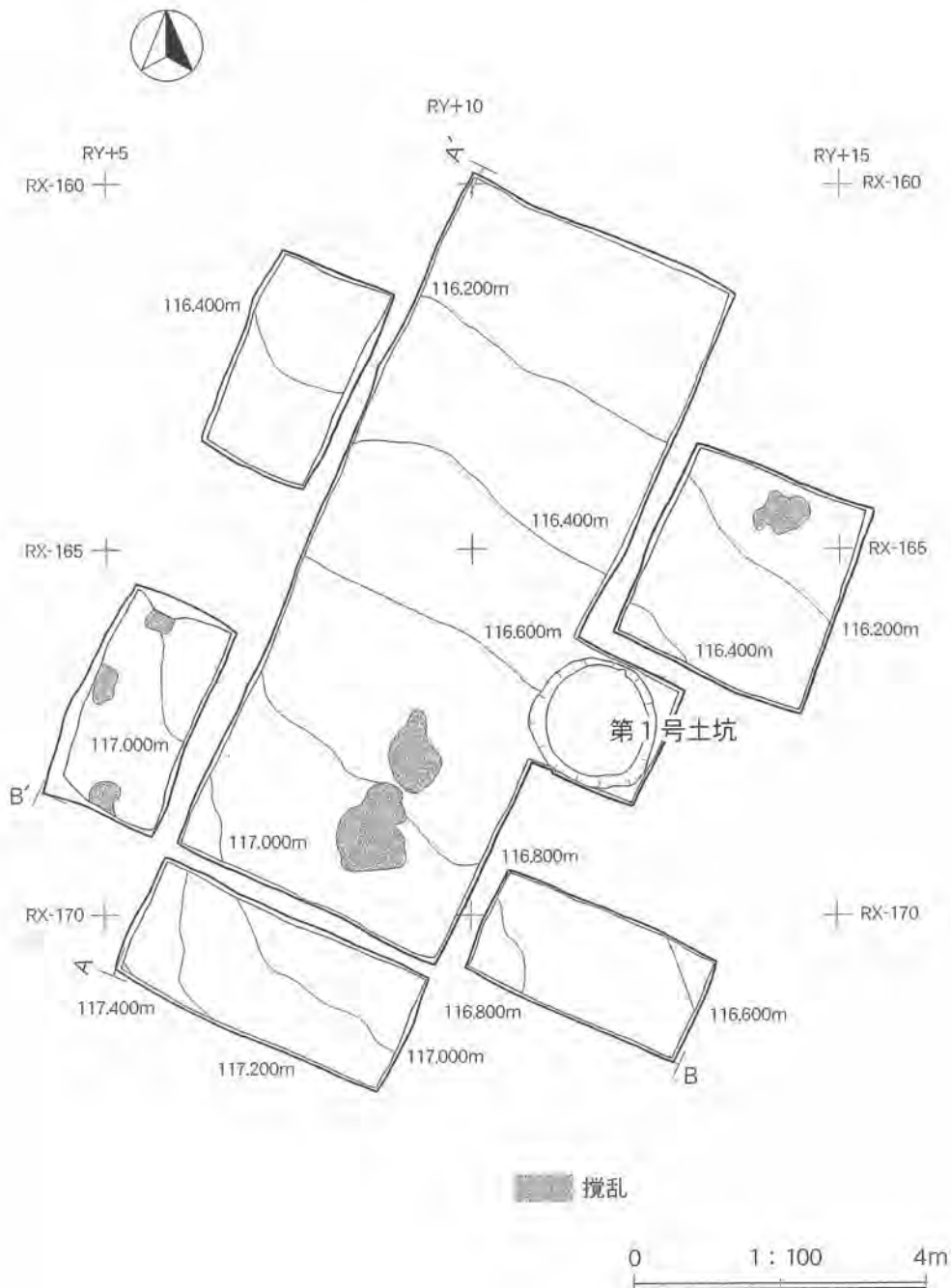


第5図 崎山貝塚周辺地形図(黒塗り部分は第1次～第19次調査区)

(2) 調査経過(第6図、P L 1)

平成15年5月14日、建設される住宅敷地にトレンチを設定し、崎山貝塚の水準点115.813mからレベルの移動を行った。建設予定地中央に長方形のトレンチを設定し、直交する方向にもトレンチを設定した。中央のトレンチを優先的に掘削し、状況に応じて他のトレンチを掘削することとした。

表土・耕作土を除去し、調査区を精査した。この結果、中央トレンチ東壁中央に掘り込みが検出されたため、同5月26日からさらに調査区を拡張してプラン全体を検出した(第1号土坑)。この他の落込みも半截・掘削して確認したが、遺構と思われるものは他に検出されなかった。



第6図 崎山貝塚第20次調査全体図

6月3日本調査に切り替え第1号土坑を掘削し、平・断面図の作成(S=1/20)・写真撮影等記録作業を行った。並行して調査区の平断面図の作成を行い(S=1/50)、6月13日に屋外調査を終了した。調査日数は14日間であった。

調査体制 (平成15年度)

調査主体	宮古市教育委員会	教育長	中屋定基
調査総括	伊藤賢一	宮古市教育委員会	生涯学習課長
事務担当	佐藤慎一郎	〃	生涯学習課長補佐兼文化係長
調査員	竹下将男	〃	生涯学習課主査
	高橋憲太郎	〃	生涯学習課主任文化財調査員
	鎌田祐二	〃	生涯学習課主任文化財調査員
	加納由美	〃	生涯学習課主任文化財調査員 (調査、報告書担当)
	安原 誠	〃	生涯学習課文化財調査員
	長谷川真	〃	生涯学習課文化財調査員
	阿部 豊	〃	生涯学習課埋蔵文化財発掘調査員
	江口邦泰	〃	生涯学習課埋蔵文化財発掘調査員

発掘調査作業員 工藤イネ 中居勝二 堀子勝男

なお、発掘調査にあたり地権者の工藤司様には多大なご協力を賜りました。心より謝意を表します。

(4) 調査区周辺の概況と基本層序 (第7図)

本調査区は宮古市崎山第1地割7に所在する。調査対象面積は123.6㎡、そのうち調査面積は最終的に74㎡となった。前述のように、崎山貝塚の主体は北東に延びる舌状台地とそれを取り囲む湿地である。調査区は崎山貝塚の南側湿地の谷頭上に位置する。従って周辺の地形は南西ほど高く、北東ほど低くなっている。調査対象区南側に国道45号線から分岐して県道崎山宮古線が走っており、道路の法面下に調査区の南西端が位置する。後述するが、この法面の下端では耕作土に腐植があまり見られず、地山土を耕作しているような性状であることや、調査区南東端付近で地表のクリーニングを行った際に碎石が見られたことから、道路に伴って元の地形を幾分割って盛土したと思われる。ただし、『崎山貝塚—範囲確認調査報告書—』(『崎山貝塚』1995)所収の航空写真や隣接地の状況から見て、それほど大きな削平は行われていないものと判断される。

また、調査区西側には表面から観察してもわかる畝状の高まりがあったが、これは西隣との地境に沿って形成されたものと思われる。調査区の土層断面を観察すると、表土・耕作土がこの地境に向かって厚くなるにもかかわらず、地山面はほぼ同じレベルを保っており、またこの付近に礫・ガラス瓶・空き缶などが多く含まれていた。耕作時に抜去したものなどを地境に長年積み重ねた結果このような地境が形成されたものと思われる。

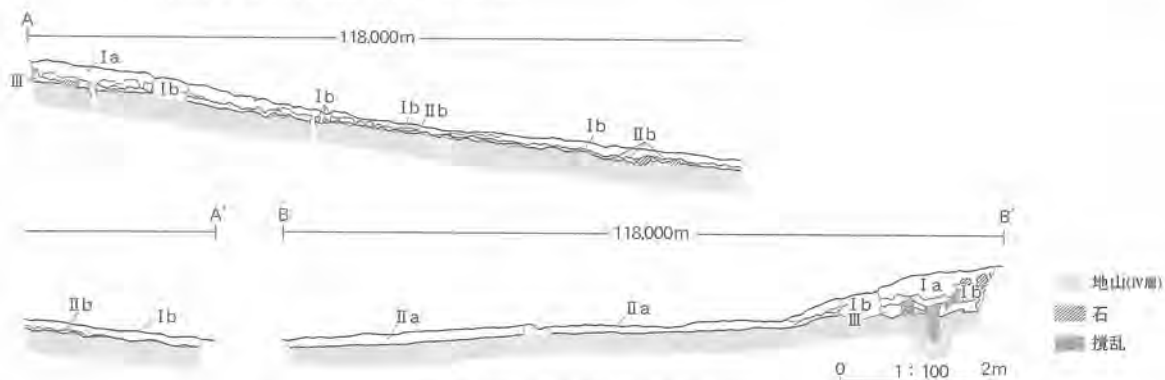
地権者によれば調査区の畑地は先代の時代の開墾とのことである。

以下に土層の概略を述べる。

I層 地境盛土 暗褐色シルト質埴壤土。全体に軟質で粘性なく、地山起源の褐色シルト質埴壤

土を15%程度混入する。炭化物とともに白色粉状粒子・ブロックを含む。地権者によれば肥料に入れた石灰ではないかとのことである。調査区西側の地境に近寄るほど厚く堆積し、主にB、Cトレンチ西側に存在する。最大層厚は40cm程度である。2層に細分できる。

- I a層 I層上層。粘性なく草木根多い。地山起源土を混入する。調査区西側の地境上に厚く堆積しており、地山に含まれるのと同様の礫がところどころ積み上げたように入っている。ガラス瓶の破片・空き缶などを含む。
- I b層 I層下層。I a層よりいくらかしまっている。地山起源土をブロック状に含む。
- II層 耕作土 褐色～暗褐色シルト質埴壤土。近年耕作された土壌。a層は斜面上方に存在し、腐植が薄いため地山起源土を多く混入し明るい色調である。b層は傾斜下方に堆積し、やや腐植が多く暗い色調を呈する。層厚は5cm～15cmほどである。
- II a層 褐色シルト質埴壤土、耕作により地山起源土を多く混入する。炭化物を含む。腐植少なく、やや固く、粘性がある。
- II b層 暗褐色シルト質埴壤土、I層・II a層より硬く粘性がある。地山起源土を含むが、その量はI a層より少ない。
- III層 旧表土か 褐色シルト質埴壤土、中程度の硬さで、やや粘性あり。斜面下方、I b層下に存在する。地境形成以前の旧表土の可能性はある。地山起源と思われる橙色シルト質埴壤土をブロック状に含んでおり、人為的な攪乱があったものと思われる。層厚は8cm以下である。
- IV層 地山層 明褐色シルト質埴壤土。崎山貝塚第6次調査IV層、昭和60年度調査の「第4層」に相当する。花崗岩角礫を含む。



第7図 調査区土層断面図

第1表 調査区土層観察表

層名		基本土	混入土	混入物等
I	a 地境盛土	7.5YR3/3暗褐色 シルト質埴壤土	7.5YR6/4にぶい橙色 シルト質埴壤土 粒状15%	炭化物・石灰(肥料?)を含む。部分的にガラス瓶・空き缶・地山起源の角礫混入、草木根多い。軟質で空隙多い。
	b 地境盛土	7.5YR3/3暗褐色 シルト質埴壤土	7.5YR5/6明褐色 シルト質埴壤土 ブロック状15%	炭化物・石灰(肥料?)を含む。やや軟質。
II	a 表土・耕作土	10YR5/3褐色 シルト質埴壤土	7.5YR5/6明褐色 シルト質埴壤土 粒状30%	炭化物含む。中程度の固さ。
	b 耕作土	7.5YR4/3褐色 シルト質埴壤土	7.5YR5/6明褐色 シルト質埴壤土 ブロック状10%	炭化物含む。やや軟質だが上面のI b層より硬質。
III	旧表土	10YR5/3褐色 シルト質埴壤土	7.5YR6/6橙色 シルト質埴壤土 ブロック状30%	やや硬質。
IV	地山	7.5YR5/6明褐色 シルト質埴壤土		角礫を含む。崎山貝塚第6次調査基本層序IV層・昭和60年度調査区第4層に相当する。

(5) 遺構と遺物

1 遺構

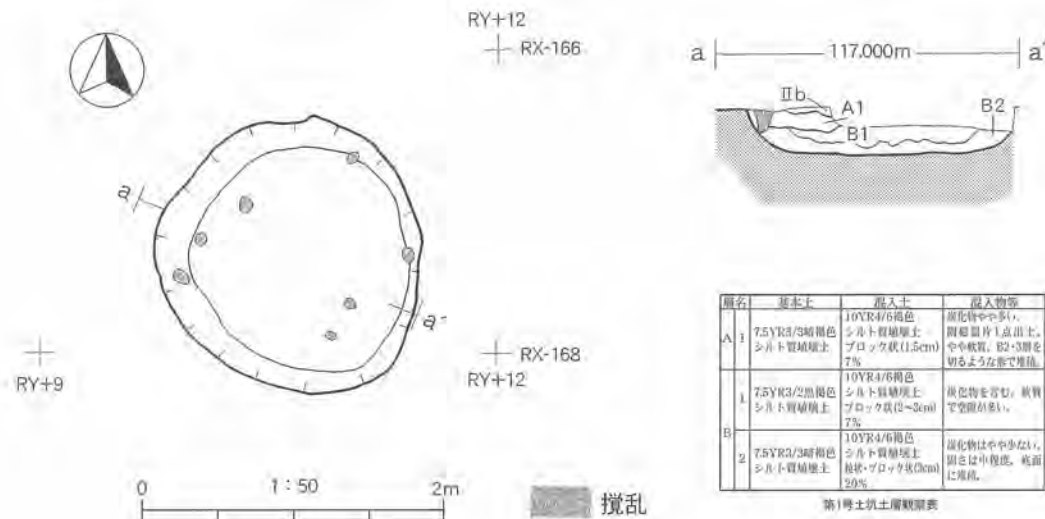
第1号土坑（第8図、第9図、PL1）

本土坑は中央調査区のⅠ・Ⅱ層除去後、東壁中央付近で一部を検出した。そこで調査区を一部拡張して全体を検出した。上面に標準土層Ⅱb層が堆積している。従って上部は近年の耕作により削平されていると思われる。平面形はほぼ円形で直径190cm程度、検出面からの深さは最大で30cm前後である。底面はほぼ平坦で、残存部を見る限り緩やかに立ち上がっている。

土層は大別してA層とB層からなる。ところどころに根穴のような攪乱が見られる。A層は暗褐色土で直径1.5cm前後の褐色土をブロック状に7%程度含み、炭化物がやや多い。B層は上下2層に分けられる。B1層はしまりがなくぼそぼそしているのが特徴で、上下の層よりやや明るい色調であり、褐色土ブロックの径もA層より大きい。B2層は底面に堆積しB1層に比べしまりがあり、炭化物はやや少なく、褐色土のブロックに径3cm以上の大型のものが含まれ、量も多い。

遺物はA1層で素焼きの土器片が1点出土している（第9図1）。口縁部片で全体の器形は不明であるが、最大径を口縁部に持つ。ロクロ成形されており、口端は平坦で丁寧に調整されている。時期は不明である。

遺構の時期・性格は不明である。



第8図 第1号土坑平面・断面図

2 遺構外出土遺物（第9図、PL1）

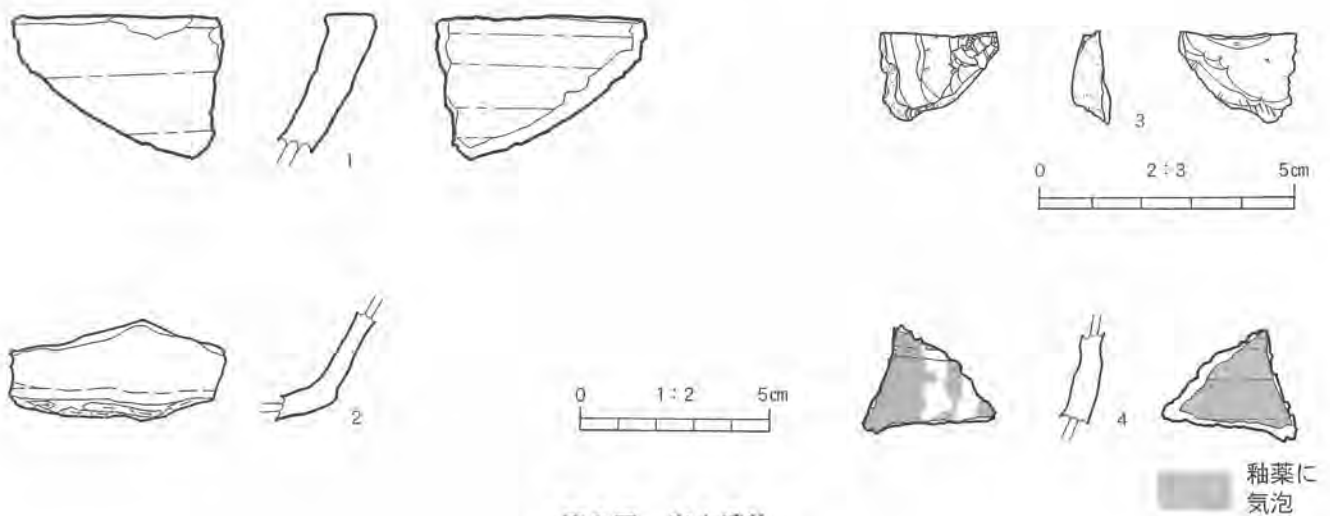
遺物はフレイクが1点、縄文土器と思われる土器片1点、土師器の坏の破片が1点、陶磁器片が1点である。このうち縄文土器と思われる破片は2センチ四方以下の小片で、磨滅が激しいことからここでは取り上げない。

第9図2（写真図版PL1-2）は土師器坏の体部破片である。調査区内の耕作に伴う攪乱から出土した。外面に比較的明瞭な稜を持つ。内面の屈折も比較的是っきりしているが、内外面ともに磨滅

が激しく、体部の調整は不明で内黒処理は見られない。底部も磨滅しているが、ヘラ削りの痕跡が見られる。断面は中央がサンドイッチ状に青灰色を呈し、焼成が悪い。奈良時代の所産と思われる。

第9図3(写真図版PL1-3)は剥片である。石質はオリーブ黒色の頁岩様で、白色の顆粒状構造を含む。側面に原礫面を残す。背面に見られる剥離の方向と、主要剥離面である腹面は異方向に剥離されている。背面に一部調整が見られるが、折損しており詳細は不明である。微細剥離はない。地表面で採集した。

第9図4(写真図版PL1-4)は陶磁器片である。胎土は青灰色で石英・長石の微粒子が熔融せずに含まれる。内・外面ともに青黒色に施釉されている。内・外面ともに釉薬のつやが失われ、気泡が生じている部分がある。緩やかな稜があり、口縁部付近と思われる。表採品である。



第9図 出土遺物

(5) まとめ

崎山貝塚の発掘調査はこれまで20次にわたっているが、今回の調査区に最も近い場所で行われた発掘調査は、昭和59・60年の宅地化に伴う緊急調査、及び平成3年度個人住宅建築に伴う第6次調査である。今回の調査区からはほぼ北方向に約150mの距離である。第6次調査の際には中期中葉～末葉の竪穴住居跡3棟、中期末葉の遺物包含層が検出されており、今のところこれが崎山貝塚の遺構が確認された最南西端ということになる。今回の調査範囲内では、縄文時代の遺構と確認できるものは検出されなかった。今回の調査範囲では地山までの堆積土が薄いため遺構の残りが悪い可能性もあり、崎山貝塚の広がりやを即断する事は出来ないが、遺構外遺物の少なさなどから考えて、本調査区付近では崎山貝塚に関係する縄文時代の遺構が存在する可能性は少ないと考えられる。『崎山貝塚—範囲確認調査報告書—』(『崎山貝塚 1995』)によれば、第6次調査区周辺(第214図:昭和36年度崎山貝塚周辺地形図)が崎山貝塚の限界ラインとされており、この所見とも合致するものと考えられる。

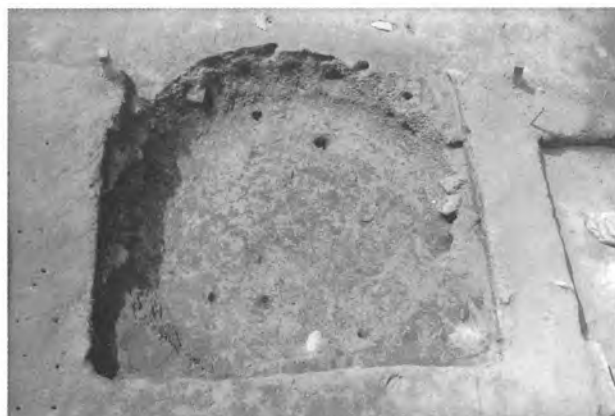
写 真 图 版



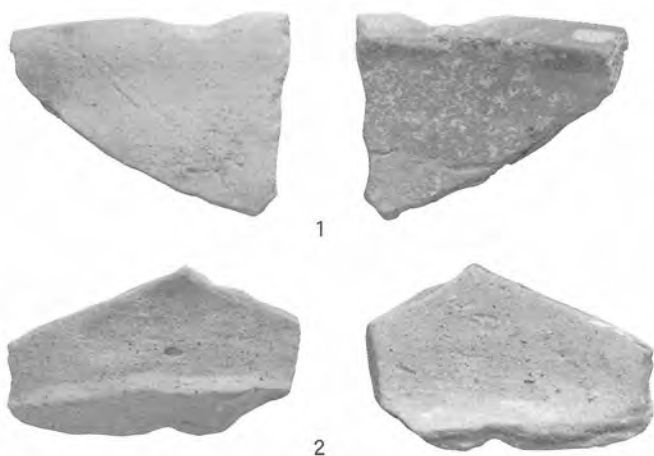
1. 調査区全景（北東から）



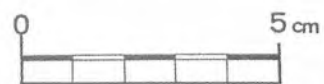
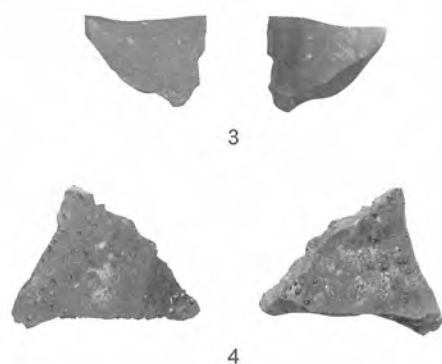
2. 第1号土坑土層堆積状況（南西から）



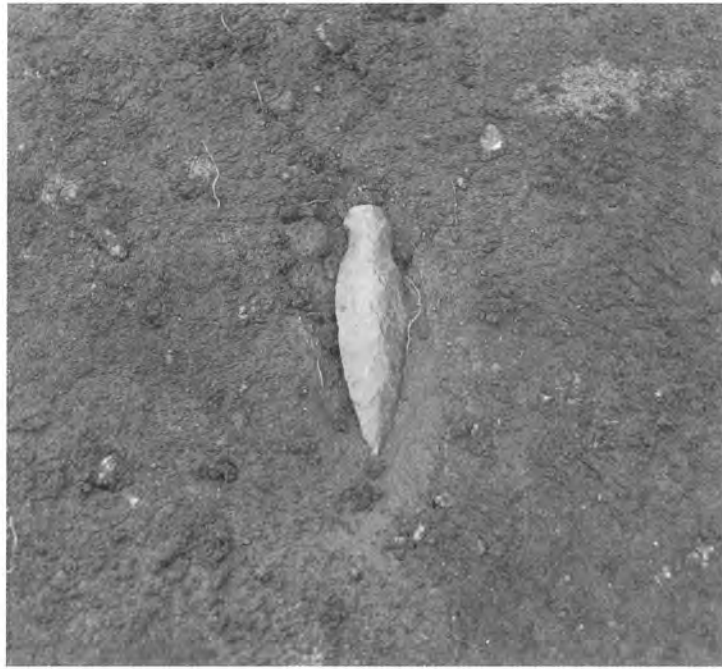
3. 第1号土坑完掘状況（東から）



4. 出土遺物



わせとち
早稲枋Ⅱ遺跡第7次調査



石器出土状況

3 早稲栃Ⅱ遺跡第7次調査

(1) 本調査に至る経過

宮古市早稲栃Ⅱ遺跡第7次調査は大字崎鉾ヶ崎地区内において実施された個人住宅建築関係の緊急調査である。住宅の建築計画は平成15年2月に施工主から提出された「埋蔵文化財の有無及びその取扱いについて」の照会に際して知ることとなった。宮古市教育委員会（以下、市教育委員会）は現地確認を行った結果、開発予定地域は周知の遺跡内であることから、今後の取扱いについては事前に市教育委員会と協議をする旨を工事主体者に回答した。その後、市教育委員会と工事主体者で協議を重ね、市教育委員会は予定地を工事するには試掘調査が必要である事を工事主体者に伝え、工事主体者と協議した結果、調査日程、調査体制が決まり次第に試掘調査を行うことになった。

同年4月、市教育委員会は工事予定地内における遺構・遺物の包蔵状況を確認するため試掘調査を実施した。調査の結果、予定地に遺構・遺物を確認し、今後、予定地を工事するには事前に発掘調査が必要であるとの結論に至った。5月、工事主体者に発掘（本）調査が必要であると回答し、埋蔵文化財の保存を配慮されたい旨を伝えたが、工事予定地の変更はできないとする工事主体者の意向を踏まえ、市教育委員会は緊急に本調査を実施することとなった。以上の経過により、6月より本調査を実施することになった。

市教育委員会には、試掘調査の実施前に工事主体者から平成15年4月4日付で文化財保護法57条の2第1項の規定による発掘届出書が提出された。これに対し、岩手県教育委員会からは「工事着手前に試掘調査を実施する」、「調査の結果重要な遺構が発見された場合は、保存について別途協議する」旨の指導通知が工事主体者に交付された。なお、調査着手後、市教育委員会は平成15年6月30日付、教生第150号で文化財保護法58条の2第1項の規定による発掘調査の実施を岩手県教育委員会に報告している。

発掘調査の実施にあたり調査日程等について検討することとなり、内部協議により平成15年度の市内遺跡発掘調査事業としてこれを実施することとなった。

(2) 調査の経過とこれまでの調査概要（第10図、第11図、P L 5）

発掘調査は工事対象範囲（400.54m）のうち宅地部分と整地を目的とした盛土部分を調査対象面積（330.20m）として実施した。残りの部分については試掘調査により遺構・遺物の分布が小さいことが分かっていたため、遺構・遺物の有無、遺構の性格を把握するための確認調査としてトレンチを設定して調査を実施した。

調査は6月3日から開始し、測量・確認調査・本調査区内の表土と盛土の除去・遺構確認・遺構精査・測量の工程で進行した。調査地西部の確認調査から行い、表土除去後遺構確認作業をしたが、地山がかなり掘削されていた。後世の攪乱により地山が改変されたこと、遺構・遺物は確認されなかったことから掘り上がりの測量、土層堆積状況の記録を終えた6月6日に確認調査を終了した。

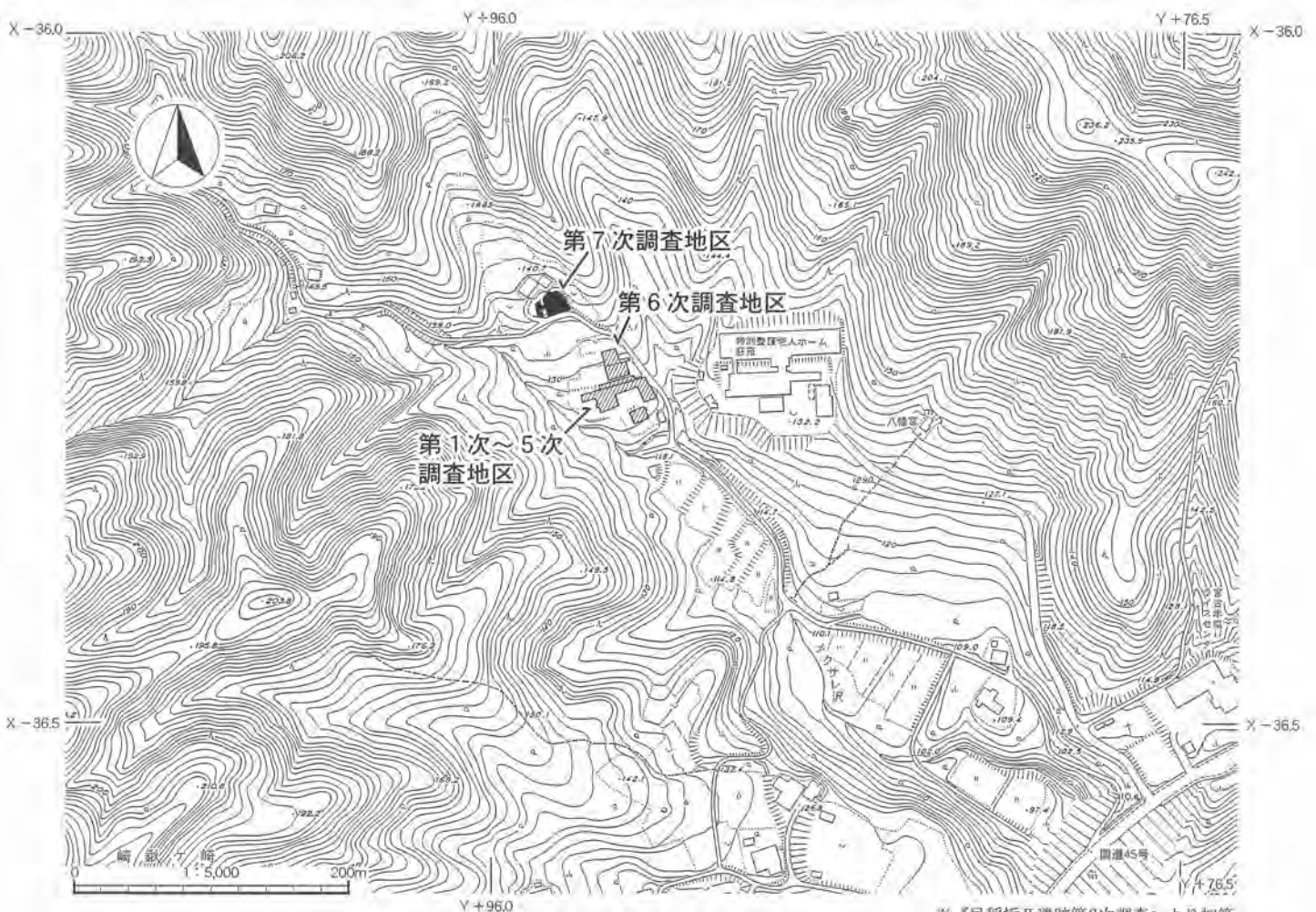
6月10日から本調査を実施する。本調査区のうち、北西部の一部は電信柱埋設のため未調査部分とした。調査区の東部は試掘調査により盛土が厚いことを確認したため、表土・盛土を重機で除去することになった。重機稼働後、座標杭を設置し、人手による調査に着手した。試掘調査では調査区の東部において旧表土層とその下の遺物包含層までを確認していたが、地山までの土の堆積状況を調べるため、調査区の東西と南北に土層観察用のベルトを設定した。ベルト設定後、調査区東部を中心に、土色の変化に注意しながら層位ごとに土を除去し遺構の有無を精査した。

調査開始時より縄文土器片を中心に遺物が多数出土し、土坑状の落ち込みも複数確認した。さらに、調査区南東部の調査区壁付近にて堆積土を掘り込んでいる竪穴住居跡と思える弧状の落ち込みも確認した。しかし、落ち込みのプランは堆積土の浅い西側で追うとかなり困難であったため、完全にはプランを把握できなかった。遺構確認後、遺構内の精査に入る。弧状の落ち込みは竪穴住居跡（第7号竪穴住居跡）と判断し、覆土からは縄文時代晩期終末前後の土器の台付脚部破片が出土した。遺構精査では遺構の土層堆積状況、平面図の記録、写真撮影を行った。遺構の精査終了後は堆積土をさらに掘り下げ遺構確認を行った。

調査区東部の遺物包含層を除去後、調査区全域に調査を広げて地山面上での遺構確認を行う。地山層を掘り込む土坑を多く確認し、随時、遺構精査に入る。特に調査区西部においては、長楕円形の土坑（第15号土坑）と長軸が1m程の楕円形の土坑（第17号土坑）を検出した。遺構精査終了後、調査区全域の地形測量を行った。

調査区内のベルトと調査区東部の調査区壁においては、土層の堆積状況の図面を記録し写真撮影を行った。調査区東部においては、遺物包含層が4層堆積している様子が把握できた。

7月末、竪穴住居跡の精査終了後に調査区南東部の調査区壁が大雨のため崩落してしまった。このため、調査部分を調査範囲の端まで拡張した。拡張時に第8号竪穴住居跡から焼土が集中しているのを確認し、当住居跡の炉跡と判断し精査を続行した。炉跡周辺の床面からは縄文時代晩期終末以降の遺物が多く出土するようになった。この炉跡と第8号住居跡の拡張した部分の精査が終了した8月8日、



第10図 調査地区と周辺地形図 (1 : 5,000)

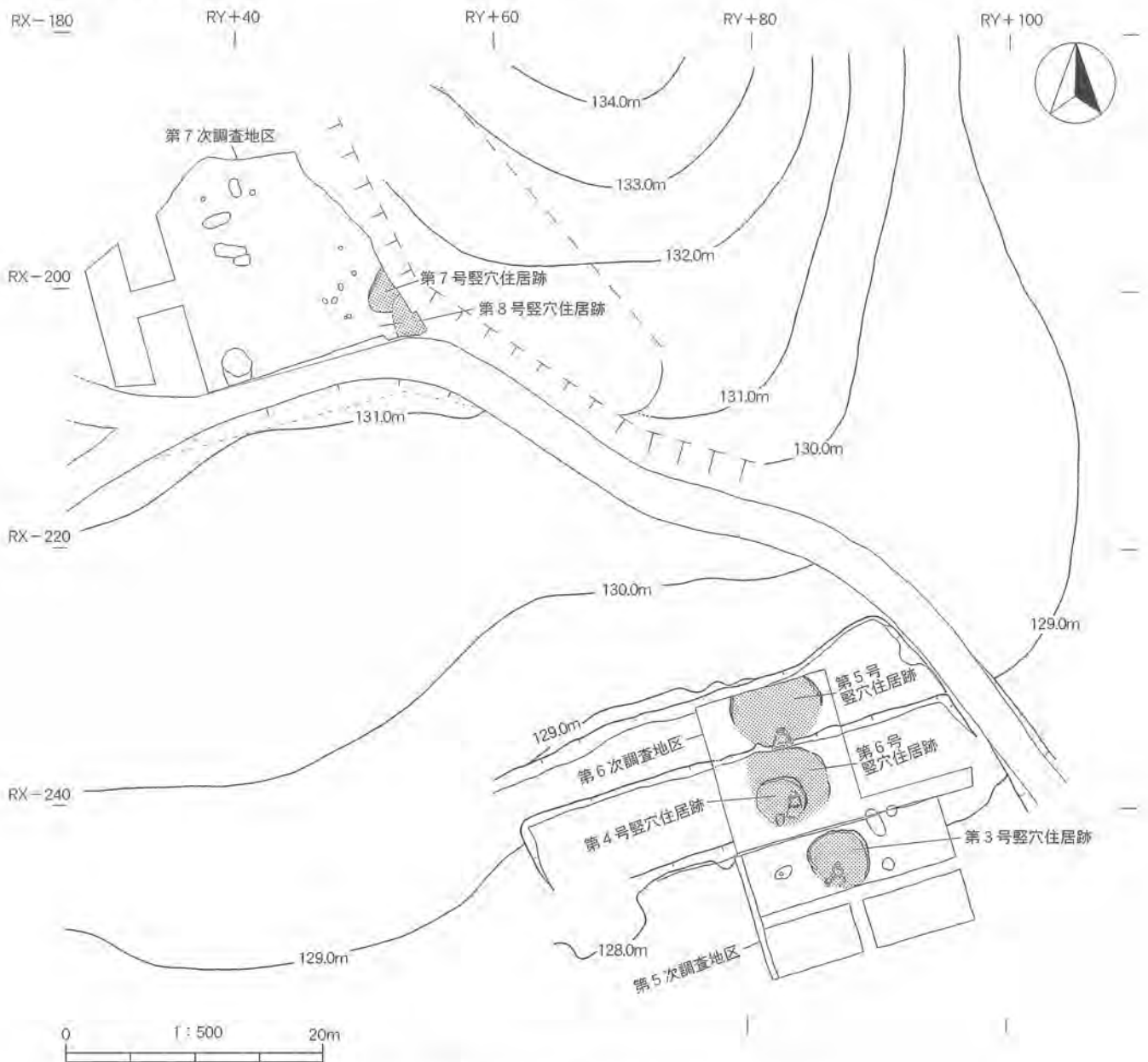
※『早稲橋Ⅱ遺跡第6次調査』より加筆

発掘調査の全てを終了することとなった。

資料整理作業は12月から開始した。平成15年度は図面の整理・修正、写真整理、遺物の洗浄・注記・接合・選別分類・拓本を行う。平成16年度には2次原図の作成、遺物の実測を行う。また、出土した土器片に付着した炭化物と炉跡から出土した炭化材について自然科学分析（樹種同定・年代測定）を外部に委託した。平成17年度は遺構・遺物のトレースと報告書作成にあたった。

早稲栃Ⅱ遺跡はこれまで6次に亘る調査が行われており、縄文時代前期・中期の遺構と遺物が調査されている。特に、第5次・第6次においては縄文時代中期後半の竪穴住居跡4棟が集中して検出されている。

第1次・第2次調査では石囲炉2基と周溝、複式炉を伴う竪穴住居跡が1棟調査され、周溝内と周辺から出土した遺物から竪穴住居跡の時期を大木8b式と特定されている。この他、2層の遺物包含層が確認され、下の層からは中・後期の遺物と混在しているものの、早期末葉と前期前葉の繊維土器が出土している。



第11図 第5次～第7次調査区全体図（1：500）

第3次調査は第1次・第2次調査の100m程南の遺跡南端部に位置する。土坑・ピットなどが調査されているが、遺物が出土せず土坑の性格・時期は不明である。

第4次調査は第1次・第2次調査の北側に隣接する。時期不明の土坑が調査されている他、2層の遺物包含層が確認され、第1次・第2次調査とほぼ同様、縄文時代前期前葉から中期後半の土器が出土している。

第5次調査は第4次調査の北側に隣接する。1棟の竪穴住居跡と土坑・ピット、炉跡が調査されている。竪穴住居跡は石組みによる複式炉をもち、住居跡の覆土からは大木10式の土器が出土している。また、土坑1基の覆土からは大木2b式の土器が出土し、前期前葉の遺構と考えられている。

第6次調査は第5次調査の北側に隣接する。重複しあう竪穴住居跡2棟と単独の竪穴住居跡1棟、第5次調査に続く土坑2基が調査された。3棟の竪穴住居跡はいずれも石組みによる複式炉をもち、竪穴住居跡の時期は大木9式期（1棟）と大木10式期（2棟）に特定されている。第5次調査で検出された大木10式期の竪穴住居跡を含めると、住居跡は1列に、等高線に対してほぼ直交して検出されている。

以上から、早稲栃Ⅱ遺跡は縄文時代中期を主体とした集落遺跡であることが確認され、居住域は調査区周辺にも広がる可能性が指摘された。また、第6次調査においては早期末葉、前期前葉の遺物包含層も確認されている。

第2表 第1次～第6次調査要旨

調査回数	検出遺構	調査面積	調査年	調査地点	報告書
第1次調査	石囲炉2基（第2・3号炉：縄文中期）	250㎡	1988	崎銀ヶ崎 第7地割 字鬼越2 番5	『早稲栃Ⅱ遺跡第1次・第2次 発掘調査報告書』 宮古市埋蔵文化財発掘調査報告 書39 1992
	遺物包含層（縄文前期・中期）				
	土坑1基（第1号土坑：縄文時代）				
第2次調査	竪穴住居跡（第1号土坑：縄文時代）	100㎡	1991	"	"
	土坑2基（第2・3号土坑：縄文時代）				
	馬埋葬土坑1基				
第3次調査	竪穴状遺構（第2号竪穴状遺構：縄文時代）	112㎡	1992	崎銀ヶ崎 第7地割 字鬼越2 番10	『崎山遺跡群Ⅶ－平成4年度発 掘調査概報－』 宮古市埋蔵文化財発掘調査報告 書40 1993
	土坑1基（第4号土坑：縄文時代）				
	小ピット5基（P1～P5）				
第4次調査	土坑2基（第5・6号土坑）	90㎡	1993	崎銀ヶ崎 第7地割 字鬼越2 番13	『崎山遺跡群Ⅷ－平成5年度発 掘調査概報－』 宮古市埋蔵文化財発掘調査報告 書41 1994
	遺物包含層（縄文前期・中期）				
第5次調査	竪穴住居跡（第3号竪穴住居跡：縄文中期）	133㎡	1994	"	『宮古市内遺跡発掘調査概報 1－早稲栃Ⅱ遺跡・崎山貝 塚－』 宮古市埋蔵文化財発掘 調査報告書47 1995
	土坑4基（第7～10号土坑：縄文時代）				
	小ピット17基（P6～P22）、炉跡1基				
第6次調査	竪穴住居跡（第4～6号竪穴住居跡：縄文時代 中期）	135㎡	1997	崎銀ヶ崎 第7地割 字鬼越2 番17	『早稲栃Ⅱ遺跡第6次調査－市 内遺跡発掘調査報告書4－』 宮古市埋蔵文化財発掘調査報告 書61 2003
	土坑2基（第7・8号土坑の続き）				
	遺物包含層（縄文早期～中期）				
第1～6 次調査	竪穴住居跡6棟（縄文時代中期）	820㎡		崎銀ヶ崎 第7地割 字鬼越2 番5・10・ 13・17	
	竪穴状遺構1基（縄文時代）				
	石囲炉2基（縄文中期）、炉跡1基				
	土坑10基（主に縄文時代）、小ピット22基				
	遺物包含層（縄文早期・中期）				
馬埋葬土坑1基					

(3) 調査体制（平成15～17年6月5日）

調査主体	宮古市教育委員会	教育長	中屋定基
調査統括	伊藤賢一	宮古市教育委員会生涯学習課長	（～平成15年度）
	佐々木剛	〃	生涯学習課長（平成16年度～平成17年6月5日）
事務担当	佐藤慎一郎	〃	生涯学習課長補佐兼係長
調査員	竹下将男	〃	生涯学習課主査
	高橋憲太郎	〃	生涯学習課主任文化財調査員
	鎌田祐二	〃	生涯学習課主任文化財調査員
	加納由美	〃	生涯学習課主任文化財調査員
	安原 誠	〃	生涯学習課文化財調査員
	長谷川真	〃	生涯学習課文化財調査員（調査担当）
	阿部 豊	〃	生涯学習課埋蔵文化財発掘調査員
	江口邦泰	〃	生涯学習課埋蔵文化財発掘調査員（調査担当）

平成17年6月6日から

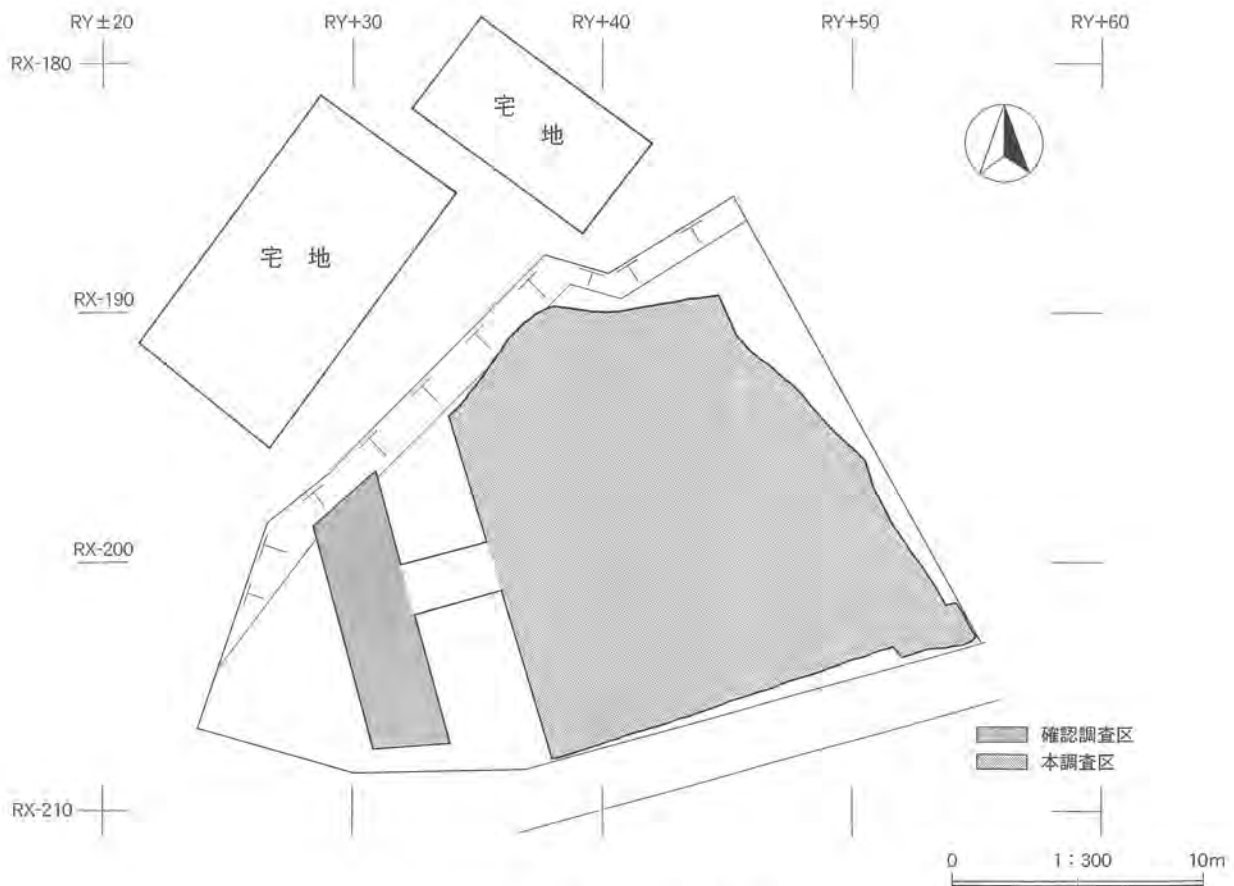
調査主体	宮古市教育委員会	教育長	中屋定基
調査統括	関沢 敏	宮古市教育委員会文化課長	
事務担当	佐藤慎一郎	〃	文化課長補佐兼文化係長
	竹下将男	〃	文化課文化財係長
調査員	高橋憲太郎	〃	文化課主査
	鎌田祐二	〃	文化課主任文化財調査員
	加納由美	〃	文化課主任文化財調査員
	安原 誠	〃	文化課主任文化財調査員
	長谷川真	〃	文化課文化財調査員（報告書担当）
	阿部 豊	〃	文化課埋蔵文化財発掘調査員
	江口邦泰	〃	文化課埋蔵文化財発掘調査員（報告書担当）
発掘調査作業員	姉石良夫	在原正利	大沢裕明 大下義文 坂本晃 島田義道 鳥居義文 山根保行
資料整理作業員	越田真理子	村松光子	

なお、地権者の小林壮六様から多大なるご協力を賜りましたことを記します。

(4) 調査内容

・調査地区（第12図）

調査地区は字鬼越2-14に所在する。早稲枋Ⅱ遺跡の北部にあたり、これまでの調査の中で最も高所にある。周囲は南向きの緩斜面が南北に広がり、調査区の西にはメクサレ沢が流れている。調査前は道路に隣接した宅地内の平坦な庭で、道路よりも1m程高い段差ができていた。このため、当初は道路工事の影響で調査地区も削平を受けているものと思われたが、試掘調査により旧地形は西から東へ緩やかに傾斜し、調査区の西部では削平を受けている可能性はあるものの、調査区東部では厚く盛り土されて



第12図 調査範囲図 (1 : 300)

いたことで遺物包含層が良好に残っていたことが分かった。

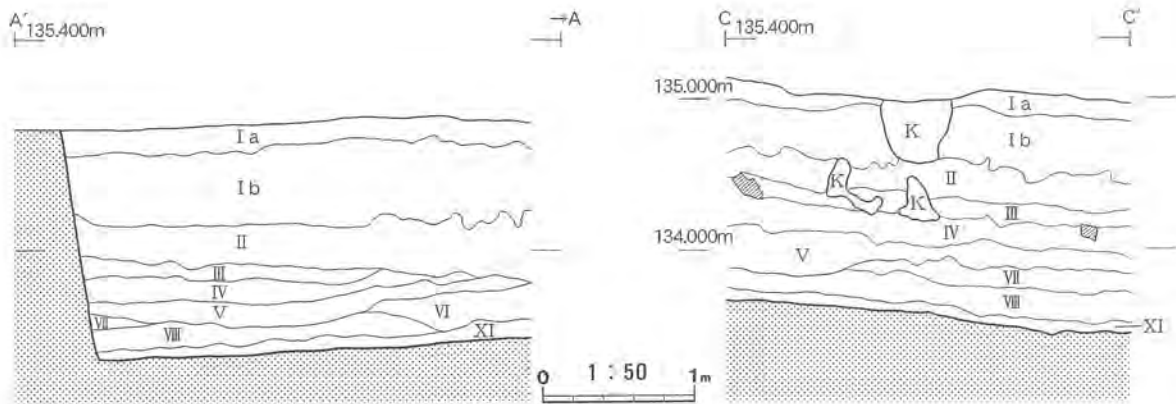
・基本層序 (第13図、第14図、P L 3、4、6～9)

堆積土の土層観察は試掘調査のトレンチ壁と、表土・盛土除去後に後からトレンチ壁と繋がるように設定した本調査区時のベルト、そして調査区東部の調査区壁の状況で行っている。観察の結果、調査区西部は堆積土が薄く、表土から50cm程の厚さで地山に達している。調査区東部では地山が傾斜していることもあり、表土から地山までは1 m50cm程の厚さがあった。遺物包含層は4層確認したが、各層とも薄く、遺物包含層全ての最大層厚は60cm程であった。遺構は遺物包含層で確認したものと地山直上で確認したものとがある。以下、基本土層について記述する。

- I a 層 黒褐色シルト質壤土 (10YR3/1) を基本土とする。現表土層である。根が多く入り込んでいる。表面採集はできなかったが、層中からは土器、石器片が出土した。
- I b 層 暗褐色砂質埴壤土 (10YR3/4) を基本土とする。調査区全体を覆っている盛土層で、庭を整地する目的であったと考えられる。厚みは西部がどこもほぼ均一で30cm前後であったが、東へ行くほど厚くなり、東部での層厚は70～80cmであった。軟質で粘性はない。ビニール袋が含まれるが、東部ではパンコンテナー2箱分の鉄滓や羽口片が含まれ、南東端部では鉄製の寛永通宝が出土した。
- II 層 黒色シルト質埴土 (10YR2/1) を基本土とし、暗褐色土塊を少量混入している。I b 層直下のため旧表土層と考えられる。調査区東部のみ見られ、上位は安定せず凹凸が見られる。縄文土器・石器・礫・カーボン粒を含んでいる。硬質で粘性はややない。
- III 層 黒褐色砂質埴壤土 (10YR3/1) を基本土とし、暗褐色土塊を混入している。遺物包含層で

ある。調査区東部にのみ見られ、層厚は10cm前後と薄く、中から縄文土器・石器・礫が混入している。やや軟質で粘性はややない。竪穴住居跡上にはこれに似たⅢ'層がある。

- IV層 暗褐色砂質埴壤土 (10YR3/4) を基本土とし、灰暗褐色土粒を混入している。遺物包含層である。カーボン粒の他、白色粒子を混入しているのが特徴で、周囲の土層に比べ明瞭である。調査区東端に限り見られ、特に縄文後期の土器片が集中して出土した。また、今次で検出した2棟の竪穴住居跡はこのIV層を掘り込んでいる。層厚は20cm前後である。硬質で粘性がある。
- V層 黒褐色シルト質埴壤土 (10YR3/2) を基本土とし、黒褐色土粒子を多量に混入している。遺物包含層である。Ⅲ・IV層よりも西に広がり、土質はシルト質である。カーボン粒の他、IV層同様に白色粒子を混入している。遺物はこの層が最も多く出土した。層厚は20cm前後である。硬質で粘性がある。
- VI層 黒褐色シルト質埴壤土 (10YR3/1) を基本土とし、暗褐色土塊を混入している。遺物包含層である。遺物包含層の中で最も厚く、層厚は10～40cm前後である。V層よりも西に広がっている。カーボン粒・直径2cm大以下の小礫を比較的多く混入している。遺物はV層に比べ極端に少なくなる。やや硬質で粘性がある。



第13図 基本土層図

第3表 基本土層注記表

	基本土	混入土	しまり・粘性・混入物
I a	黒褐色シルト質埴壤土 (10YR3/1)		硬質、粘性なし、カーボン粒
I b	暗褐色砂質埴壤土 (10YR3/4)		やや硬質、粘性なし、カーボン1%、礫2%
II	黒色シルト質埴壤土 (10YR2/1)	暗褐色土塊2%	硬質、粘性ややなし、カーボン粒1%、礫5%
III	黒褐色砂質埴壤土 (10YR3/1)	暗褐色土塊5%	やや硬質、粘性ややなし、カーボン粒1%
IV	暗褐色砂質埴壤土 (10YR3/4)	灰暗褐色土粒5%	硬質、粘性あり、カーボン粒1%、白色、粒子10%
V	黒褐色シルト質埴壤土 (10YR3/2)	黒褐色土粒子10%	硬質、粘性あり、カーボン粒2%、白色、粒子10%
VI	黒褐色シルト質埴壤土 (10YR3/1)	暗褐色土塊5%	やや硬質、粘性あり、カーボン粒1%、礫5%
VII	暗褐色埴壤土 (10YR3/4)	黒褐色土塊1%	硬質、粘性あり、中振火山灰粒・塊7%
VIII	黒色シルト質埴壤土 (10YR2/1)	黒褐色土塊3%	硬質、粘性あり、礫1%
IX	褐色シルト質埴壤土 (10YR4/4)	地山塊5%	硬質、粘性ややあり、礫5%
地山	黄褐色シルト質埴壤土 (10YR5/6)		硬質、粘性あり、礫5%



第14図 早稲橋Ⅱ遺跡第7次調査全体図 (1:100)

- Ⅶ層 暗褐色壤土(10YR3/4)を基本土とし、黒褐色土塊を少量混入している。調査区東端部の一部でしか見られず、縄文前期の十和田火山を給源とする中振火山灰の下部に相当する黄褐色テフラ粒・塊を7%混入する。火山灰は層状の堆積ではないことから流れ込み等による二次的な堆積である。層厚は5cm前後、遺物は出土していない。硬質で粘性がある。
- Ⅷ層 黒色シルト質壤土(10YR2/1)を基本土とし、黒褐色土塊を混入している。崎山貝塚第12次調査の第Ⅶ層に相当する黒色腐植土層に対応すると考えられる。調査区東端部にのみ見られる。層厚は20cm前後である。遺物は出土していない。硬質で粘性がある。
- Ⅸ層 褐色シルト質壤土(10YR4/4)を基本土とし、地山塊である黄褐色土塊を混入している。次の地山層へ至る漸移層である。遺物が少量出土した。硬質で粘性がややある。
- Ⅹ層 黄褐色シルト質壤土(10YR5/6)を基本土とする。地山層である。北部においては拳大以上の礫が集中していた。硬質で粘性がある。

今回の基本層序をこれまでの第1次～第6次調査と比較すると、今次の遺物包含層Ⅲ・Ⅳ層はどの調査でも確認されていない。また、Ⅴ・Ⅵ層においても明らかに一致する点がないことから対応関係は明確ではない。火山灰混土層であるⅦ層は第5次、第6次でも確認されているため対応すると推測されるが、一部にのみ見られる土層であるため、対応するかは不明である。

(5) 遺構と遺物

第7次調査で検出された遺構は竪穴住居跡が2棟、土坑が15基である。また、先述のように4層の遺物包含層が確認された。なお、遺構番号は第6次調査から通した番号である。

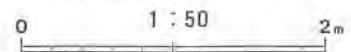
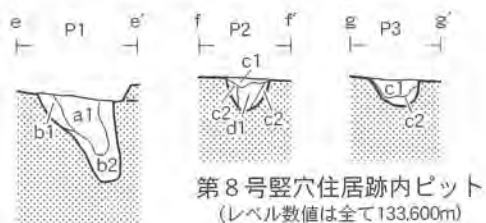
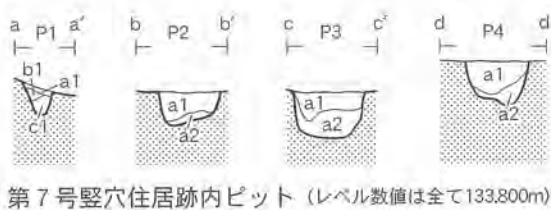
・竪穴住居跡(第15図～第17図、P L 4、9～11、14)

第7号竪穴住居跡(第15図、第17図、P L 9、10、14)

調査区の南東端部から検出され、調査区外へ続いている。遺構確認面は基本土層Ⅳ層中である。第8号竪穴住居跡と重複し、土層断面の切り合い関係から第7号竪穴住居跡が古い。調査区壁から南西へ竪穴住居跡のプランを確認したが、途中でプランが不明瞭となり、住居跡の立ち上がりも不明となったため、平面形は不明である。残存する最大の規模は長径3.2m、最大の短径2.1m、床面からの深さは0.4mを測る。貼床はないが、床面は平坦で、壁は緩やかに立ち上がっていた。床面上から炉跡は確認できず、浅いピットが4基検出された。ピットの深さはどれも30cm程度である。

埋土は2層からなり、自然堆積と考えられる。A1層は第7号竪穴住居跡の床面までをほぼ覆う埋土で、基本土層Ⅳ層に比べやや暗い。黒褐色砂質埴壤土(10YR3/2)を基本土とし、暗褐色土粒を少量混入している。A2層は壁際の層である。A1層に比べ暗く、黒色砂質埴壤土(10YR2/1)を基本土とし、黒褐色土粒子を多量に混入している。A1、A2層ともにカーボン粒・白色粒子を混入している。ピット内にはピット2～4が埋土上位にA2層と近似したa1、a2層が堆積していた。また、ピット1にはa1層の下に黒褐色砂質埴壤土であるb1層と暗褐色砂質埴壤土であるc1層が堆積していた。どの層も白色粒子を混入している。

出土遺物はA1層から縄文土器片が出土している。そのほとんどが微細であるが、北側の壁際付近で縄文土器の脚部破片が出土した(第17図1)。脚部はほぼ完全に残っており一周する。器形は底部に向かって緩やかに内反している。平行した8条の沈線を1周させることで浮文の効果を出し、脚部下位には2個1対の貼瘤を上下交互に6単位貼付している。2個の瘤の間は穿孔を施している。縄文時代晩期末葉大洞A'式に比定すると考えられる。



第7・8号竪穴住居跡埋土注記表

層名	基本土	混入土	しまり・粘性・混入物
III'	黒褐色砂質壤土 (10YR3/1)		やや軟質、粘性ややあり

第7号竪穴住居跡埋土注記表

層名	基本土	混入土	しまり・粘性・混入物
A1	黒褐色砂質壤土 (10YR3/2)	暗褐色土粒2%	軟質、粘性ややなし、カーボン粒3% 白色粒子10%
B1	黒色砂質壤土 (10YR2/1)	黒褐色土粒子10%	やや硬質、粘性ややあり、カーボン粒1% 白色粒子2%

第8号竪穴住居跡埋土注記表

層名	基本土	混入土	しまり・粘性・混入物
A1	黒褐色砂質壤土 (10YR2/1)	暗褐色土粒子5%	軟質、粘性ややなし、カーボン塊
B1	黒褐色砂質壤土 (10YR3/1)	黒色土粒子7%	やや硬質、粘性ややあり、白色粒子2% 礫土塊1%、礫土粒2%、カーボン塊5%

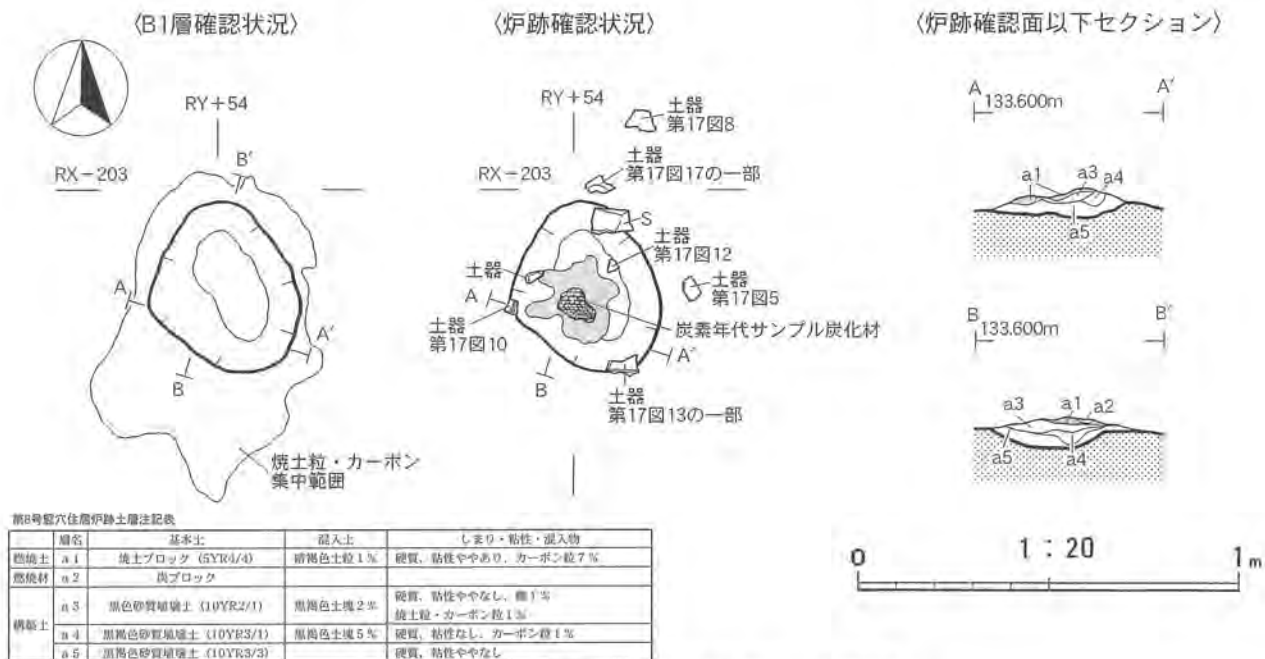
第7号竪穴住居跡内ピット埋土注記表

層名	基本土	混入土	しまり・粘性・混入物
P1~4 a1	黒色砂質壤土 (10YR2/1)	黒褐色土塊10%	硬質、粘性ややあり、白色粒子1%
P2~4 a2	黒色砂質壤土 (7.5YR2/1)	黒褐色土塊10%	硬質、粘性ややあり、白色粒子1%
P1 b1	黒褐色砂質壤土 (10YR3/1)		軟質、粘性あり
P1 c1	暗褐色砂質壤土 (10YR2/2)		硬質、粘性あり

第8号竪穴住居跡内ピット埋土注記表

層名	基本土	混入土	しまり・粘性・混入物
P1 a1	黒褐色砂質壤土 (10YR3/1)	褐色土塊3%	軟質、粘性ややなし、礫1%
P1 b1	黒褐色砂質壤土 (10YR2/3)	暗褐色土塊3%	硬質、粘性あり、礫・カーボン塊1%
P1 b2	黒褐色砂質壤土 (10YR2/2)	褐色土塊1%	軟質、粘性あり
P2-3 c1	黒褐色砂質壤土 (10YR2/1)	黒褐色土塊5%	やや軟質、粘性ややあり、白色粒子1%
P2-3 c2	黒色砂質壤土 (10YR3/1)	黒褐色土塊10%	やや軟質、粘性ややなし、白色粒子1%
P2 住居	黒褐色砂質壤土 (10YR2/3)		やや硬質、粘性ややなし、白色粒子1%

第15図 第7号、8号竪穴住居跡平面・断面図



第16図 第8号竪穴住居炉跡平面・断面図

帰属する竪穴住居跡の時期は、出土遺物より縄文時代晩期末葉の大洞A'式期と考えられる。

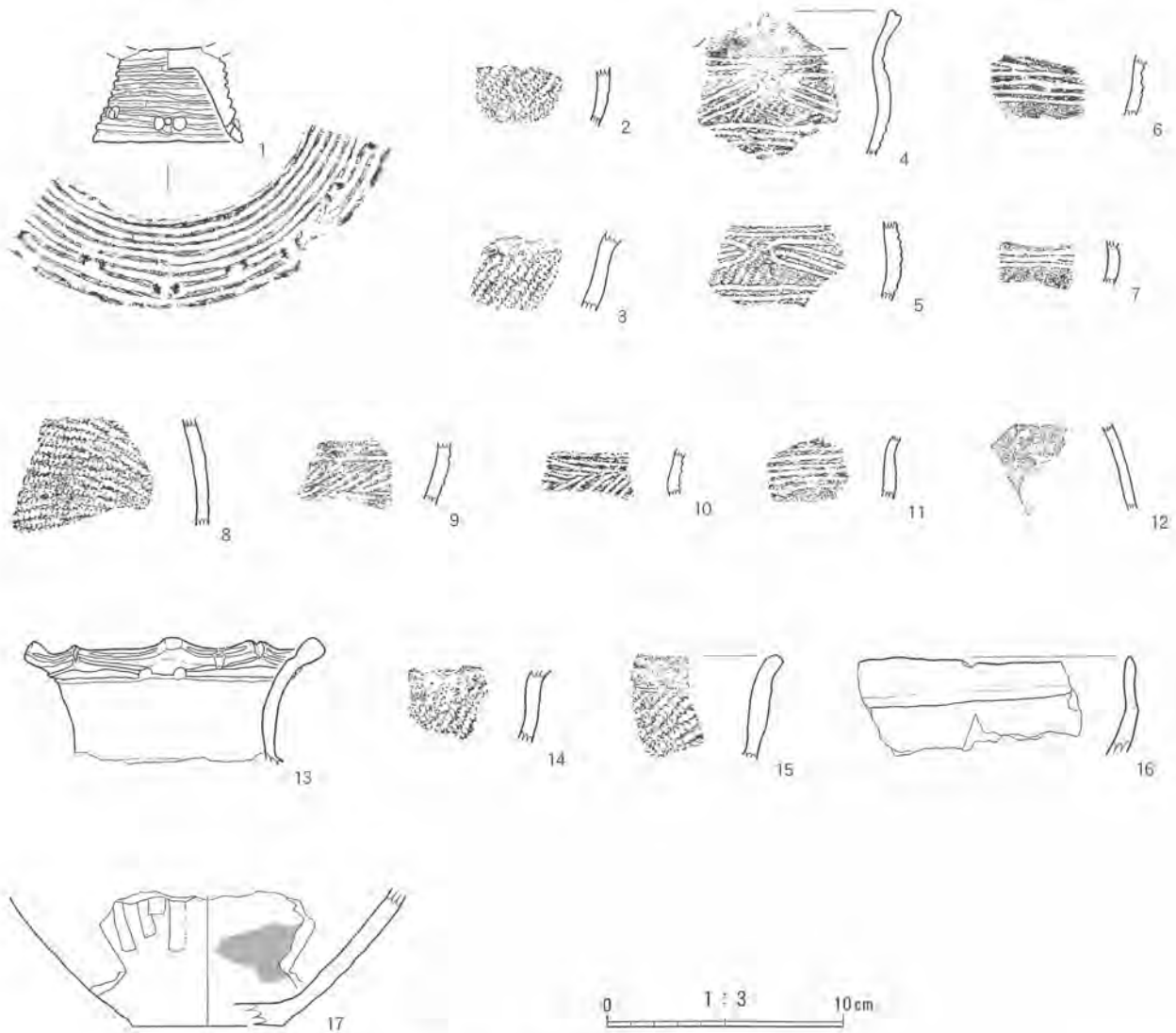
第8号住居跡（第15図～第17図、P L 4、10、11、14）

調査区の南東端部から検出され、調査区外へ続いている。遺構確認面は基本土層IV層中である。第7号竪穴住居跡と重複し、土層断面の切り合い関係から第8号竪穴住居跡が新しい。第8号竪穴住居跡は調査区壁の拡張後、第7号竪穴住居跡と重複していることが分かった。床面は炉跡周辺のみでしか把握できず、残存範囲を明確にすることはできなかったため、平面形は不明である。貼床はないが、床面は平坦で、壁は緩やかに立ち上がっていた。床面上から炉跡と考えられる焼土を確認し、柱穴と思われる深さ50cm程のピットが1基、深さ20cm程の浅いピットが2基検出した。

埋土は2層からなり、自然堆積と考えられる。A1層は竪穴住居跡の炉跡の周りを取り囲む覆土で、黒褐色砂質埴土(10YR2/1)を基本土とし、暗褐色土粒を混入している。第7号竪穴住居跡のA1層とは色調が暗く、白色粒子の有無で分けられる。B1層は炉跡を取り囲むように堆積している層で、焼土塊・カーボン塊を混入している。柱穴であるピット1はa1層が柱痕で、基本土が黒褐色砂質埴土(10YR3/1)で褐色土塊を混入している。軟質で粘性はややない。a1層の周りには硬質で粘性のあるb1層とa1層と同様、軟質であるb2層が堆積している。小ピットであるピット2、3の埋土上位(c1層)はA1層に近似であった。ピット2のd1層は柱痕と考えられる。

炉跡は焼土・カーボンが混じるB1層の除去後にプランが明瞭になった。ほぼ中央にアメーバ状に焼土塊が集中し、焼土塊の中央の窪みには長さ8cm、幅10cmの炭化材が検出された。炉跡の平面形は不整楕円形で、規模は長径46cm、短径は40cmで深さは10cmを測る。焼土塊の厚さは4cmである。周辺からは大形の礫が出土していたが、炉跡に伴うかは不明で、炉跡の種類は地床炉と考えられる。埋土はa1層が焼土塊(5YR4/4)、a2層が炭化材である。a3～5層は埋土であるが、燃焼により硬化している様子はなく、同様に掘り込みの上面も硬化していなかった。なお、焼土塊の中央の窪みから検出された炭化材については、竪穴住居跡の帰属時期を検討するため放射性同位体炭素年代測定を依頼し、炭化材の樹種を特定するため樹種同定の試料とした(7「分析・同定」参照)。

出土遺物は主に炉跡内と床面直上から出土した。第17図2、3はA1層から出土した粗製土器片である。3は口縁部を空白にして胴部にLR縄文を横位に施文しており、晩期の鉢形土器と考えられる。4～9は床面直上、10～12は炉跡埋土、14～17はB1層から出土した遺物である。4、5は鉢形土器片で同一個体と考えられる。緩やかな頂部からなる山形口縁で、断面は胴部が膨らみ、頸部で括れ、口縁部で外反している。頂部には刻みを入れ、口縁部を無文にし、胴部はRL縄文を地文にしている。頸部と胴部下半に2条の平行沈線を横位に引き、胴部上半には変形工字文と斜位の平行沈線文を施している。6は胴部破片で4条の沈線を横位に引いている。7は縄文を地文にし、3条の沈線を横位に引いている。8はLR縄文を斜位・縦位に施文した胴部破片で、断面は若干膨らみながら内傾している。9、10は同一個体である。2条からなる横位の平行沈線文と矢羽根状沈線文からなり、胎土は4、5に近似している。11は6と同一個体の可能性がある。12は無文の胴部破片である。13は床面直上と炉跡の焼土塊付近から出土した土器片との接合資料である。8単位の波状口縁を呈する壺形土器で、口縁部の4分の3程が残存している。断面は頸部下端で肩をもち、口唇部は肥厚し、頸部から口縁部に向かって外反している。波頂部は刻みのないものと刻みが入る小突起状のものが交互に続き、口縁部には、2個1対の貼瘤を刻みのない波頂部の下に配し、貼瘤を起点にして三角状の浮線文を施して



第17図 第7号、8号竪穴住居跡出土土器

いる。内面には1本の沈線を横位に引いている。14、15は3と同様な粗製土器である。16、17は無文の土器で同一個体である。16は口縁部破片で、口縁部に明瞭な稜をもち、器形は口縁部で屈曲しほぼ直立している。17は底部破片で内面の一部に赤彩を施している。胴部下半には縦方向のナデ調整を施している。

上記の土器の他、楕円状の大形礫が床面上に出土している。規模は長径14.5cm、短径11.0cmで、重量は2.5kgある。表面に使用痕は見られないが滑らかである。

帰属時期は出土遺物を重視し、縄文時代末葉から弥生時代初頭期の範疇に入ると考えられる。

・土坑（第18図～第20図、P L 11～13）

土坑は15基検出した。調査区西部では大規模の土坑が目立ち、調査区東部では小規模のピット状のものが多く。

第11号土坑

第11号土坑は調査区の北西側で検出され、遺構確認面は地山面である。平面形は楕円形を呈し、長径1.49m、短径0.77m、深さ0.31mを測る。底面は平坦で、壁は緩やかに立ち上がる。

堆積土は3層に分けられ、B1層は南北両側の壁際にのみ堆積している。堆積状況から自然堆積である。A1層・C1層には礫が多数混入している。遺物は出土していない。

第12号土坑

第12号土坑は調査区の北西側で検出され、遺構確認面は地山面である。平面形は不整な楕円形を呈し、長径2.32m、短径0.80m、深さ0.36mを測る。底面は平坦で、壁は緩やかに立ち上がる。

堆積土は3層に分けられ、堆積状況から自然堆積である。第11号土坑同様、礫が多数混入している。遺物は出土していない。

第13号土坑

第13号土坑は調査区の北西側で検出され、遺構確認面は地山面である。平面形は楕円形で、長径0.34m、短径0.30m、深さ0.14mを測る。底面はすり鉢状を呈し、壁は緩やかに立ち上がる。

堆積土は2層に分けられ、堆積状況から自然堆積である。遺物は出土していない。

第14号土坑

第14号土坑は調査区の北西側で検出され、遺構確認面は地山面である。平面形は不整な円形で、長径0.41m、短径0.34m、深さ0.12mを測る。底面はすり鉢状を呈し、壁は緩やかに立ち上がる。

堆積土は2層に分けられ、ともに基本土は黒色壤土である。堆積状況から自然堆積である。遺物は出土していない。

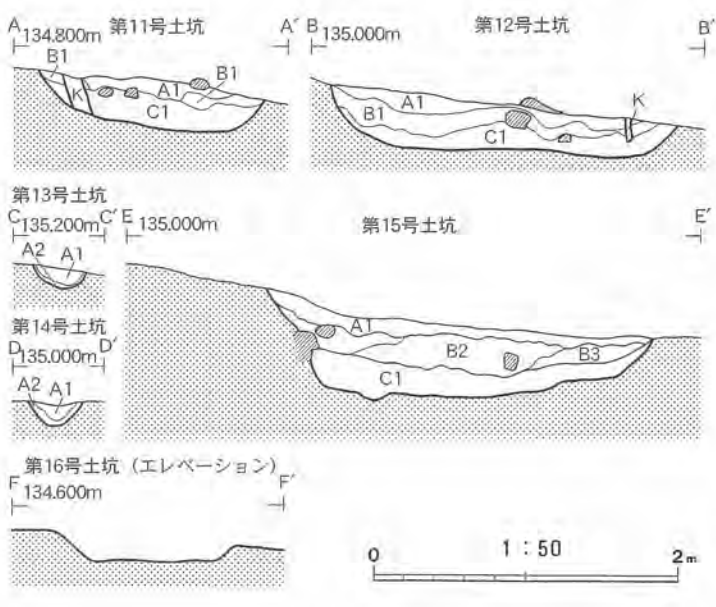
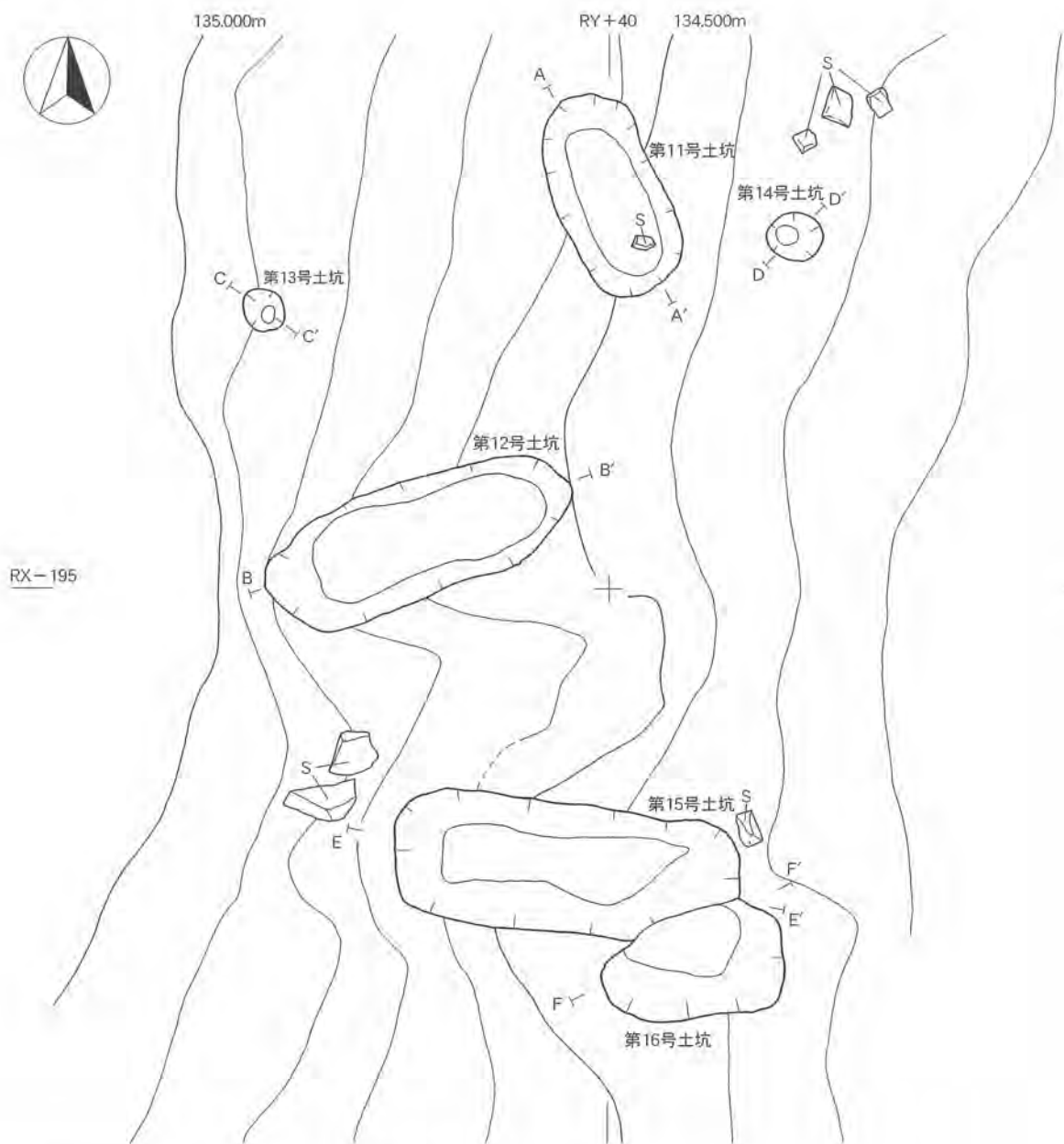
第15号土坑

第15号土坑は調査区の北西側で検出され、遺構確認面は地山面である。第16号土坑と重複しているが、新旧関係は不明である。平面形は隅丸の長方形を呈しており、長辺2.51m、短辺0.93m、深さ0.52mを測る。底面は西側が最も深く、東側に向かって緩やかに立ち上がる。

堆積土はA層～C層に大別され、さらにB層は3層（B1～B3層）に細別される。堆積状況から自然堆積である。遺物は出土していない。

第16号土坑

第16号土坑は調査区の北西側で検出され、遺構確認面は地山面である。第15号土坑と重複しているが、新旧関係は不明である。平面形は不整な楕円形を呈し、長径1.32m、短径は残存値である



第11号土坑埋土注記表

層名	基本土	混入土	しまり・粘性・混入物
A1	黒褐色壤土 (10YR3/2)	暗褐色土粒子1層	硬質、粘性あり、礫
B1	暗褐色壤土 (10YR3/3)	にぶい黄褐色土塊1%	硬質、粘性あり
C1	にぶい黄褐色壤土 (10YR4/3)	暗褐色土粒子1%	硬質、粘性あり、礫

第12号土坑埋土注記表

層名	基本土	混入土	しまり・粘性・混入物
A1	黒褐色壤土 (10YR2/2)	暗褐色土粒子1%	硬質、粘性あり
B1	暗褐色壤土 (10YR3/3)	黒褐色土粒子1%	硬質、粘性あり、礫
C1	にぶい黄褐色壤土 (10YR4/3)	暗褐色土粒子1%	硬質、粘性あり、礫

第13号土坑伊藤土層注記表

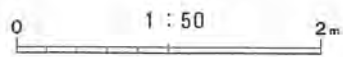
層名	基本土	混入土	しまり・粘性・混入物
A1	黒色砂壤土 (7.5YR2/1)	黒褐色土塊5%	硬質、粘性ややあり、赤色粒子
B1	黒色砂壤土 (10YR2/1)	黒褐色土塊1%	硬質、粘性あり

第14号土坑埋土注記表

層名	基本土	混入土	しまり・粘性・混入物
A1	黒色砂土 (10YR2/1)	暗褐色土塊1%	硬質、粘性あり
B1	黒色砂土 (7.5YR2/1)	黒褐色土塊5%	硬質、粘性あり、礫

第15号土坑埋土注記表

層名	基本土	混入土	しまり・粘性・混入物
A1	黒褐色壤土 (10YR2/3)	黒褐色土塊10%	硬質、粘性あり、礫
B1	暗褐色壤土 (10YR2/2)	黒褐色土塊1%	硬質、粘性あり、礫
B2	黒褐色壤土 (10YR2/3)	暗褐色土塊5%	硬質、粘性あり、礫
B3	黒褐色壤土 (10YR3/2)	暗褐色土塊5%	硬質、粘性あり、礫
C1	黒褐色壤土 (10YR2/3)	暗褐色土塊3%	硬質、粘性あり、礫



第18図 土坑平面・断面図 (1)

が0.75m、深さ0.18mを測る。遺物は出土していない。

第17号土坑

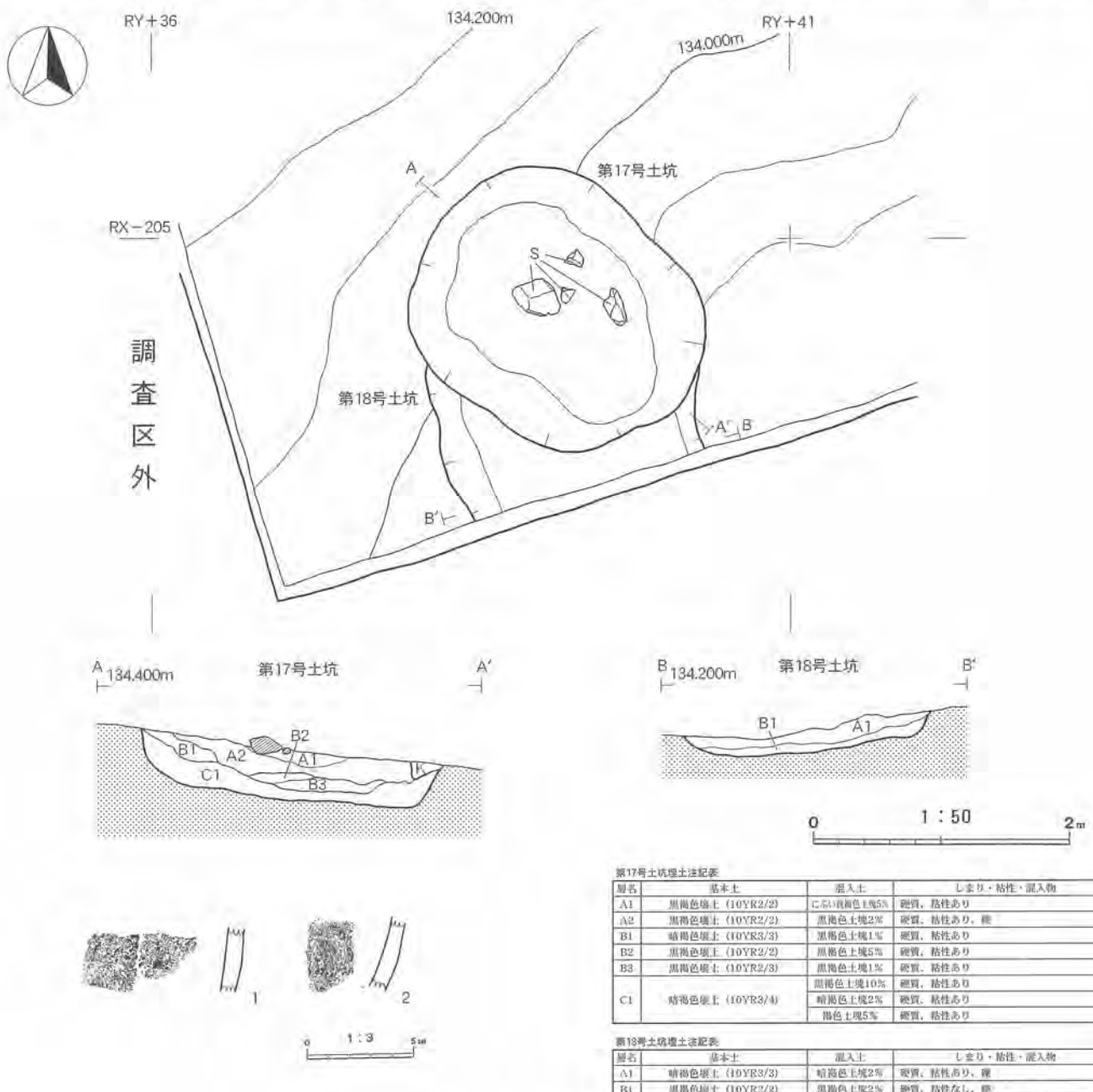
第17号土坑は調査区の南端で検出され、遺構確認面は地山面である。第18号土坑と重複し、新旧関係は本土坑の方が新しい。平面形は不整な円形を呈し、長径2.36m、短径1.96m、深さ0.38mを測る。底面は平坦で、壁は緩やかに立ち上がる。

堆積土はA層～C層に大別され、さらにA層・B層はそれぞれ細別される。A1層からは礫が出土している。C1層は地山に類似した土色をもつ。

土坑底面から縄文土器片が2点出土している（第19図1、2）。同一個体で無文である。時期は不明である。

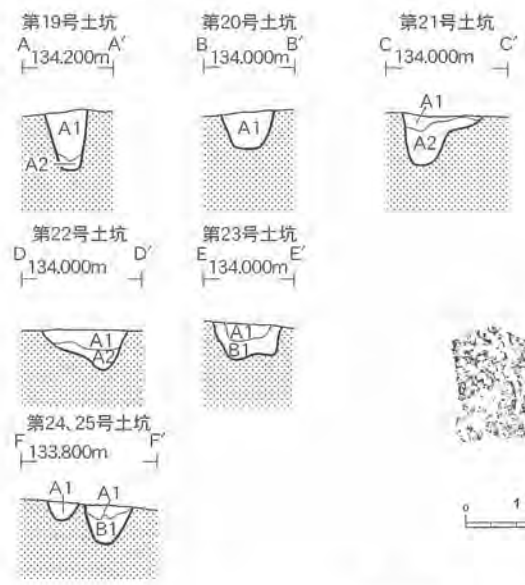
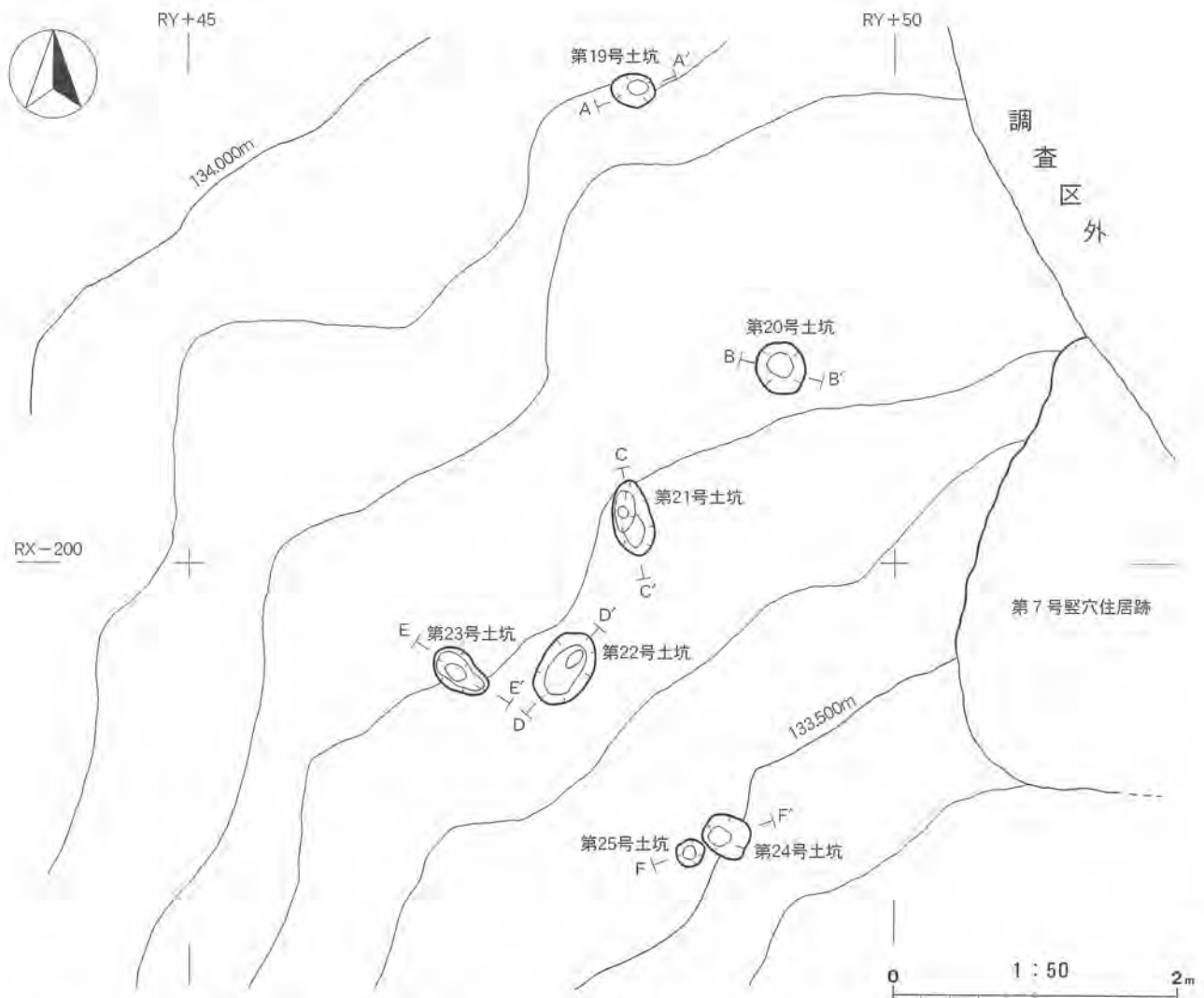
第18号土坑

第18号土坑は調査区の南端で検出され、遺構確認面は地山面である。第17号土坑と重複し、新



第19図 土坑平面・断面図(2)、出土土器

新旧関係は本土坑の方が古い。大半を第17号土坑に切られているため、平面形は不明である。残存値になるが、南北辺は1.29m、東西辺は1.95mを測る。深さは0.22mである。底面は平坦で、壁は緩やかに立ち上がる。



第19号土坑埋土注記表

層名	基本土	混入土	しまり・粘性・混入物
A1	黒色壤土 (10YR2/1)	黒褐色土塊1%	硬質、粘性あり、礫
A2	黒色壤土 (10YR2/1)	暗褐色土塊1%	硬質、粘性あり

第20号土坑埋土注記表

層名	基本土	混入土	しまり・粘性・混入物
A1	黒色壤土 (10YR2/1)	黒褐色土塊1%	やや硬質、粘性ややあり、礫

第21号土坑埋土注記表

層名	基本土	混入土	しまり・粘性・混入物
A1	黒色壤土 (7.5YR2/1)	黒褐色土塊5%	硬質、粘性あり、礫
A2	黒色壤土 (7.5YR2/1)	黒褐色土塊1%	硬質、粘性あり

第22号土坑埋土注記表

層名	基本土	混入土	しまり・粘性・混入物
A1	黒色壤土 (10YR2/1)	黒褐色土塊1%	硬質、粘性あり、礫
A2	黒色壤土 (10YR2/1)	黒褐色土塊1%	硬質、粘性あり

第24号土坑埋土注記表

層名	基本土	混入土	しまり・粘性・混入物
A1	黒色壤土 (10YR2/1)	黒褐色土塊10%	硬質、粘性あり
B1	黒褐色壤土 (10YR2/2)	暗褐色土塊1%	硬質、粘性あり

第25号土坑埋土注記表

層名	基本土	混入土	しまり・粘性・混入物
A1	黒色壤土 (10YR2/1)	黒褐色土塊1%	硬質、粘性あり
B1	黒褐色壤土 (10YR2/2)	黒色土塊3%	硬質、粘性あり

第20図 土坑平面・断面図 (3)、出土土器

堆積土は2層に分けられ、堆積状況から自然堆積である。遺物は出土していない。

第19号土坑

第19号土坑は調査区の南東端で検出され、基本土層IV層で確認している。平面形は楕円形を呈し、長径0.31m、短径0.24m、深さ0.40mを測る。底面は平坦で、壁は垂直に立ち上がる。

堆積土は2層に分けられ、堆積状況から自然堆積である。遺物は出土していない。

第20号土坑

第20号土坑は調査区の南東端で検出され、基本土層IV層で確認している。平面形は円形で、直径0.38m、深さ0.22mを測る。底面は平坦で、壁は緩やかに立ち上がる。

堆積土は1層である。遺物は出土していない。

第21号土坑

第21号土坑は調査区の南東端で検出され、基本土層IV層で確認している。平面形は楕円形で、長径0.53m、短径0.28m、深さ0.32mを測る。土坑南側の壁の立ち上がりにはテラス状の段がみられる。

堆積土は2層に分けられ、堆積状況から自然堆積である。遺物は出土していない。

第22号土坑

第22号土坑は調査区の南東端で検出され、基本土層IV層で確認している。平面形は楕円形で、長径0.55m、短径0.36m、深さ0.26mを測る。土坑北側が最も深く、南側に向かって緩やかに立ち上がる。

堆積土は2層に分けられ、堆積状況から自然堆積である。A1層から縄文土器片が1点出土している(第20図1)。磨滅がひどく文様は不明である。

第23号土坑

第23号土坑は調査区の南東端で検出され、基本土層IV層で確認している。平面形は不整な楕円形で、長径0.44m、短径0.27m、深さ0.23mを測る。底面は平坦で、壁は緩やかに立ち上がる。

堆積土は2層に分けられ、堆積状況から自然堆積である。遺物は出土していない。

第24号土坑

第24号土坑は調査区の南東端で検出され、基本土層IV層で確認している。第25号土坑と隣接している。平面形は不整な円形で、長径0.32m、短径0.30m、深さ0.27mを測る。底面はすり鉢状を呈し、壁は緩やかに立ち上がる。

堆積土は2層に分けられ、堆積状況から自然堆積である。遺物は出土していない。

第25号土坑

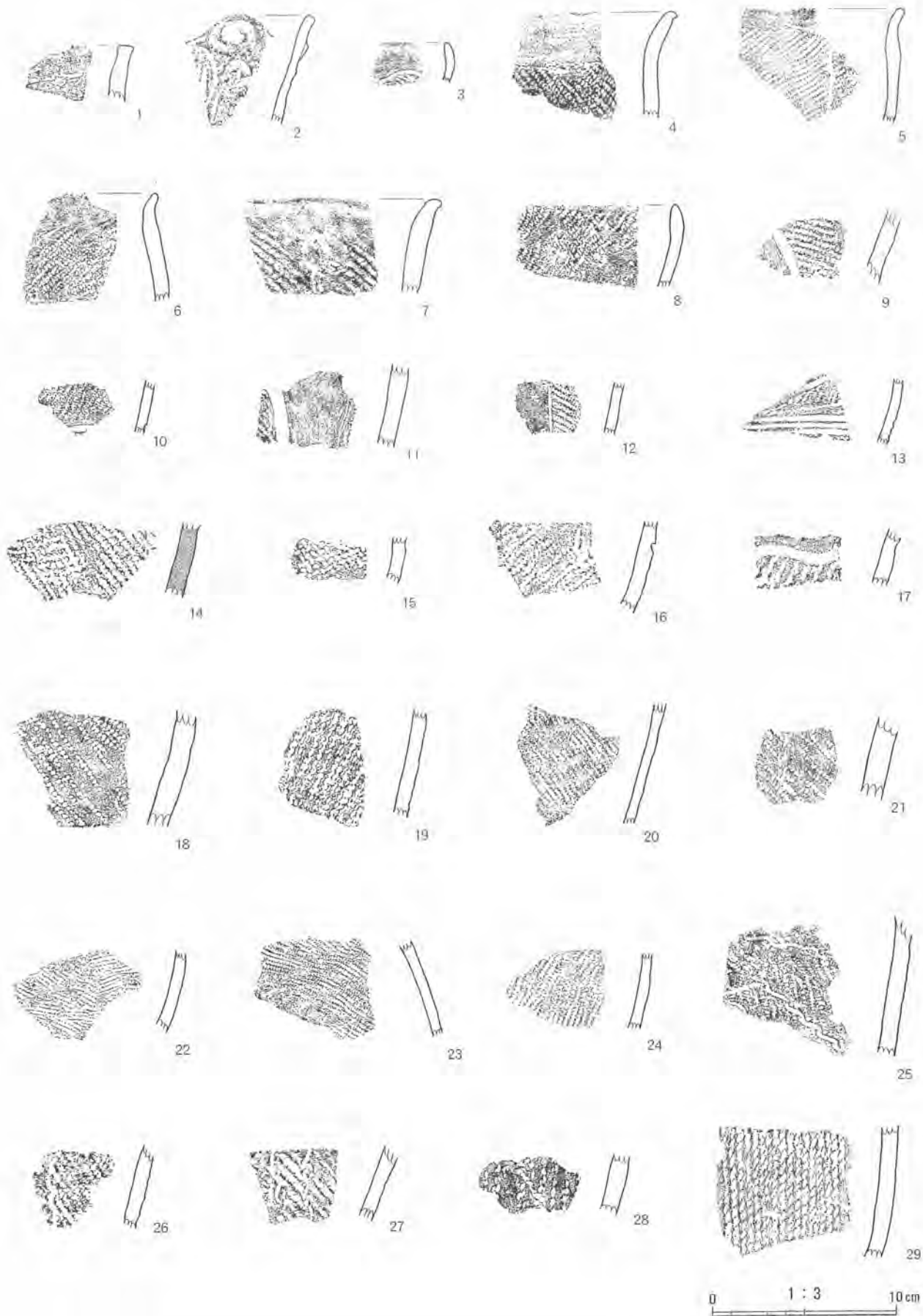
第25号土坑は調査区の南東端で検出され、基本土層IV層で確認している。第24号土坑と隣接している。平面形は円形を呈し、直径0.20m、深さ0.12mを測る。底面はすり鉢状を呈し、壁は緩やかに立ち上がる。

堆積土は1層である。遺物は出土していない。

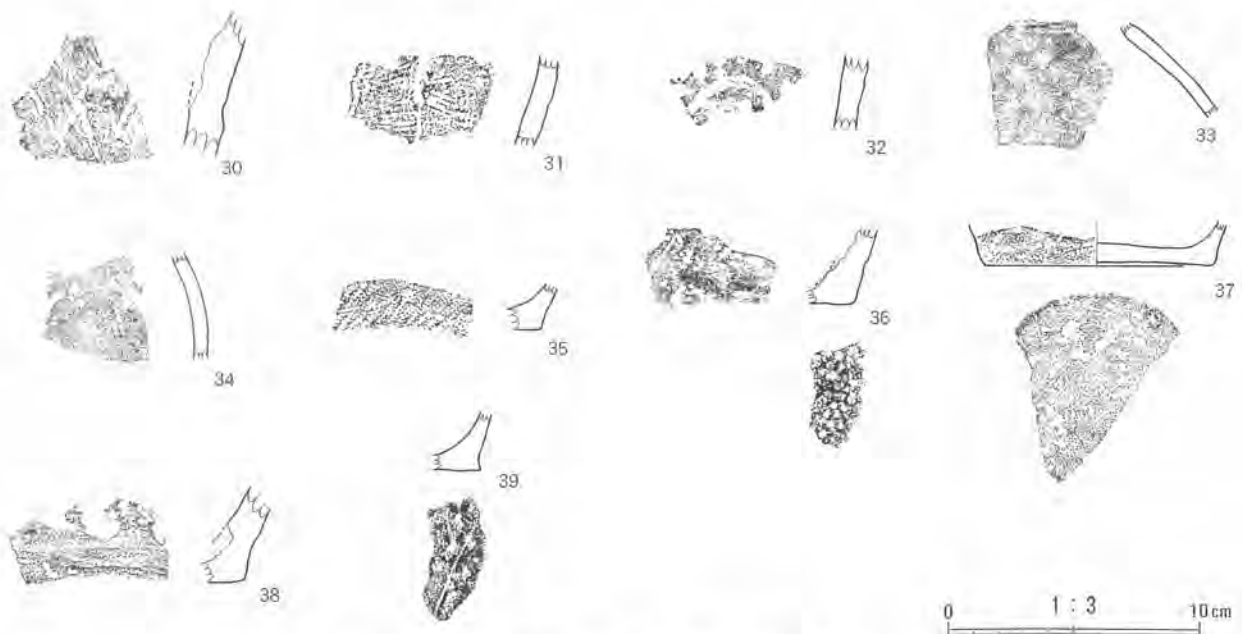
・遺構外出土遺物(第21図～第31図、P L 14～21)

調査地内では縄文土器、石器が約2,000点出土した。この他、鉄滓・羽口、鉄銭も出土している。

1～39は基本土層II層から出土した土器である。1～8は口縁部破片である。1は横位の結節縄文を施している。口唇部の断面は丸みをもたず、口唇上は平坦である。2は緩やかな山状口縁を有し、



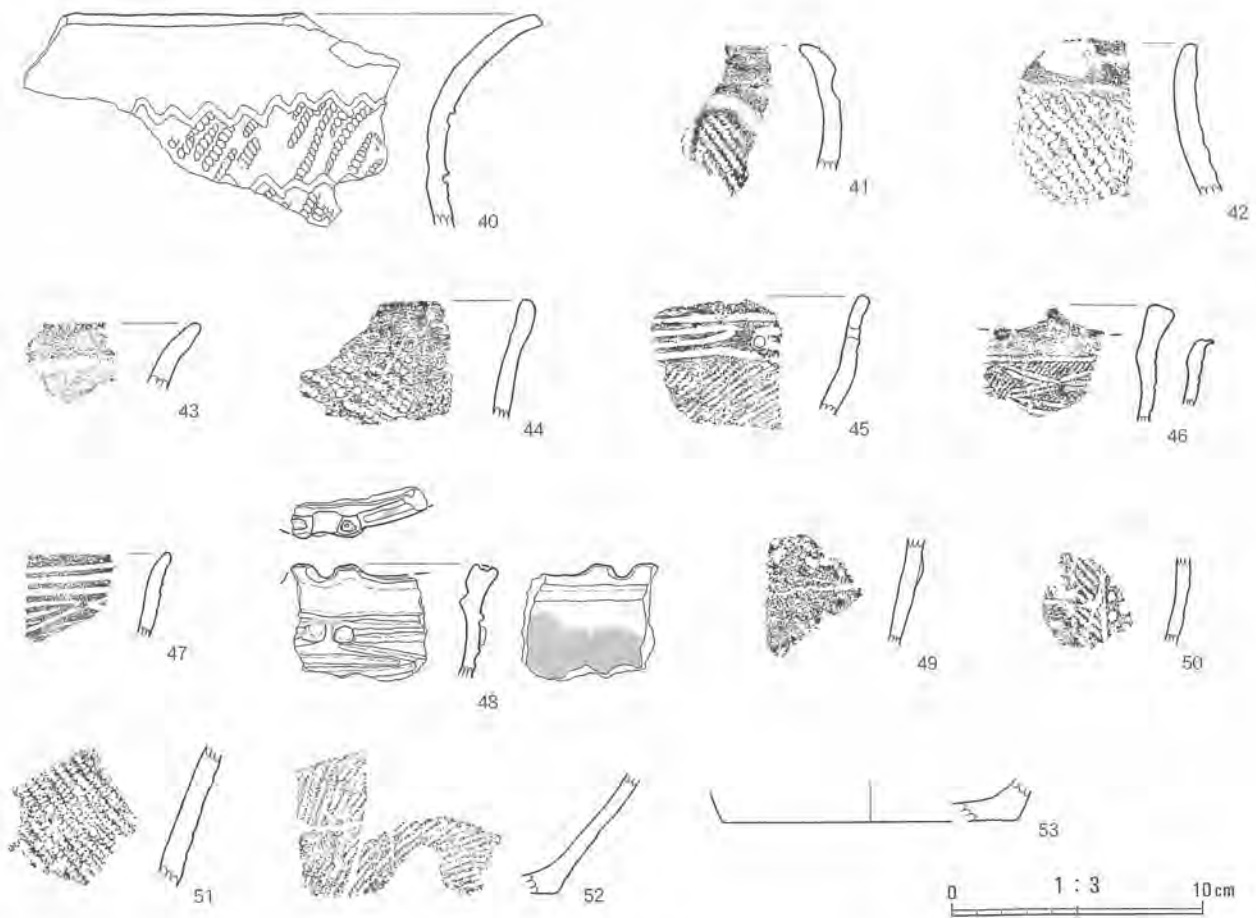
第21図 遺構外（Ⅱ層）出土土器（1）



第22図 遺構外（Ⅱ層）出土土器（2）

断面は外に開いている。突起の下に太い渦巻状沈線文を配し、口縁部には逆U字状沈線内に縄文を施している。3は断面が湾曲している。曲線状の沈線を引き、縄文を施している。4、5は口縁部で外に屈曲する断面で、口縁部に無文部を作り、4はRL縄文を横位に、5はLR縄文を横位に施している。また、4は口唇部に押圧を加えている。6は断面が4、5と異なり内傾している。双山からなる山形口縁を有し、口唇部に押圧を加え、LR縄文を横位に施している。7は無節R縄文を横位に施している。8は断面が口唇部で内に屈曲している。器面には口唇部直下からLR縄文を横位に施している。

9～34は胴部破片である。9～12は曲線状または縦位の沈線と縄文からなる。いずれも断面は外に開き、沈線を引いた後にRL縄文を横位に施している。10の内面にはやや丁寧なミガキを施し、薄手で焼成が良好である。12は横位の沈線文とLR縄文を横位に施している。13は3条の細い平行沈線を引き、縄文を縦位に施している。薄手で胎土は密である。14は胎土に繊維を混入している。器面にLR縄文を横位、縦位に施し、羽状の効果を出している。15は0段の条からなる横位の組紐縄文を施している。16はペン先状工具による刻み状沈線文を施し、LR縄文を横位に施している。17は波状の太沈線を横位に引き、撚糸文Rを施している。18は間隔の空いたLR縄文を縦位に施している。19は複節のRLR縄文を縦位に施している。20はRL縄文を横位に施している。21は断面が外反し、LR縄文を縦位に施している。22は節の細かいRL縄文を横位、斜位に施している。23は断面が内傾し、RL縄文を横位に施している。24はRL縄文を縦位に施している。25～27は縄文と結節縄文からなる。25は結節が斜位に走っており、RL縄文を斜位に施している。26、27は結節が縦位に走っており、26はLR縄文を縦位に施している。27の断面は若干外反している。28～30は撚糸文を施している。28は間隔の空いた撚糸文Lを施し、条が交叉した単軸絡条体第2類（山内 1979）である。29は密の撚糸文Lを施している。30は単軸絡条体第5類（山内 1979）である網目状撚糸文を施している。28～30は胎土に繊維は混入されていない。31は原体不明の縄文を施している。32は曲線状沈線の周りに連続して刺突を施している。33、34は無文の胴部破片で、薄手で内傾した壺形土器の破片と考えられる。33は強く内傾している。部位は胴部上半と考えられ、内面はミガキを施している。34の断面は膨らんでいる。



第23図 遺構外(Ⅲ層)出土土器

35～39は底部破片である。35は底部端までRL縄文を横位に施している。36は底部にLR縄文を横位に施している。底面には網代痕が残っている。不明瞭であるが、網代の編み方は「線の条が1本超え1本潜り1本送り」と考えられる。37は若干上げ底気味の底部で、底面には平行の2条の沈線が残っている。39は底面に沈線が残っている。

基本土層Ⅱ層の出土土器のうち時期の判別が可能なのは1～6、9～11、13～17、33、34で、1、14、15は前期、2、3は大木9式、9～11、17は中期後半～後期、4～6、13、33、34が晩期あるいは弥生時代初頭と考えられる。

40～53は基本土層Ⅲ層から出土した土器である。40～48は口縁部破片である。40は断面が胴部から口縁部に向かって大きく外反し外に開いている。口唇部下は無文で、頸部から下はLR縄文を横位に施した後に2列の連続山形沈線文を横位に施している。41は断面が内湾し、口唇部は角頭状を呈する。逆U字状の太沈線を引き、逆U字文内にRL縄文を横位に施している。42は断面が内傾し、口唇部付近でほぼ直立している。胴部にRL縄文を横位に施している。43は口縁部に段を有する。断面は大きく外に開いている。器面は無文である。44は口唇部が若干肥厚している。器面にLR縄文を縦位に施している。45は断面が胴部から口縁部に向かって外傾している。口唇部には双山の突起が付いている。2列の平行沈線を横位に引き、沈線間に楕円状の沈線を横位に配している。胴部にはLR縄文を横位に施している。また、口縁部に補修孔と考えられる穿孔が見られる。46は1山の突起を有し、口唇

部断面は肥厚している。断面は胴部が膨らみ、口縁部で若干外に開いている。口唇部上に沈線を引き、胴部は横位のLR縄文を地文とし、横位の沈線と2条の三角状沈線を引いている。47は3条の平行沈線を横位に引き、沈線による変形工字文を施し、中に斜位の沈線を引いている。48は双山突起がつき、突起上を押圧し口唇部上に沈線を引いている。断面は46と似ている。胴部には沈線を横位、斜位に引き、2個1対の貼瘤を施している。口縁部裏の内面には1本の沈線を横位に引いている。外面の沈線内と胴部裏の内面には炭化物が付着している。この土器付着炭化物については放射性炭素同位体年代測定を行った。その結果、補正年代が 2840 ± 40 BP、暦年較正年代で1048-967calBCの数値を示した。

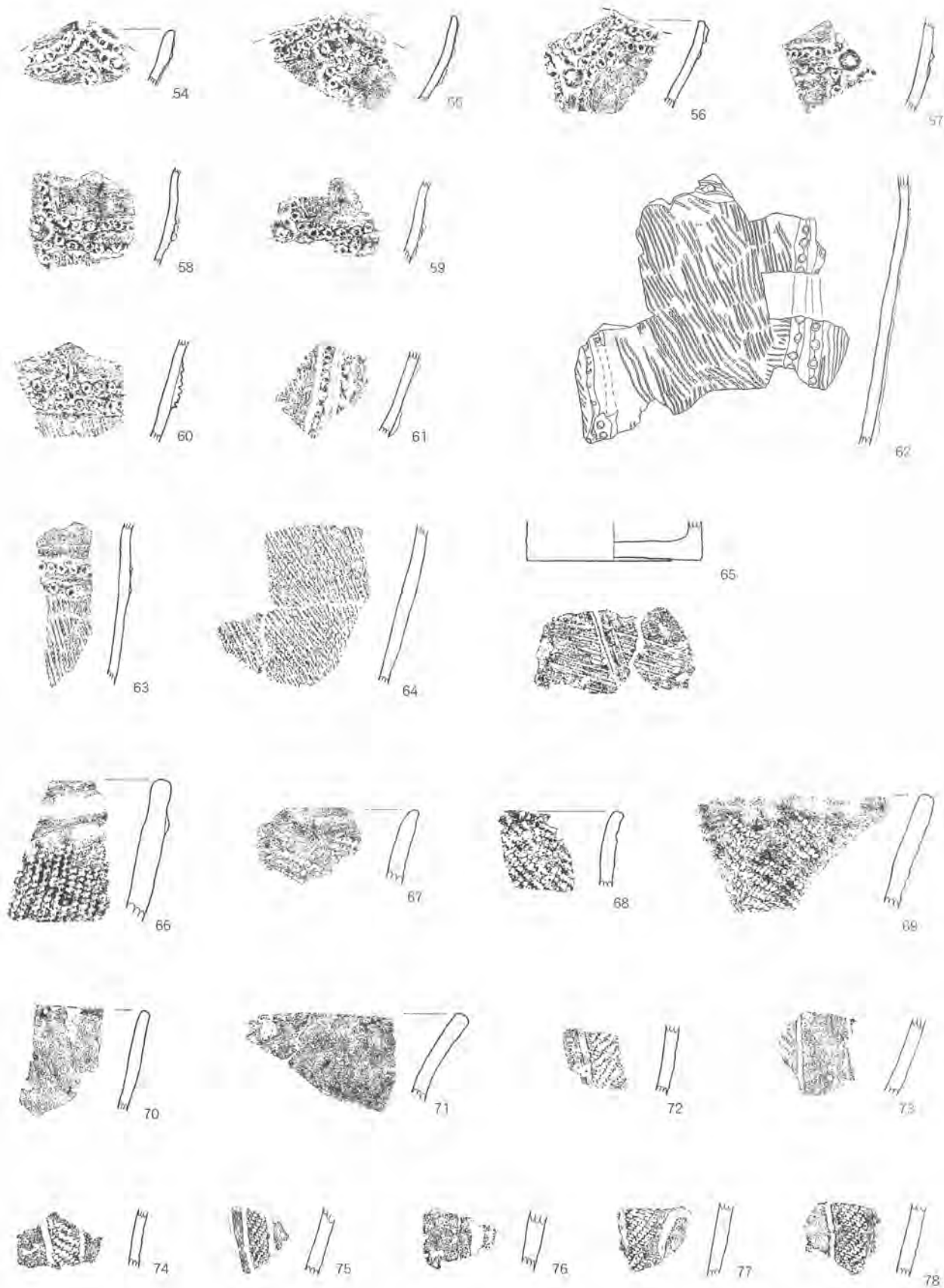
49~51は胴部破片である。49は横位の隆線を貼付している。50は縄文を地文とし、縦位の沈線を垂下させている。沈線の横に列点文を施している。51の断面は外反し、単節のLR縄文を縦位に施している。

52、53は底部破片である。52は底部端まで無節のL縄文を施している。53は残存状況が悪い無文の底部である。

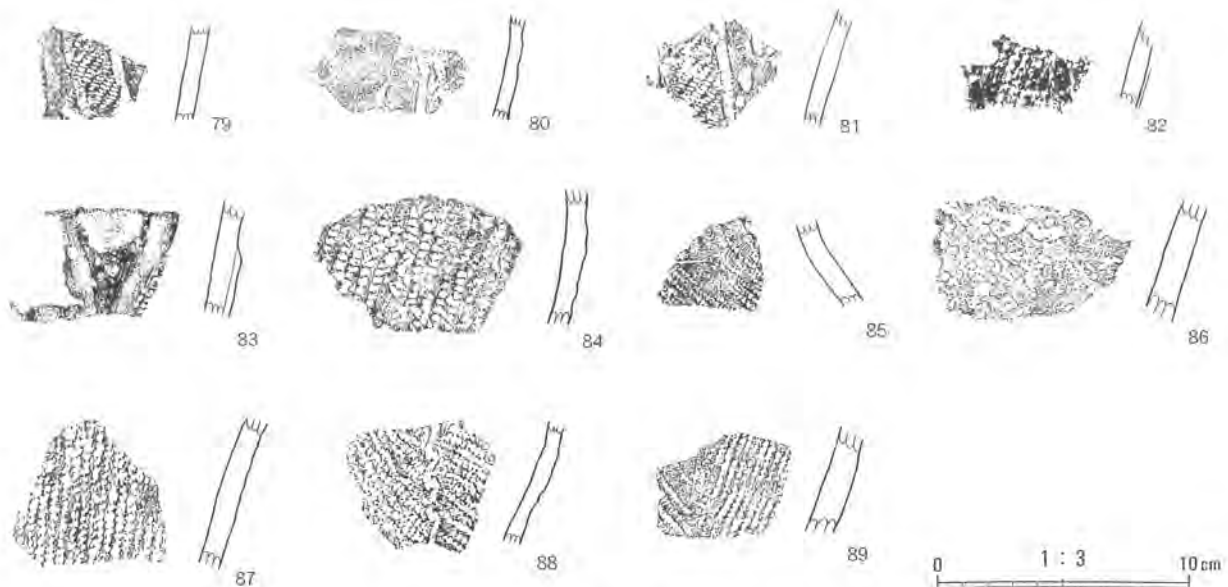
基本土層Ⅲ層の出土土器のうち時期の判別が可能なのは40、41、46~48、50で、40は大木4式、41が大木9式、50は中期後半、46~49が晩期あるいは弥生時代初頭、特に48は大洞A'式と考えられる。

54~88は基本土層Ⅳ層から出土した土器である。54~65は深鉢形土器の同一個体である。土器全般の器形は口縁部が外に開き、底部に向かって窄まり、底部はやや直立している。薄手で内面を丁寧に調整している。54~56は口縁部破片で、波状口縁を呈し、波頂部の口唇部には刻みを施している。54、55は口縁部には2列の隆線を縁に沿って平行に貼付した後、隆線上に円形刺突を連続して押圧している。波頂部上には凹みを施している。波頂部直下には同様の刺突を蛇行状隆線上に押圧している。56はY字状に2列の隆線を貼付した後、波頂部直下付近に刺突を押圧し、Y字状になった空白部に1個のボタン状の突起を貼り付けている。54~56から、口縁部の文様は、口縁に沿った2列の隆線を貼付後、隆線上に円形の連続刺突文を施し、波頂部直下には蛇行状またはY字状の隆線上に円形の連続刺突文を施し、1個のボタン状突起を貼付している。57~64は頸部もしくは胴部破片である。57はL字または逆L字状に隆線を貼付した後、隆線上に円形の刺突を連続して押圧し、十字状になった空白部の中央部に1個のボタン状突起を貼り付けている。56にあるY字状の空白部の下に繋がる部分と考えられる。58、59も57と同じ文様構成であるが、59は下部に撚糸文Lがわずかに観察される。60は、54にある連続刺突文を施した蛇行状隆線の下に続くと考えられる。蛇行状隆線の下には連続刺突文を施した隆線を2列横位に貼付し、その下に撚糸文Lを施している。61は胴部破片で、連続刺突文を施した隆線を縦位に貼付している。62は胴部破片で、上部に頸部の連続刺突文を、胴部に2列の連続刺突文を施した隆線を縦位に垂下している。胴部下半にはボタン状の突起を貼り付けている。地文には撚糸文Lを施している。63は胴部上半、64は胴部下半の破片である。63は連続刺突文と撚糸文からなる。64は撚糸文からなる。65は底部破片で、底面に笹の葉痕を残している。以上から、頸部から底部までの文様は、口縁部から続く蛇行状の連続刺突文が頸部で(54から60へ)終わり、連続刺突文間に作られた「Y字状の空白部」は「十字状の空白部」へ(56から57、58へ)続き、空白部は胴部下位まで垂下すると考えられる。

66~71は口縁部破片である。66は口縁部に横位の隆帯文を配し、RL縄文を縦位に施している。67は口唇部が角頭状を呈し、RL縄文を横位に施している。68は断面が口唇部で外反し、器面にはLR縄



第24図 遺構外 (IV層) 出土土器 (1)



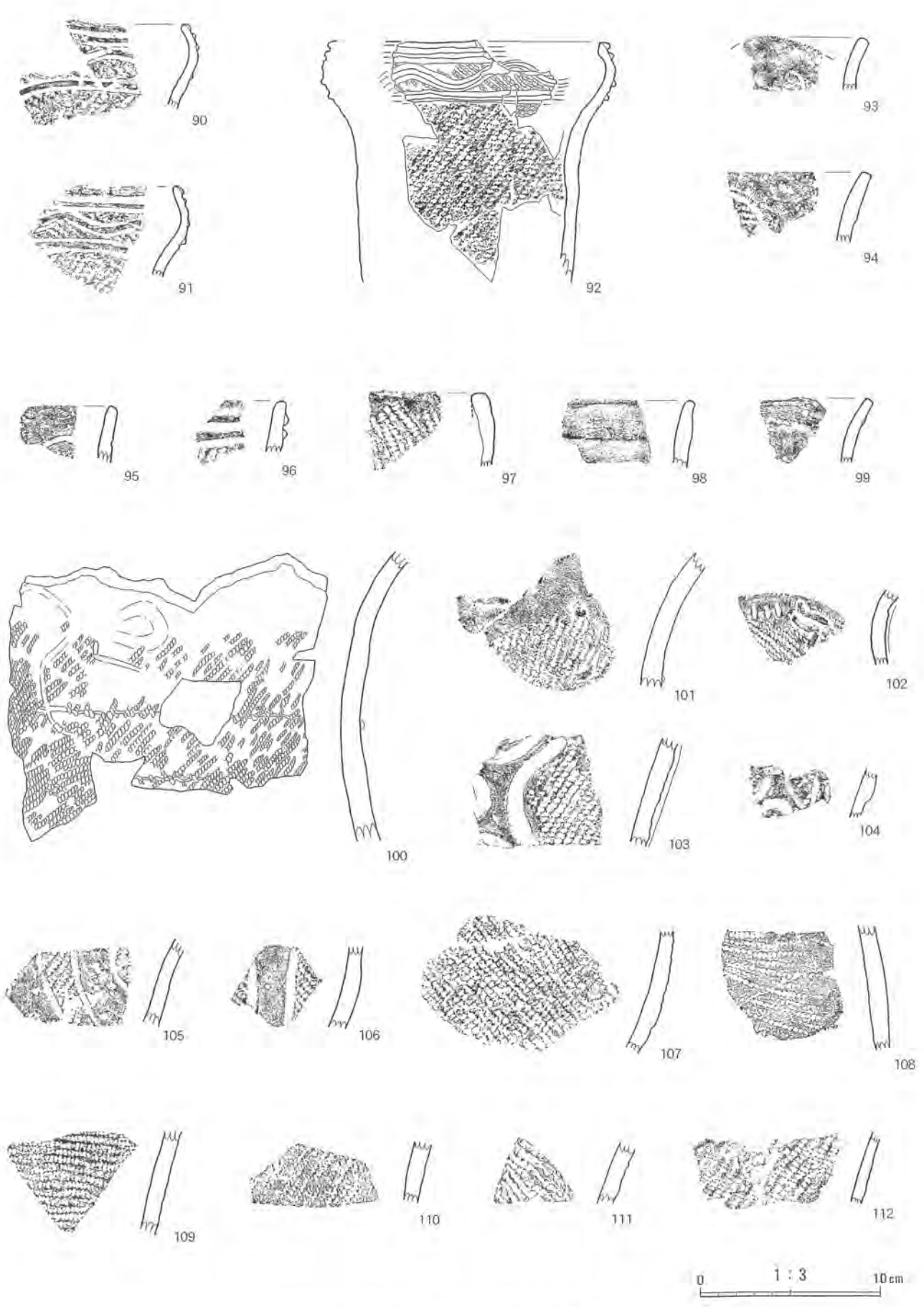
第25図 遺構外（IV層）出土土器（2）

文を縦位に施している。69はLR縄文を縦位に施している。70、71は無文の口縁部破片である。

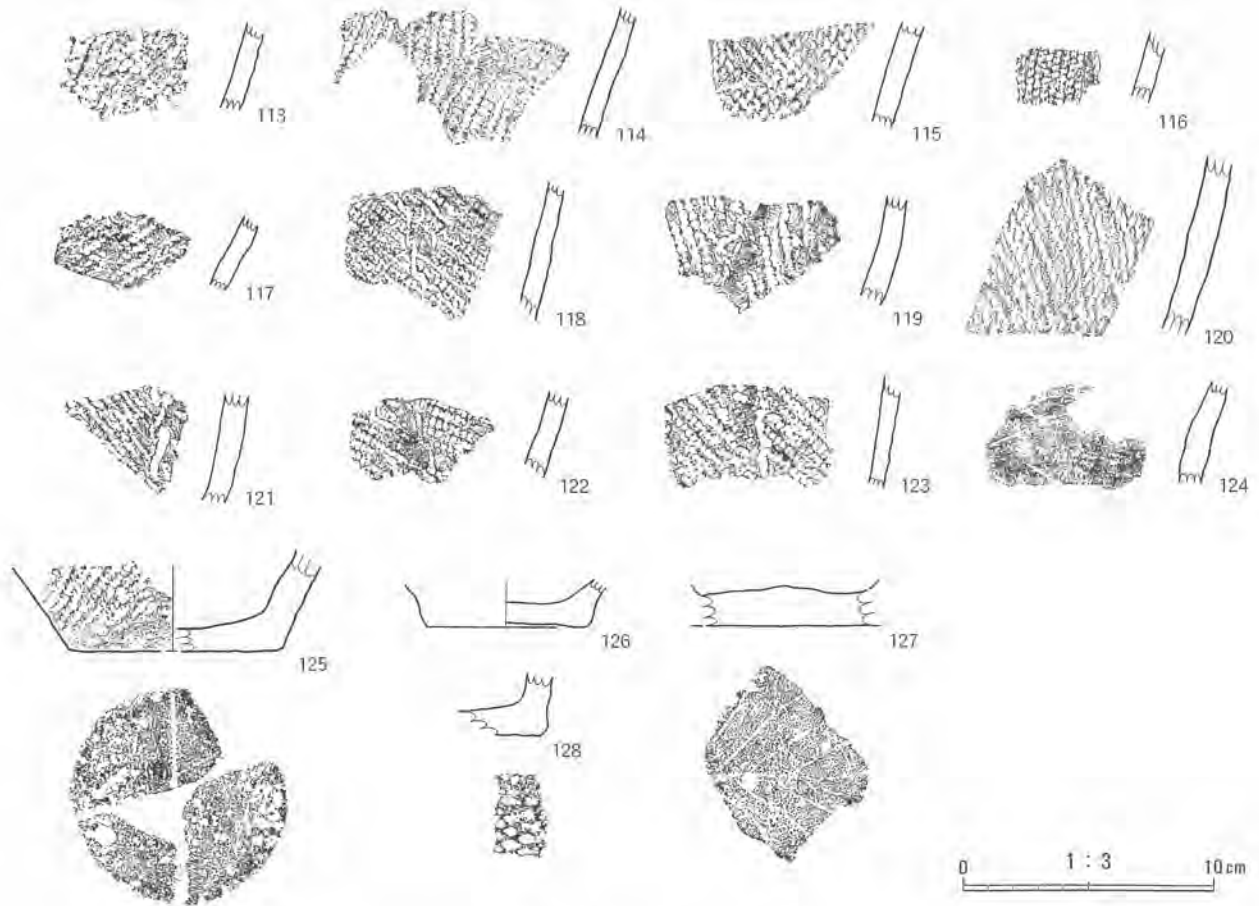
72～89は胴部破片である。72は無文部をもち、RL縄文を縦位に施している。73～80は沈線を垂下することにより無文帯または縄文帯を作出している。73は沈線により縦の無文帯を作出し、RL縄文を横位に施している。74、75、79は磨消縄文により縦位の縄文帯を作出している。74は沈線を縦位に引いた後にRL縄文を横位に施している。75は器面を丁寧に磨いている。LR縄文を横位に施した後、平行沈線を引いてから沈線の外を磨り消している。76は沈線と縄文が見られる。77は逆U字状沈線により無文帯を作出していると考えられ、その外にRL縄文を縦位に施している。78はRL縄文を縦位に施している。沈線により縦の無文帯あるいは縄文帯を作出していると考えられる。79は逆U字状沈線を施し、沈線内にRL縄文を縦位に施している。81は縄文帯を作出し、外に列点を施している。82はRL縄文を縦位に施し、縦位の隆線を垂下している。83はY字状の隆線を貼付している。84は断面がやや膨らみ、LR縄文を斜位、横位に施している。85は断面が内傾し壺形土器と思われる。LR縄文を縦位に施している。86は原体不明の縄文を施している。87は複節RLR縄文を斜位に施している。88は結節が縦に走っている。器面にはRL縄文を横位、縦位に施している。89は原体の異なるRL縄文とLR縄文を縦位に施して羽状縄文の効果を出している。

基本土層IV層の出土土器のうち時期の判別が可能なのは54～65、73～82で、54～65が後期初頭、73～82が中期後半～後期と考えられる。

90～128は基本土層V層から出土した土器である。90～92は同一個体である。平口縁で、器形は口縁部が内湾し、頸部から胴部へ向かって緩やかに窄まるいわゆる「キャリパー形」の深鉢形土器である。文様帯は口縁部文様帯のみで、2列の隆帯を幅広に貼付することにより口縁部文様帯を作出している。地文は縄文で、文様帯内には複節RLR縄文を横位に施文した後、横位の波状隆線を貼付している。頸部から胴部は器面に複節RLR縄文を縦位に施している。93～99は口縁部破片である。93は緩やかな波状口縁を呈し、断面は外反している。逆J字状の沈線を引き、縄文を施文している。94は逆U字状の沈線を引いていると思われ、逆U字内に縄文を充填している。95も逆U字状の沈線を



第26図 遺構外（V層）出土土器（1）



第27図 遺構外（V層）出土土器（2）

引いていると考えられる。96は横位の2条の隆線の下に縄文を施している。97は断面が内湾し、器面にLR縄文を縦位に施している。98、99は口縁部に段を有している。無文で器面は丁寧に調整されている。99は断面が外反し、粘土を貼り付けて段を作出している。

100～124は胴部破片である。100、101は同一個体と考えられる。100は断面が胴部下半でわずかに膨らみ、胴部上半から口縁部に向かって大きく外反している深鉢形土器である。地文は横位のLR縄文で、細隆線を貼付しているが、多くは剥落し、貼付した跡が残っている。細隆線の剥落痕から細隆線は胴部上半に2列の渦巻状細隆線を貼付し、蛇行状の細隆線を垂下していると考えられる。地文の縄文は結節が見られる。101は断面が外反し、部位は胴部上半である。多くは剥落しているが、わずかに隆線が見られる。102は断面が大きく外反している。縦の波状の細隆線を貼付し、横位に刺突を施している。地文は横位のRL縄文である。103は断面が外に開き、曲線状の隆線を貼付し、RL縄文を縦位に施している。104も同じ文様構成をしている。105は平行沈線を渦巻状に引き、沈線内にRL縄文を縦位に施し充填している。106は73と同様に平行沈線を引き無文帯を作出し、RL縄文を横位に施している。107～122は縄文または撚糸文のみの破片である。107は断面に膨らみをもち、RL縄文を横位に施している。108は間隔の空いたRL縄文を横位に施している。109はLR縄文を斜位に施している。110はRL縄文を縦位に施している。111は粘土が乾ききっていない状態でLR縄文を縦位に施している。112はRL縄文を縦位に施している。113はRL縄文を横位に施している。114

はLR縄文を斜位、横位に施している。115は0段の条からなる横位の組紐縄文を施している。116は複節RLR縄文を施している。117は断面が外に大きく開いている。器面に複節RLR縄文を縦位に施している。118はLR縄文を縦位に施している。119は断面が外に膨らみ、器面にLR縄文を縦位に施している。また、縄の閉端部が観察できる。120は撚糸文Lを施している。121は縄文の結節が縦に走っており、無節L縄文を縦位に施している。122はLR縄文を縦位に施している。123は結節が縦に走っており、LR縄文を縦位に施している。124は無文の破片で、断面が外反している。

125～128は底部破片である。125は底部にRL縄文を縦位に施している。底面には沈線が残っている。126は底径の小さいやや上げ底の底部破片で、無文である。127は底面に木葉痕が残っている。128は底面に網代痕が残っている。網代の編み方は、「線の条が1本超え1本潜り1本送り」と考えられる。

基本土層V層の出土土器のうち時期の判別が可能なのは90～94、100～106、115である。90～92は口縁部文様帯に波状隆線を貼付し、胴部に縄文を施していることから大木8b式である。93、94、103、104、106は中期後半、105が中期末～後期前葉、100～102は細隆線が貼付されていることから大木5式と考えられる。115は組紐縄文から前期中葉であると考えられる。

129～144は基本土層VI層から出土した土器である。129～133は口縁部破片である。129は断面が外に開き、竹管状工具による円形刺突文を施し、その中に刺突を加えている。130はLR縄文を縦位に施している。131は断面が内傾し、LR縄文を縦位に施している。132は口唇部に断面が肥厚した山形の突起をもつ。133は断面が外に屈曲している。外面はかなり剥落している。

134～143は胴部破片である。134は縦位の沈線と円形の刺突文を施している。135は半楕円状の刺突を施している。136は0段の条からなる組紐縄文を施している。137は部位が口縁部に近く、横位の隆帯を貼付し、隆線上に押圧を加えている。138は断面が内傾し、LR縄文を斜位に施している。139はLR縄文を縦位に施している。140は結節が縦に走っており、LR縄文を縦位に施している。141は直前段反撚りのRR縄文と単節RL縄文を横位に施している。143は撚糸文Lを施している。

144は底部破片である。器面にLR縄文を横位に施している。内面には暗褐色の皮膜状有機質が底面付近を中心に付着していた。皮膜状有機質の詳細は不明で、現在はその多くが剥がれている。

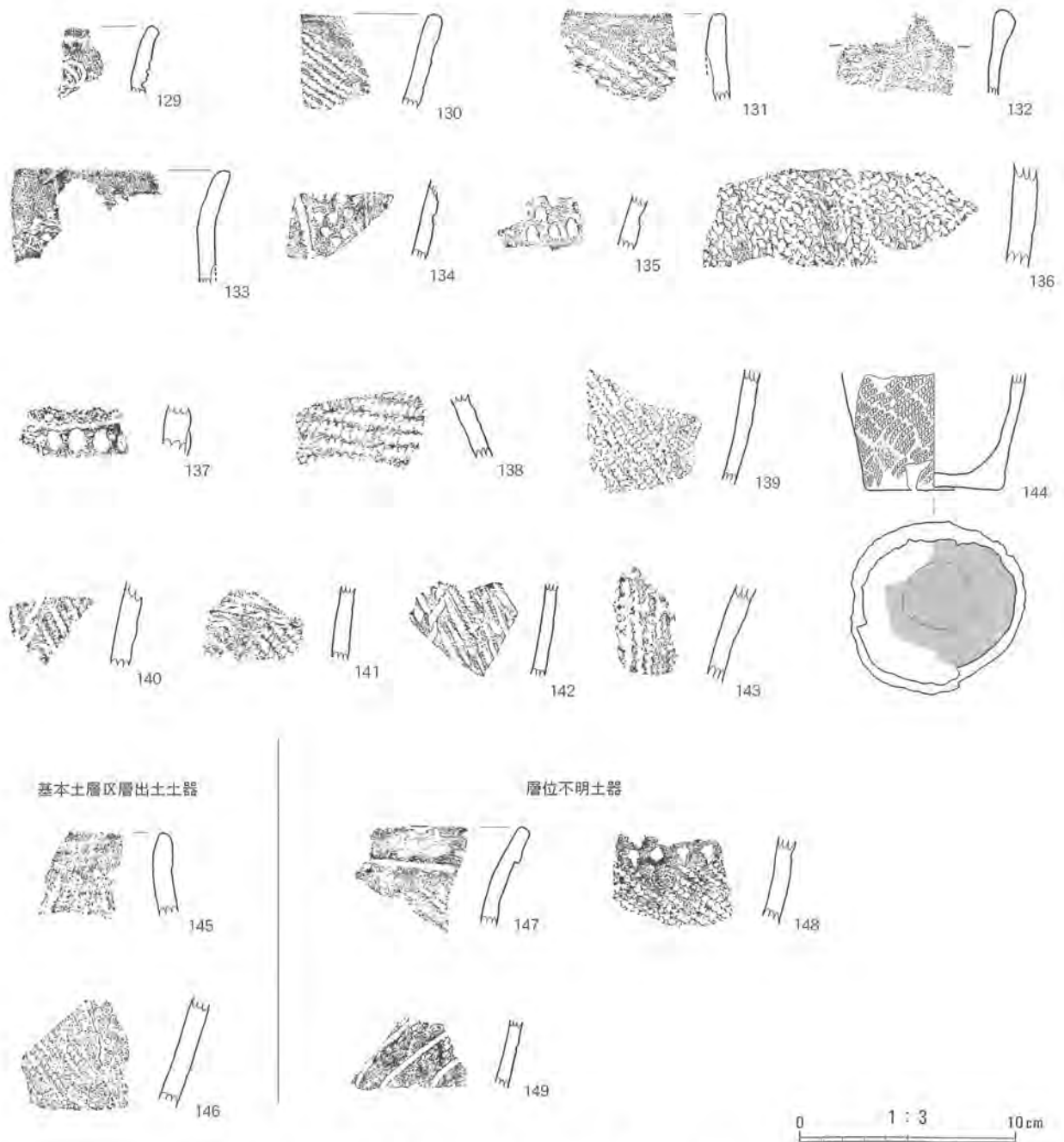
基本土層VI層の出土土器のうち時期の判別が可能なのは129、134～137である。129は竹管状工具による円形刺突文から大木3式である。134、135は中期後半、136、137は前期中葉以降と考えられる。

145、146は地山直上の基本土層IX層から出土した土器である。145は口縁部破片で、断面は内傾し、RL縄文を斜位に施している。146は胴部破片で、結節が縦に走っており、LR縄文を縦位に施している。各々時期は不明である。

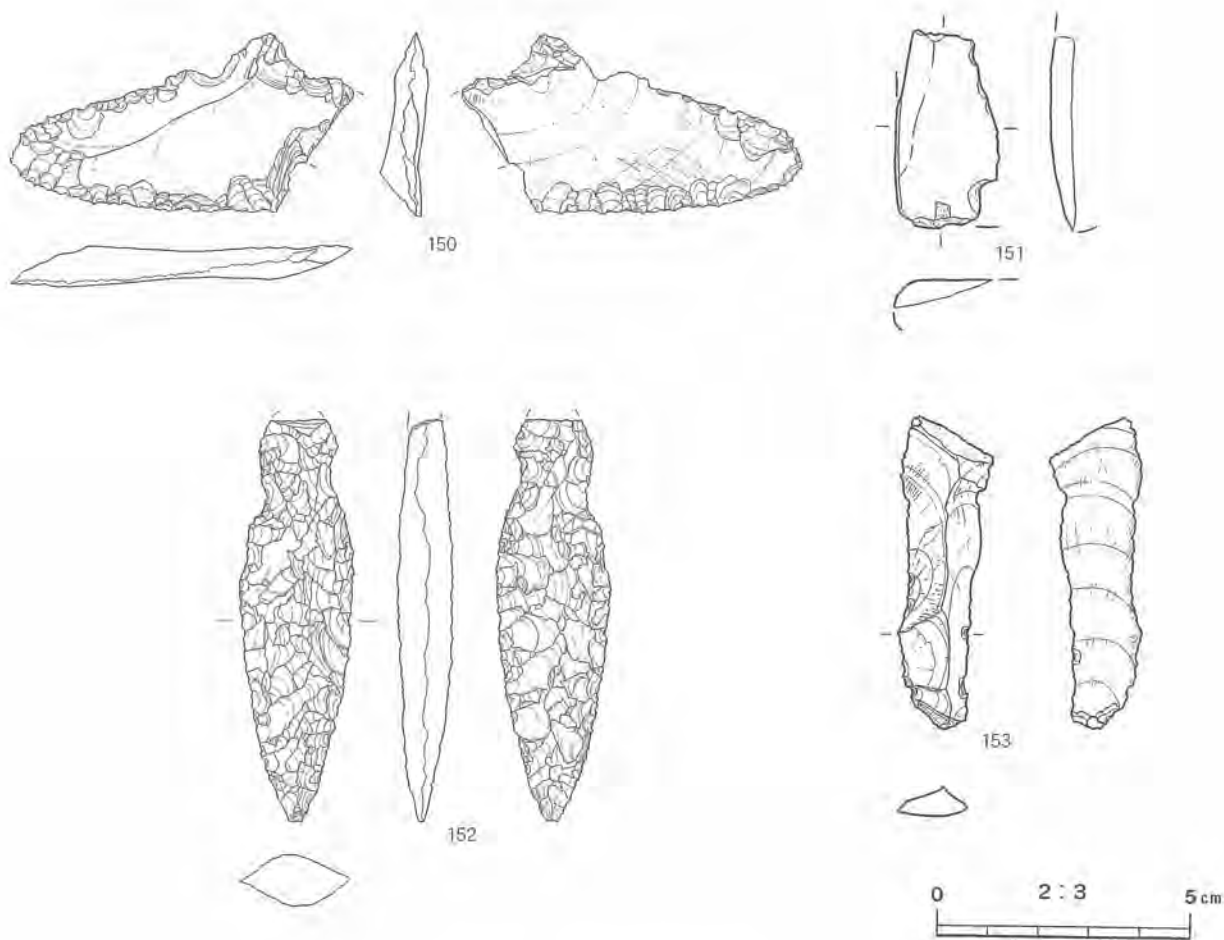
147～149は層位不明の破片である。147は口縁部破片で断面は大きく外反している。口縁部は段を有し、段以下に無節L縄文を縦位に施している。148は胴部破片で、文様は列点文と縦位のLR縄文からなる。149は胴部破片で、沈線を曲線状に引いている。147～149はすべて時期の特定はできないが、中期あるいは後期のものと考えられる。

150～161は遺構外で出土した石器である。150は基本土層IX層から出土した横長のスクレーパーである。残存部の規模は最大長3.0cm、最大幅6.9cmを測る。腹面の右側折損後に二次加工を施していると思われ、腹面の折損部にも調整を施している。周縁部に加工を施し、上部には摘みと考えられる山状の突起を作り出している。側縁部に対しほぼ直角に施す調整剥離を施し、左先端部は他より

も大きく剥離している。突起部は粗い調整のため、未成品の可能性もある。背面は刃部を中心に腹面と同様の調整剥離を施している。石材は頁岩である。151は磨製石斧で腹面の刃部の一部のみ残存し、ほとんどが欠損している。腹面の一時加工時の研磨は丁寧である。152は全面に加工を施した石器で、基本土層V層から出土した。先端が尖った縦長のスクレーパーまたは木の葉型の石槍様石器と考えられる。規模は最大長8.0cm、最大幅2.8 cm、最大厚1.1 cmを測る。上部には両側縁に抉りを入れ、上端部は折損したためかほぼ平坦である。石器の表裏は細かい調整剥離を施している面を腹面、やや大きめの剥離を残している面を背面とした。腹面は細長の剥離が目立ち、調整を数多く施している。背面は先端部を細密に調整しているが、その他は比較的粗く調整している。両面とも中から調整を施し、次に側縁部を調整している。調整方向は側縁部に対しほぼ直角である。色調は暗褐色で石材は頁岩である。153は基本土層IV層から出土した縦長のフリイクであるが、右側縁部に若干調整が残



第28図 遺構外 (VI、IX層他) 出土土器

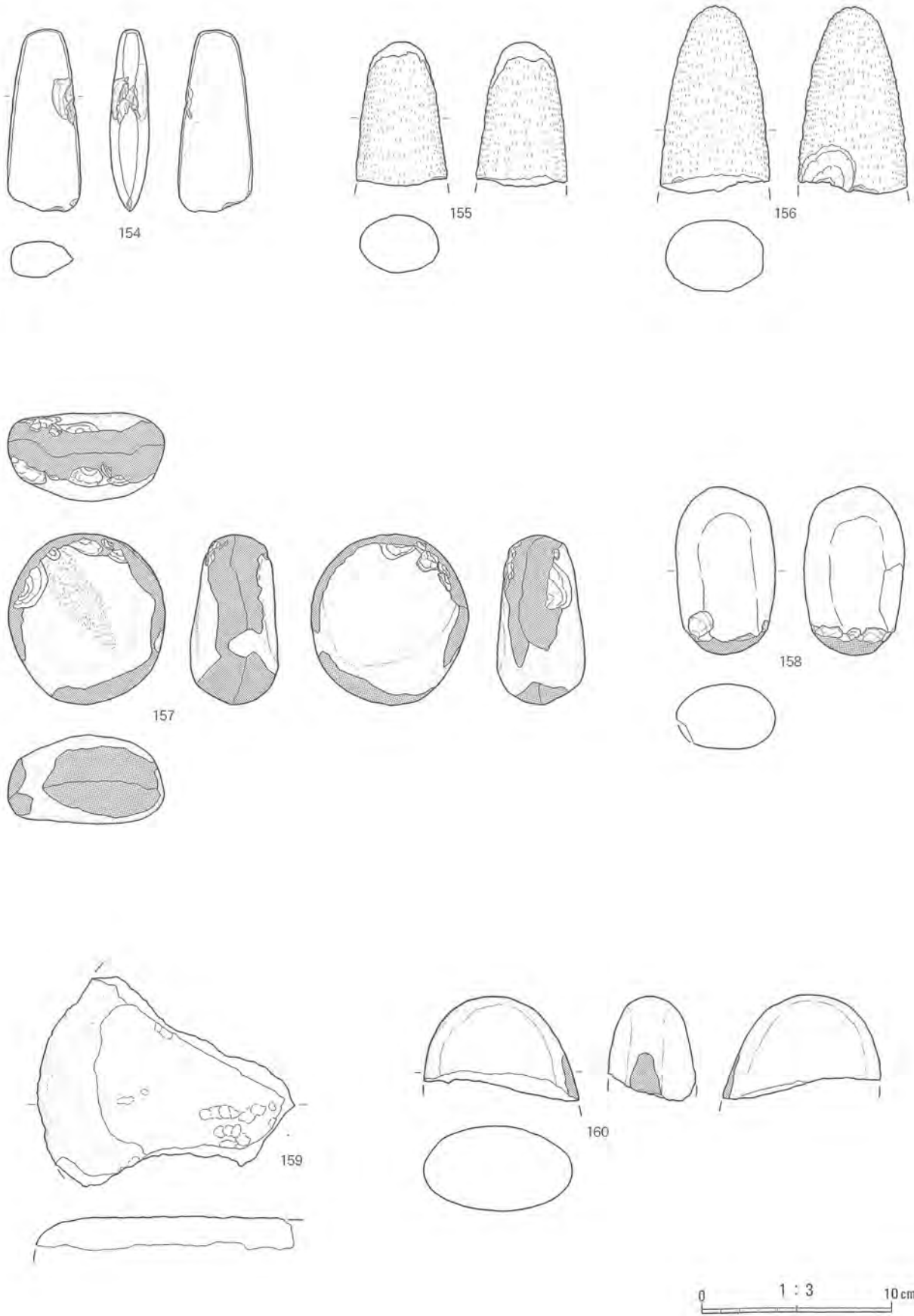


第29図 遺構外出土石器 (1)

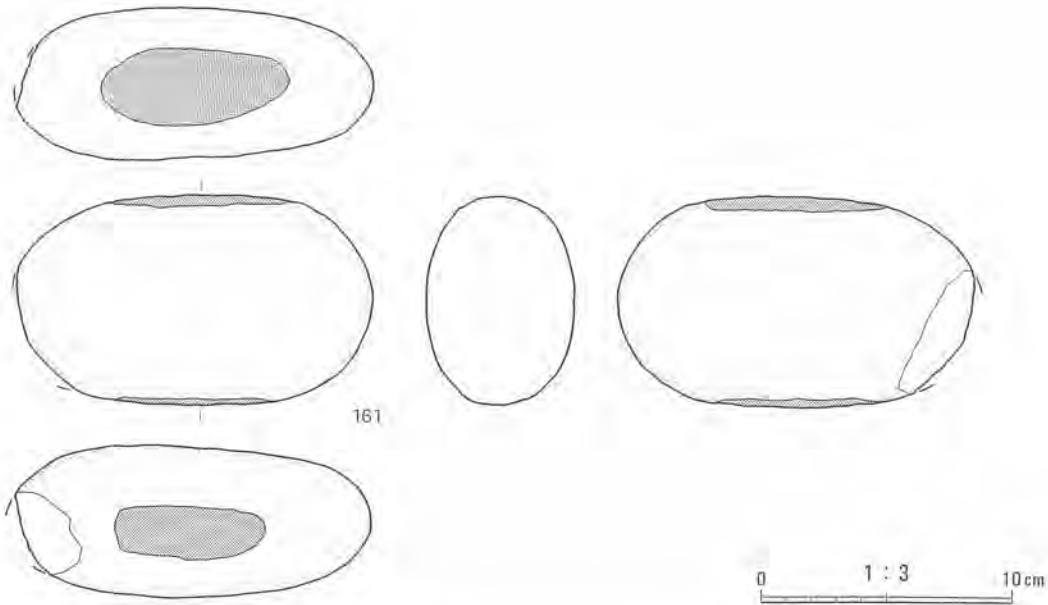
っている。規模は最大長6.1cm、最大幅1.8 cmを測る。

154~156は磨製石斧である。154は試掘調査時の攪乱溝から出土した。規模は最大長9.6cm、最大幅3.8cm、最大厚1.9cmを測る。両側縁を面取りした扁平な石斧で、右側縁部の中央やや上に側面部から打撃を加え、その後両面を研磨している。155は試掘調査時の表土層から出土した砂岩質の石斧の一部で、刃部は折損している。残存部の規模は最大長7.6cm、最大幅4.8cm、断面は楕円形で、最大厚3.1cmを測る。先端部は自然面を残し、他は整形後に粗く研磨している。156は基本土層IV層から出土した。157同様整形後の研磨は粗い。残存する規模は最大長9.9cm、最大幅5.8cm、断面形は楕円形で最大厚3.8cmを測る。

157、158は磨石である。157は基本土層III層から出土した円形の敲打磨石で、側縁部全てが機能面である。機能面に稜が見られることから本体を直ではなく斜めに傾けて使用していたと考えられる。規模は最大長9.9、最大幅8.3cm、最大厚4.7cmを測る。機能面の一部に調整痕が残っていることから機能面を整形してから磨石として使用していたと考えられる。158は基本土層V層から出土した楕円形の磨石である。規模は長軸8.9、短軸5.2cm、最大厚3.4cmを測る。機能面に調整を施していることから機能面を整形してから磨石として使用していたと考えられる。機能面以外の体部は丁寧に研磨している。



第30図 遺構外出土石器 (2)



第31図 遺構外出土石器 (3)・銭貨

159は基本土層Ⅱ層から出土した石皿の一部である。残存する規模は最大長11.1、最大幅13.6cmを測る。推定される中央部には敲打痕が確認される。石材は砂岩である。

160、161は敲打磨石である。160は基本土層Ⅱ層から出土した欠損した敲打磨石で、最大厚5.6cmを測る。右側面部にわずかに機能面が見られる。161は基本土層Ⅲ層から出土した楕円形の敲打磨石である。規模は長軸14.2、短軸8.5cm、最大厚5.9cmを測る。両側面部に楕円状の機能面がある。

第4表 竪穴住居跡出土土器観察表

挿図 番号	番号	地点	層位	器種・部位	文 様	調整	胎 土	色 調	備 考
								(上段、外面 下段、内面)	
17	1	7号住	A 1	台付 脚部	8条の平行沈線、変形工字文	内面 ミガキ	砂粒	明黄褐色	一部欠損 底径6.4cm
					6単位2個1対貼瘤			黒褐色(底部 付近)	
					2個1対瘤間穿孔				
17	2	8号住	A 1	胴部	LR縄文	内面ナデ	砂粒、石英	褐色 灰黄褐色	
17	3	8号住	A 1	鉢形 胴部	LR縄文	内面ナデ	砂粒、石英 礫	にぶい褐色 にぶい褐色	
17	4	8号住	床直	鉢形 口縁部	RL縄文、沈線 変形工字文	内面ナデ	砂粒、石英 金雲母	明褐色 黒褐色	5と同一個体
17	5	8号住	床直	鉢形 胴部	RL縄文、沈線 変形工字文	内面ナデ	砂粒、石英 金雲母	褐色 黒褐色	4と同一個体
17	6	8号住	床直	胴部	平行沈線文	内面ナデ	砂粒、石英 金雲母	黒褐色 黒褐色	
17	7	8号住	床直	胴部	平行沈線文	内面ナデ	砂粒、石英 金雲母	暗褐色 暗褐色	

挿図番号	番号	地点	層位	器種・部位	文 様	調整	胎 土	色 調		備 考
								(上段、外面 下段、内面)		
17	8	8号住	床直	胴部	LR縄文	内面ナデ	砂粒、石英 礫	にぶい褐色 灰黄褐色		
17	9	8号住	床直	胴部	沈線 矢羽状沈線文	内面ナデ	砂粒、石英 金雲母	暗褐色 暗褐色	10と同一個体	
17	10	8号住 炉跡	a 3	胴部	沈線 矢羽状沈線文	内面ナデ	砂粒、石英 金雲母	暗褐色 暗褐色	9と同一個体	
17	11	8号住 炉跡	a 3	胴部	平行沈線文	内面ナデ	砂粒、石英	褐色 にぶい黄褐色		
17	12	8号住 炉跡	a 3	壺 胴部	無 文	内外面 ナデ	砂粒	にぶい黄褐色 浅澄色		
17	13	8号住 炉跡	床直 a 3	壺 口縁部～ 頸部	口縁部隆線、口唇部、内面沈線 口縁部三角状文 2個1対貼瘤	内外面 粗いミガキ	砂粒	にぶい橙色 にぶい橙色	接合資料 外面、黒班 口径12.6cm	
17	14	8号住	B 1	深鉢形 胴部	LR縄文	内面ナデ	砂粒、石英	にぶい橙色 にぶい橙色		
17	15	8号住	B 1	胴部	LR縄文	内外面ナデ	砂粒、石英	黒褐色		
17	16	8号住	B 1	口縁部	無 文	内外面ナデ	砂粒、石英 礫	灰黄色 灰黄色	17と同一個体	
17	17	8号住	B 1	胴部～ 底部	無 文	内外面ナデ	砂粒、石英 礫	灰黄色 灰黄色	18と同一個体 内面一部赤彩	

第5表 土坑内出土土器観察表

挿図番号	番号	地点	層位	器種・部位	文 様	調整	胎 土	色 調		備 考
								(上段、外面 下段、内面)		
19	1	17号 土坑	c 1	胴部	無 文	内外面 ナデ	砂粒、石英 礫	にぶい黄橙色	内面黒色化 2と同一個体	
19	2	17号 土坑	c 1	胴部	無 文	内外面 ナデ	砂粒、石英 金雲母	にぶい黄橙色	内面黒色化 1と同一個体	
20	1	22号 土坑	a 1	胴部	不 明	磨滅	砂粒、石英	黒褐色 灰黄褐色		

第6表 遺溝外出土土器観察表

挿図番号	番号	地点	層位	器種・部位	文 様	調整	胎 土	色 調		備 考
								(上段、外面 下段、内面)		
21	1	南西部	II	口縁部	結節縄文	内外面 ナデ	砂粒、石英 礫	にぶい赤褐色 にぶい赤褐色		
21	2	南東部	II	口縁部	縄文 渦巻状隆線、逆「U」字状沈線	内面 ミガキ	砂粒、石英 礫、雲母	にぶい黄橙色 黒褐色		
21	3	北東部	II	口縁部	縄文、曲線状沈線	内外面 ナデ	砂粒、石英 礫	にぶい褐色 にぶい褐色		
21	4	南東部	II	口縁部	RL縄文 口唇部押圧	内外面 ナデ	砂粒、石英 礫	にぶい黄褐色 にぶい黄褐色		
21	5	北東部	II	口縁部	LR縄文	内外面 ナデ	砂粒、石英	灰黄色 黄灰色		
21	6	南東部	II	口縁部	LR縄文 口唇部押圧	内外面 ナデ	砂粒、石英 礫	灰褐色 にぶい黄褐色		
21	7	南東部	II	口縁部	R縄文	内外面 ナデ	砂粒、石英 礫	にぶい橙色 橙色	外面磨滅	
21	8	北東部	II	口縁部	LR縄文	内面ナデ	砂粒、石英 礫	黒褐色 灰黄褐色		
21	9	南北ベル ルト北	II	胴部	RL縄文、沈線 磨消縄文	内面ナデ	砂粒、石英 礫	にぶい黄褐色 にぶい橙色		

挿図 番号	番号	地点	層位	器種・部位	文 様	調整	胎 土	色 調	備 考
								(上段、外面 下段、内面)	
21	10	南東部	II	胴部	LR縄文、沈線	内面 ミガキ	砂粒、石英	にぶい橙色	
					磨消縄文			にぶい橙色	
21	11	南東部	II	胴部	縄文、沈線	外面ミガキ 内面ナデ	砂粒、石英	にぶい黄褐色	
					磨消縄文			にぶい橙色	
21	12	南東部	II	胴部	LR縄文、沈線	内外面 ナデ	砂粒、石英	にぶい黄褐色 黒褐色	
21	13	南西部	II	胴部	縄文、沈線	内面 ミガキ	砂粒、石英	明黄褐色 明黄褐色	
21	14	南東部	II	胴部	LR縄文	内面 ミガキ	砂粒、石英 繊維	にぶい黄褐色	
					羽状縄文			明赤褐色	
21	15	北東部	II	胴部	組紐縄文（0段の条）	内面ナデ	砂粒、石英	にぶい黄褐色 黒褐色	内面煤付着
21	16	南東部	II	胴部	LR縄文、刻み状沈線	内面ナデ	砂粒、石英	灰黄褐色 灰黄褐色	
21	17	南北ベ ルト南	II	胴部	燃糸文R、沈線	内面ナデ	砂粒、石英 礫	にぶい黄褐色 にぶい橙色	
21	18	南東部	II	胴部	LR縄文	内面ナデ	砂粒、石英 金雲母	灰黄褐色 灰黄褐色	
21	19	南東部	II	胴部	RLR縄文	内面ナデ	砂粒、石英 礫	にぶい褐色 にぶい褐色	
21	20	南東部	II	胴部	RL縄文	内面ナデ	砂粒、石英	黒褐色	
								にぶい黄褐色	
21	21	南東部	II	胴部	LR縄文	内面ナデ	砂粒、石英	にぶい黄褐色	
								にぶい黄褐色	
21	22	南東部	II	胴部	RL縄文	内面ナデ	砂粒、石英	黒褐色	
								にぶい赤褐色	
21	23	北東部	II	胴部	RL縄文	内面ナデ	砂粒、石英	黒褐色	
								にぶい赤褐色	
21	24	北東部	II	胴部	RL縄文	内面ナデ	砂粒、石英	黒褐色	
								黒褐色	
21	25	南東部	II	胴部	RL縄文	内面ナデ	砂粒、石英	にぶい褐色	
								にぶい黄褐色	
21	26	南東部	II	胴部	LR縄文	内面ナデ	砂粒、石英 礫	にぶい褐色	
								にぶい褐色	
21	27	南東部	II	胴部	L縄文	内面ナデ	砂粒、石英 金雲母	にぶい黄褐色	
								橙色	
21	28	南東部	II	胴部	燃糸文L	内面ナデ	砂粒、石英 礫	暗褐色	
								にぶい黄褐色	
21	29	東西ベ ルト内	II	胴部	燃糸文L	内面 ミガキ	砂粒、石英	浅黄褐色	内面磨減
								浅黄褐色	
22	30	北西部	II	胴部	網目状燃糸文	外面ナデ	砂粒、石英 礫、白色粒	橙色	内面欠損
22	31	北西部	II	胴部	縄文	内面ナデ	砂粒、石英 礫	にぶい黄褐色	
								にぶい黄褐色	
22	32	北西部	II	胴部	沈線、連続円形刺突文	内面ナデ	砂粒、石英	にぶい褐色	
								にぶい黄褐色	
22	33	南西部	II	壺形 胴部	無 文	内面 ミガキ	砂粒、石英	にぶい赤褐色	
								明赤褐色	
22	34	南東部	II	壺形 胴部	無 文	内面 ミガキ	砂粒、石英	にぶい黄褐色	
								灰黄色	
22	35	南東部	II	底部	RL縄文	内面ナデ	砂粒、石英	黒褐色	
								灰黄褐色	
22	36	北東部	II	底部	縄文	外面 ミガキ	砂粒、石英 礫	にぶい褐色	底面網代痕 内面欠損
22	37	東西ベ ルト東	II	底部	RL縄文	内外面 ナデ	砂粒、石英	にぶい黄褐色	底径9.2cm
								灰黄褐色	

挿図 番号	番号	地点	層位	器種・部位	文 様・装 飾	調整	胎 土	色 調	備 考
								(上段、外面 下段、内面)	
22	38	南西部	Ⅱ	底部	無 文	内外面 ナデ	砂粒、石英 礫	にぶい橙色 にぶい橙色	内面欠損
22	39	北東部	Ⅱ	底部	無 文	内外面 ナデ	砂粒、石英	にぶい褐色 にぶい褐色	
23	40	南東部	Ⅲ	深鉢形 口縁部～ 胴部	LR縄文、沈線 山形状沈線	内外面 ミガキ	砂粒、石英	灰黄色 淡黄色	
23	41	南東部	Ⅲ	深鉢形 口縁部	RL縄文、逆「U」字状沈線	内面 ミガキ	砂粒、石英	にぶい黄橙色 黒褐色	
23	42	南西部	Ⅲ	深鉢形 口縁部	RL縄文	外面ミガキ、 内面ナデ	砂粒、石英	にぶい橙色 褐色	
23	43	北東部	Ⅲ	深鉢形 口縁部	無 文	内外面 ナデ	砂粒、石英 礫	にぶい褐色 にぶい褐色	
23	44	南北ベ ルト北	Ⅲ	深鉢形 口縁部	LR縄文	内外面 ナデ	砂粒、石英 礫	黒褐色 にぶい褐色	
23	45	南北ベ ルト北	Ⅲ	深鉢形 口縁部～ 胴部	双山突起 沈線 LR縄文	内面ナデ	砂粒、石英	にぶい黄橙色 にぶい褐色	
23	46	北東部	Ⅲ	深鉢形 口縁部	山状口縁、口唇部に沈線 LR縄文 三角状文	内面ナデ	砂粒、石英	灰黄褐色 灰黄褐色	
23	47	南北ベ ルト北	Ⅲ	口縁部	沈線 平行沈線文、変形工字文	内面ナデ	砂粒、石英	灰黄褐色 淡黄色	
23	48	北西部	Ⅲ	深鉢形 口縁部	双山突起、突起上に押圧、 口唇部上、内面に沈線 口縁部に沈線、2個1対の貼瘤 変形工字文	内面ナデ	砂粒、石英 礫	灰黄褐色 灰黄褐色	内外面煤付着 年代測定試料
23	49	南東部	Ⅲ	胴部	隆線	内面ナデ	砂粒、石英 礫	にぶい赤褐色 にぶい黄褐色	
23	50	南東部	Ⅲ	胴部	縄文、沈線、刺突	内面ナデ	砂粒、石英	にぶい赤褐色 褐色	
23	51	北東部	Ⅲ	胴部	LR縄文	内面ナデ	砂粒、石英	にぶい褐色 にぶい褐色	
23	52	北西部	Ⅲ	底部	L縄文	内面ナデ	砂粒、石英	にぶい褐色 にぶい黄褐色	
23	53	北西部	Ⅲ	底部	無 文	内外面 ナデ	砂粒、石英	にぶい黄褐色 にぶい黄褐色	
24	54	北東部	Ⅳ	深鉢形 口縁部	円形刺突 蛇行状文	内外面 ナデ	砂粒、石英 礫	明黄褐色 明黄褐色	同一個体
24	55	北東部	Ⅳ	深鉢形 口縁部	円形刺突 蛇行状文、ボタン状突起	内外面 ナデ	砂粒、石英 礫	にぶい黄褐色 にぶい黄褐色	
24	56	北東部	Ⅳ	深鉢形 口縁部	円形刺突 「Y」字状文、ボタン状突起	内外面 ナデ	砂粒、石英 礫	にぶい黄褐色 にぶい黄褐色	
24	57	北東部	Ⅳ	深鉢形 胴部	円形刺突 ボタン状突起	内外面 ナデ	砂粒、石英 礫	にぶい黄褐色 にぶい黄褐色	
24	58	北東部	Ⅳ	深鉢形 胴部	円形刺突 ボタン状突起	内外面 ナデ	砂粒、石英 礫	にぶい黄褐色 にぶい黄褐色	
24	59	北東部	Ⅳ	深鉢形 胴部	円形刺突 ボタン状突起	内外面 ナデ	砂粒、石英 礫	にぶい黄褐色 にぶい黄褐色	
24	60	北東部	Ⅳ	深鉢形 胴部	撚糸文L、円形刺突 蛇行状文、ボタン状突起	内外面 ナデ	砂粒、石英 礫	にぶい褐色 にぶい褐色	
24	61	北東部	Ⅳ	深鉢形 胴部	撚糸文L、円形刺突	内外面 ナデ	砂粒、石英 礫	にぶい褐色 にぶい褐色	

押図 番号	番号	地点	層位	器種・部位	文 様・装 飾	調整	胎 土	色 調	備 考
								(上段、外面 下段、内面)	
24	62	北東部	IV	深鉢形 胴部	燃糸文L、円形刺突 ボタン状突起	内外面 ナデ	砂粒、石英 礫	明褐色 明褐色	同一個体
24	63	北東部	IV	深鉢形 胴部	燃糸文L、円形刺突	内外面 ナデ	砂粒、石英 礫	にぶい黄橙色 にぶい橙色	
24	64	北東部	IV	深鉢形 胴部	燃糸文L	内面ナデ	砂粒、石英 礫	にぶい赤褐色 にぶい褐色	
24	65	北東部	IV	深鉢形 底部	無文	内面ナデ	砂粒、石英 礫	明褐色 にぶい橙色	底面笹葉痕 底径9.2cm
24	66	北東部	IV	深鉢形 口縁部	RL縄文、隆線	内面 ミガキ	砂粒、石英	にぶい橙色 灰黄褐色	
24	67	北東部	IV	深鉢形 口縁部	RL縄文	内外面 ナデ	砂粒、石英 礫	灰黄褐色 にぶい橙色	
24	68	北東部	IV	深鉢形 口縁部	LR縄文	内外ナデ	砂粒、石英 礫	橙色 橙色	
24	69	北東部	IV	深鉢形 口縁部	LR縄文	内面ナデ	砂粒、石英 礫	にぶい褐色 にぶい赤褐色	
24	70	北東部	IV	深鉢形 口縁部	無文	内外面 ナデ	砂粒、石英 礫	にぶい黄橙色 にぶい黄橙色	口縁に黒斑
24	71	北東部	IV	深鉢形 口縁部	無文	内外面 ナデ	砂粒、石英 礫	灰黄褐色 にぶい黄橙色	
24	72	北東部	IV	深鉢形 胴部	RL縄文、沈線 磨消縄文	内面ナデ	砂粒、石英 礫	にぶい黄橙色 灰黄褐色	
24	73	北東部	IV	深鉢形 胴部	縄文、沈線 磨消縄文	内面ナデ	砂粒、石英	灰黄褐色 にぶい褐色	
24	74	北東部	IV	深鉢形 胴部	RL縄文、沈線 磨消縄文	内面ナデ	砂粒、石英	灰黄褐色 にぶい褐色	
24	75	南東部	IV	深鉢形 胴部	RL縄文、沈線 磨消縄文	内面ナデ	砂粒、石英 礫	にぶい褐色 灰褐色	
24	76	北東部	IV	深鉢形 胴部	縄文、沈線	内面ナデ	砂粒、石英 礫	にぶい橙色 橙色	
24	77	北東部	IV	深鉢形 胴部	RL縄文 磨消縄文	内面ナデ	砂粒、石英 礫	にぶい橙色 にぶい褐色	
24	78	北東部	IV	深鉢形 胴部	RL縄文、沈線 磨消縄文	内面ナデ	砂粒、石英 礫	にぶい黄橙色 にぶい黄橙色	
25	79	北東部	IV	深鉢形 胴部	RL縄文、沈線 磨消縄文	内面ナデ	砂粒、石英 礫	にぶい赤褐色 にぶい褐色	
25	80	北東部	IV	深鉢形 胴部	RL縄文、沈線 磨消縄文	内面ナデ	砂粒、石英 礫	にぶい橙色 にぶい褐色	
25	81	北東部	IV	深鉢形 胴部	RL縄文、沈線、列点文 磨消縄文	内面ナデ	砂粒、石英 礫	にぶい褐色 にぶい褐色	
25	82	北東部	IV	深鉢形 胴部	RL縄文	内面 ミガキ	砂粒、石英	にぶい褐色 灰黄褐色	
25	83	北東部	IV	深鉢形 胴部	隆線	内面ナデ	砂粒、石英	にぶい黄褐色 にぶい黄褐色	
25	84	北東部	IV	深鉢形 胴部	LR隆線	内面ナデ	砂粒、石英 礫	橙色 橙色	外面黒斑
25	85	北東部	IV	深鉢形 胴部	LR隆線	内面ナデ	砂粒、石英	にぶい黄褐色 にぶい黄褐色	外面煤付着
25	86	北東部	IV	深鉢形 胴部	縄文	内面ナデ	砂粒、石英 礫	にぶい褐色 にぶい褐色	
25	87	東西ベ ルト東	IV	深鉢形 胴部	RLR縄文	内面ナデ	砂粒、石英 礫	にぶい褐色 にぶい褐色	

挿図 番号	番号	地点	層位	器種・部位	文 様・装 飾	調 整	胎 土	色 調		備 考
								(上段、外面 下段、内面)		
25	88	北東部	IV	深鉢形 胴部	RL縄文	内面ナデ	砂粒、石英 礫、金雲母	にぶい褐色 にぶい褐色	内外面煤付着	
25	89	東部	IV	深鉢形 胴部	LR、RL縄文 羽状縄文	内面ナデ	砂粒、石英 礫、金雲母	にぶい赤褐色 黒褐色		
26	90	北東部	V	深鉢形 口縁部	RRL縄文、隆線、沈線 口縁部波状隆線文	内面ナデ	砂粒、石英 礫	黒褐色 にぶい赤褐色	同一個体	
26	91	北東部	V	深鉢形 口縁部	RRL縄文、隆線、沈線 口縁部波状隆線文	内面ナデ	砂粒、石英 礫	黒褐色 にぶい赤褐色		
26	92	北東部	V	深鉢形 口縁部～ 胴部	RRL縄文、隆線、沈線 口縁部波状隆線文	内面ナデ	砂粒、石英 礫	灰褐色 黒褐色		
								口径15.0cm		
26	93	北東部	V	深鉢形 口縁部	縄文、沈線	内面ナデ	砂粒、石英 礫	にぶい橙色 にぶい黄褐色		
26	94	南西部	V	深鉢形 口縁部	RL縄文、沈線 磨消縄文	内面ナデ	砂粒、石英 礫	にぶい赤褐色 にぶい赤褐色		
26	95	南西部	V	深鉢形 口縁部	沈線	内面ナデ	砂粒、石英	にぶい橙色 浅黄色		
26	96	北東部	V	深鉢形 口縁部	縄文、隆線、沈線、刺突	内面ナデ	砂粒、石英 礫	にぶい赤褐色 にぶい赤褐色		
26	97	南東部	V	深鉢形 口縁部	LR縄文	内面磨滅	砂粒、石英 礫	橙色		
26	98	北東部	V	深鉢形 口縁部	無文	内面ナデ	砂粒、石英 礫	灰黄褐色 にぶい赤褐色		
26	99	北東部	V	深鉢形 口縁部	無文	内面ナデ	砂粒、石英	にぶい褐色 にぶい褐色		
26	100	北東部	V	深鉢形 胴部	LR縄文、隆線	内面ナデ	砂粒、石英 白色粒子	にぶい黄褐色 灰黄褐色	隆線剥落	
26	101	南東部	V	深鉢形 胴部	LR縄文、隆線	内面ナデ	砂粒、石英 白色粒子	灰黄褐色 にぶい黄褐色	100と同一個体 の可能性あり	
26	102	南東部	V	深鉢形 胴部	RL縄文、隆線、刺突	内面 ミガキ	砂粒、石英	明黄褐色 灰黄褐色		
26	103	北東部	V	深鉢形 胴部	RL縄文、隆線	内面ナデ	砂粒、石英 礫	浅黄色 浅黄色		
26	104	北東部	V	深鉢形 胴部	L縄文、隆線	内面ナデ	砂粒、石英	にぶい橙色 にぶい黄褐色		
26	105	南西部	V	深鉢形 胴部	RL縄文、沈線 渦巻状文、磨消縄文	内面ナデ	砂粒、石英 礫	灰黄褐色 にぶい褐色		
26	106	北東部	V	深鉢形 胴部	RL縄文、沈線 磨消縄文	内面ナデ	砂粒、石英 礫、金雲母	褐色 にぶい褐色		
26	107	南東部	V	深鉢形 胴部	RL縄文	内面ナデ	砂粒、石英 礫、金雲母	にぶい褐色 にぶい褐色		
26	108	南東部	V	深鉢形 胴部	RL縄文	内面ナデ	砂粒、石英 礫、金雲母	褐色 にぶい黄褐色		
26	109	南東部	V	深鉢形 胴部	LR縄文	内面ナデ	砂粒、石英	にぶい赤褐色 にぶい褐色		
26	110	東西ベ ルト東	V	深鉢形 胴部	RL縄文	内面ナデ	砂粒、石英 雲母	灰黄褐色 浅黄色		
26	111	南西部	V	深鉢形 胴部	LR縄文	内面ナデ	砂粒、石英	にぶい褐色 褐色		
26	112	南東部	V	深鉢形 胴部	RL縄文	内面ナデ	砂粒、石英 礫	明褐色 にぶい褐色		
27	113	南東部	V	深鉢形 胴部	RL縄文	内面ナデ	砂粒、石英 礫	にぶい褐色 にぶい褐色		

挿図 番号	番号	地点	層位	器種・部位	文 様・装 飾	調整	胎 土	色 調	備 考
								(上段、外面 下段、内面)	
27	114	北東部	V	深鉢形 胴部	LR縄文	内面ナデ	砂粒、石英 礫	橙色 黒褐色	外面磨減
27	115	北西部	V	深鉢形 胴部	組紐縄文(0段の条)	内面ナデ	砂粒、石英	明黄褐色 灰黄褐色	
27	116	南東部	V	胴部	RLR縄文	内面ナデ	砂粒、石英	褐色 褐色	
27	117	北西部	V	深鉢形 胴部	RLR縄文	内面ナデ	砂粒、石英 礫	にぶい赤褐色 黒褐色	
27	118	北東部	V	深鉢形 胴部	LR縄文	内面ナデ	砂粒、石英 白色粒子	にぶい褐色 明赤褐色	
27	119	北東部	V	深鉢形 胴部	LR縄文	内面ナデ	砂粒、石英	黒褐色 にぶい橙色	
27	120	南東部	V	深鉢形 胴部	燃糸文L	内面 ミガキ	砂粒、石英	浅黄色 浅黄色	
27	121	南東部	V	深鉢形 胴部	L縄文	内面ナデ	砂粒、石英 礫	にぶい黄褐色 にぶい黄褐色	
27	122	南東部	V	深鉢形 胴部	LR縄文	内面ナデ	砂粒、石英 礫	にぶい赤褐色 灰褐色	
27	123	北東部	V	深鉢形 胴部	LR縄文	内面ナデ	砂粒、石英 礫	にぶい橙色 にぶい橙色	
27	124	北東部	V	深鉢形 胴部	無文	内面ナデ	砂粒、石英 礫	橙色 にぶい橙色	
27	125	南東部	V	深鉢形 底部	RL縄文	内面ナデ	砂粒、石英 礫	にぶい褐色 にぶい褐色	底径8.4cm
27	126	南東部	V	底部	無文	内外面 ナデ	砂粒、石英	灰黄褐色 にぶい橙色	底径6.4cm
27	127	南東部	V	底部		内面ナデ	砂粒、石英 礫	明赤褐色	底面木葉痕
27	128	北東部	V	底部	無文	内面ナデ	砂粒、石英 白色粒子	にぶい赤褐色 にぶい赤褐色	底面網代痕
28	129	南東部	VI	深鉢形 口縁部	円形刺突文	内面ナデ	砂粒、石英	浅黄橙色 浅黄橙色	
28	130	南西部	VI	深鉢形 口縁部	LR縄文	内面ナデ	砂粒、石英 金雲母	にぶい黄褐色 にぶい黄褐色	
28	131	東西ベ ルト東	VI	深鉢形 口縁部	LR縄文	内面ナデ	砂粒、石英 礫	にぶい橙色 にぶい橙色	内面剥落
28	132	南東部	VI	深鉢形 口縁部	山状突起、無文	内外面 ナデ	砂粒、石英 礫	黒褐色 にぶい黄褐色	
28	133	北東部	VI	深鉢形 口縁部	無文	内外面 ナデ	砂粒、石英	にぶい橙色 浅黄橙色	外面一部剥落
28	134	南東部	VI	深鉢形 胴部	沈線、円形刺突	内面ナデ	砂粒、石英	灰黄褐色 にぶい褐色	
28	135	南東部	VI	胴部	刺突	内面ナデ	砂粒、石英 礫	にぶい赤褐色 にぶい褐色	
28	136	南東部	VI	深鉢形 胴部	組紐縄文(0段の条)	内面ナデ	砂粒、石英 礫	灰黄褐色 にぶい黄褐色	
28	137	南西部	VI	深鉢形 胴部	隆帯上に押圧	内面ナデ	砂粒、石英 礫	にぶい褐色 にぶい褐色	
28	138	南北ベ ルト内	VI	胴部	LR縄文	内面ナデ	砂粒、石英 礫	にぶい黄褐色 にぶい褐色	
28	139	北東部	VI	胴部	LR縄文	内面ナデ	砂粒、石英 礫	にぶい赤褐色 褐色	

挿図 番号	番号	地点	層位	器種・部位	文 様・装 飾	調整	胎 土	色 調	備 考
								(上段、外面 下段、内面)	
28	140	南北ベ ルト南	VI	胴部	LR縄文	内面ナデ	砂粒、石英	にぶい黄橙色 にぶい黄橙色	
28	141	南北ベ ルト内	VI	胴部	RR縄文、RL縄文	内面ナデ	砂粒、石英	にぶい赤褐色 にぶい赤褐色	
28	142	南東部	VI	胴部	L縄文	内面ナデ	砂粒、石英	にぶい橙色 にぶい黄橙色	
28	143	南東部	VI	胴部	燃糸文L	内面ナデ	砂粒、石英	浅黄橙色 浅黄橙色	
28	144	南東部	VI	深鉢形 底部	LR縄文	内面ナデ	砂粒、石英	黒褐色 黒褐色	有機質皮膜状 に付着 底径6.2cm
28	145	北東部	IX	深鉢形 口縁部	RL縄文	内面ナデ	砂粒、石英	にぶい橙色 にぶい褐色	
28	146	北東部	IX	深鉢形 胴部	LR縄文	内面ナデ	砂粒、石英	にぶい橙色 にぶい褐色	
28	147	表採		深鉢形 口縁部	L縄文	内面ナデ	砂粒、石英	にぶい橙色 にぶい褐色	
28	148	攪乱		深鉢形 胴部	LR縄文、列点文	内面ナデ	砂粒、石英	黒褐色 にぶい黄褐色	
28	149	表採		深鉢形 胴部	平行沈線	内面 ミガキ	砂粒、石英	灰黄褐色 にぶい橙色	

第7表 遺講外出土石器観察表

挿図 番号	番 号	地 点	層 位	器 種	現存する規模 (cmまたはg)				備 考
					最大長	最大幅	最大厚	重量	
29	150	西部	IX	スクレーパー (横長)	3.0	6.9	0.8	12.8	右側欠損
29	151	北東部	V	磨製石斧	3.9	2.1	0.6	5.5	刃部の一部分
29	152	北東部	V	スクレーパー (縦長) (石槍様石器)	8.0	2.8	1.1	19.9	両面に細密な加工を施す。 上端部折損か
29	153	北東部	IV	フレイク	6.1	1.8	0.6	4.9	部分的な調整
30	154	試掘	攪乱	磨製石斧	9.6	3.8	1.9	118	片側に抉りを施す
30	155	試掘	I	磨製石斧	7.6	4.8	3.1	155	刃部折損
30	156	北東部	IV	磨製石斧	9.9	5.8	3.8	302	刃部折損
30	157	北東部	III	磨石	9.9	8.3	4.7	553	側面部に機能面あり
30	158	北東部	V	磨石	8.9	5.2	3.4	260	先端部に機能面あり
30	159	北東部	II	石皿	11.1	13.6	1.7	239	敲打痕あり
30	160	北東部	II	敲打磨石	5.6	8.3	4.5	221	大部分が欠失
31	161	北東部	III	敲打磨石	8.5	14.2	5.9	1,020	両面側に機能面あり

第8表 遺講外出土銭貨観察表

挿図 番号	番 号	地 点	層 位	器 種	現存する規模 (cmまたはg)				備 考
					最大長	最大幅	最大厚	重量	
31	162	南西部	Ib	寛永通宝	20.3	6.0	1.2	3.8	鉄製のため錆化

(6) まとめ

早稲栃Ⅱ遺跡7次調査では竪穴住居跡が2棟、土坑が15基検出し、縄文時代前期から弥生時代初頭の遺物が出土した。ここでは調査の成果をもとに若干の考察を加えまとめてみる。

1. 遺構

調査区の南東部端で縄文時代晩期末葉から弥生時代初頭期の竪穴住居跡が2棟検出したことが特筆される。重複する2棟のうち古い時期の第7号竪穴住居跡は北側で明瞭なプランを確認したが、途中で不明瞭となり、竪穴住居跡の規模と平面形は不明になった。炉跡は竪穴住居跡が調査区外へ続いているためか検出されず、ピットも小規模である。遺物は小破片が多かったが、壁付近で台付鉢形または台付浅鉢形の脚部が出土した。土器の文様は8条の平行沈線と2個1対の貼瘤からなる。市内においては上村遺跡の遺構外出土遺物の中に類例がある。また、瘤の間を穿孔している特徴があるが、穿孔の位置に違いがあるが北上市九年橋遺跡の台付鉢形土器にも類例がある。土器の時期は脚部の下位が変形工字文を施しており、晩期大洞A'式に比定され、竪穴住居跡もこの時期と考えられる。

第7号竪穴住居跡よりも新しい時期の第8号竪穴住居跡は確認面から床面までが浅いことや、調査区の拡張時により竪穴住居跡と判断したため、プランを明確にすることができなかった。住居内に柱痕のある柱穴が1基、炉跡が1基、その他小ピットが2基検出した。炉跡は掘り込みの浅い楕円状の平面形で、焼土塊が中央に、また焼土塊の中央部に炭化材が検出された。出土遺物のうち第17図4、5、13は床面から出土した土器で、文様は変形工字文を基調としている点で時期は大洞A'式の後半または弥生時代初頭段階に範疇に入るものと考えられる。帰属時期は第7号竪穴住居跡同様、今のところは特定することを避け、第7号竪穴住居跡との新古関係と出土遺物から大洞A'式の後半から弥生時代初頭の間としておきたい。また、第17図16の口縁部に段を設けるものは少数ながら出土し、散見した限りでは青森県三戸郡畑内遺跡第151号住居跡(弥生時代砂沢式期)に類例がある。炉跡から検出された炭化材は樹種同定の結果、クリ(*Castanea crenata*)の根材であることが分かった。また、年代測定では次項(7)にあるように出土遺物の年代とは大きく異なる結果となり、「試料の由来を含め改めて検討」すべきとなった。炉跡周辺から年代測定結果に近い年代の遺物は出土していないことを踏まえると、年代に齟齬が生じた原因として、(1)炭化材は後世の流れ込みによるものであること、(2)炭化材が何らかの原因で汚染された2点が考えられる。前者においては検出状況から可能性は薄いと考えられる。また後者は、炉跡を覆う第8号竪穴住居跡のA2層が一部現代の盛土層(基本土層Ib層)と接している部分があり、後世の攪乱が認められることや、炭化材採取時の汚染の恐れがある。このことから、炭化材採取時前後を問わず(2)を原因としては充分あり得ることであり、検出状況と出土遺物を重視し、今回は測定結果を支持しないことにした。

土坑は15基検出した。出土遺物が少ないこともあり、時期・性格を特定することはできない。調査区西部では比較的大形の土坑が目立つ。このなかで第15号土坑については、平面形が長方形で深さは50cmを越えること、また長軸が等高線に対し直交していることから落とし穴の可能性が指摘できる。調査区南西端から検出された第17号土坑は明確な性格は不明であるが、上面で礫が出土し、土坑底面から土器片が出土したことから墓坑跡とも考えられる。なお、土坑の時期は出土土器が無文のため特定できない。調査区東部については小ピット状の土坑が検出された。第19号土坑は基本土層IV層を掘り込んであることから竪穴住居跡に近い時期が想定される。

2. 遺物包含層

基本土層Ⅲ層～Ⅵ層が該当する。どの層も異なる時期の遺物が出土していることから、二次的な堆積

により形成されていると考えられる。基本土層Ⅲ層は竪穴住居跡を覆う層である。中からは縄文時代前期から晩期の土器が出土した。基本土層Ⅳ層は竪穴住居跡の検出面に相当し、主に中期後半から後期初頭の土器が出土し、特に後期初頭の同一個体破片が集中して出土した。基本土層Ⅴ層は前期後半から中期後半の土器が出土し、特に大木8 b式の深鉢形土器が出土した。第8号竪穴住居跡の床面と炉跡の掘り方もこのⅤ層中にある。基本土層Ⅵ層はⅤ層同様前期後半から中期後半の土器が出土している。これらから、基本土層Ⅳ層～Ⅵ層は縄文時代後期までに形成され、基本土層Ⅲ層は竪穴住居跡埋没後の弥生時代以降に堆積していったものと考えられる。

3. 集落

第7次調査とこれまでの第1次から第6次調査を通じて早稲栃Ⅱ遺跡の集落について触れてみたい。今回の調査地点は、第6次調査からは直線距離にして50m程しか離れていないことから、当初は第6次調査に続く中期後半の集落跡を予想していたが、検出したのは縄文晩期末葉から弥生時代初頭の竪穴住居跡で、中期後半と特定できる遺構は検出されなかった。また、出土遺物についても様相は第1次から第6次調査とは大きく異なり、遺構・遺物の点からは予想を裏切る結果となった。しかし別の観点からいえば、第7次調査地点は中期後半の集落(領域)にはほぼ該当せず、中期後半の居住域が第6次調査と第7次調査の間で途切れることを意味している。さらに、縄文晩期末葉から弥生時代初頭の生活跡が新たに形成されていたことが分かった。

これまでの調査では中期後半の竪穴住居跡が開けた緩斜面上の標高127m付近から129m付近に等高線と直交するように住居跡が続いている。一方、今回検出した2棟の竪穴住居跡は決して開けた所ではなく、標高133m付近の尾根下の近くに建てられている。また、これまでの調査で確認されていなかった基本土層Ⅲ層、Ⅳ層は調査区東部に堆積し、調査区外へ続いている。これらから、早稲栃Ⅱ遺跡の晩期の住居跡は尾根下を伝うように北西から南東へ続いていると予想される。そして中期後半の竪穴住居跡は晩期の集落よりも低い標高地に、開けた緩斜面を利用して建てられていると予想されるのである。

ところで、市内において縄文晩期末葉から弥生時代前期の竪穴住居跡は他にも崎山地区の大付遺跡、磯鶏地区の上村遺跡、重茂半島南東端部の山田湾沿いに位置する千鷲Ⅳ遺跡、重茂半島西部で宮古湾東岸の赤前Ⅳ八枚田遺跡、千徳丘陵上で山口川右岸の狐崎遺跡で報告されている。大付遺跡では台地上の比較的平坦な緩斜地に弥生時代前期の砂沢式期と考えられる竪穴住居跡が1棟検出されている。上村遺跡では5棟の竪穴住居跡が傾斜の少ない開けたところで集中して検出され、立地の面でいえば当遺跡と異なっている。千鷲Ⅳ遺跡でも5棟の竪穴住居跡が低地で4棟、やや高い所で1棟検出され、低地を中心に集落が構成されている。赤前Ⅳ八枚田遺跡、狐崎遺跡はそれぞれ1棟検出されている。上村遺跡、千鷲Ⅳ遺跡を見る限り、竪穴住居跡が集中して検出される傾向はあるが、立地や集落規模等、集落全体の様相については左記の報告例のみで窺い知ることはできない。今後、資料の蓄積はもちろん周辺の事例を踏まえた上で当該期の集落構成等を分析することが課題であろう。

4. 出土遺物

遺構外で出土した遺物について補足する。

これまでの調査での縄文前期の資料は前期前半の繊維土器が多かったが、今回はその他に第23図40、第26図100～102、第28図129といった前期後半の土器が出土した。この中で40の土器は縄文を地文とし、山形または鋸歯状の沈線が特徴的で、時期は恐らく大木4式であろう。市内では千鷲Ⅳ遺跡に類例がある他、最近では釜石市沢田2遺跡、水沢市新田遺跡などで出土している。100～102

は細隆線が特徴的で、これも大木4式である。胴部の器形が大きく外反していることも当該期の土器の特色を良く表している。

早稲枋Ⅱ遺跡では、縄文中期の資料として竪穴住居跡を中心に大木8b式～大木10式土器が多く出土していた。今回は新たに大木8b式の深鉢形土器(第26図90～92)が出土した。崎山貝塚で比較的多く出土しているが、市内での出土量は決して多くない。この他大木9式のものが出土しているが、破片のみで全容を知る資料は出土しなかった。

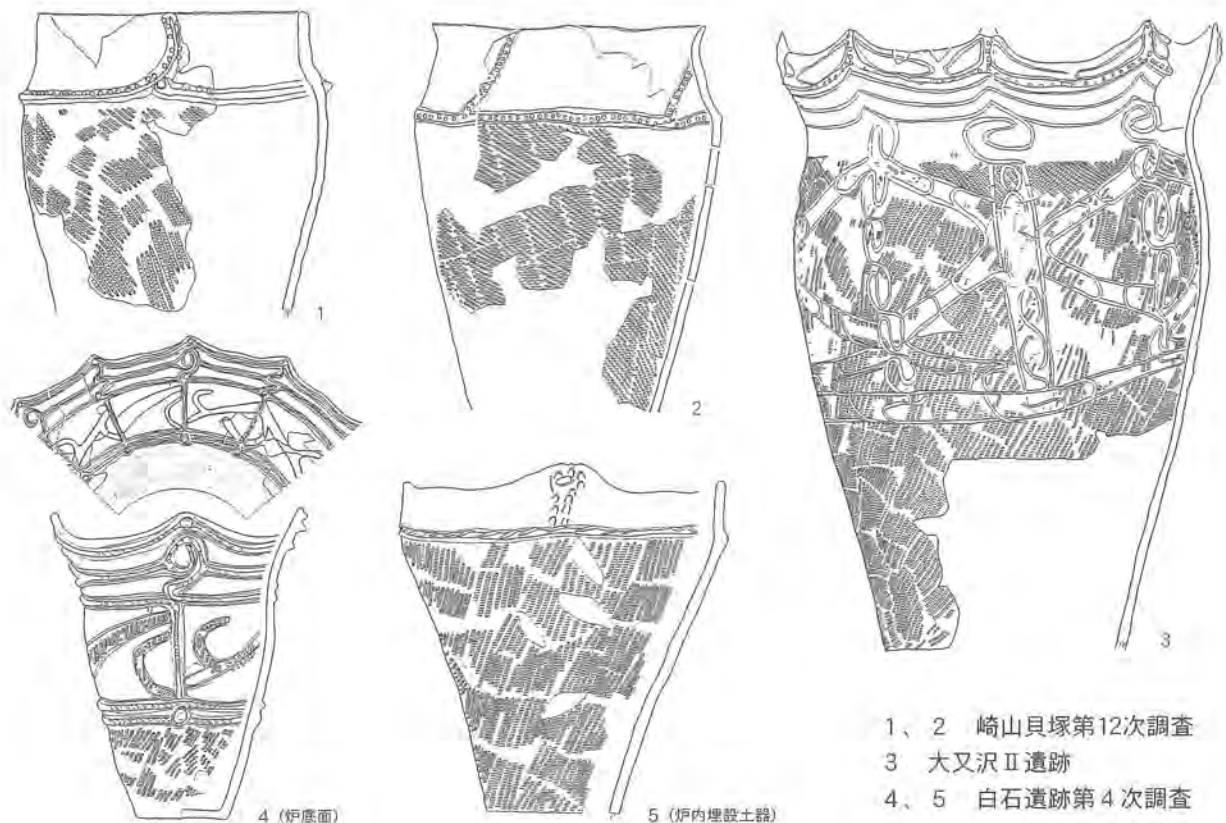
後期は基本土層Ⅳ層から出土した(第24図54～65)。波状口縁深鉢形土器で、隆線上に円形刺突文を施し、ボタン状突起の貼付を特徴とする。市内での類似例はなく、文様構成上、盛岡市大葛遺跡RA03竪穴住居跡出土の土器とよく類似している(盛岡市教育委員会『大葛遺跡』1995 P16の一群)。大葛遺跡の出土土器を分析した室野秀文氏によると、RA02竪穴住居跡、RA03竪穴住居跡で出土した土器群は所謂門前式土器の土器様相と異なり、青森県以北とのつながりがあると指摘し、大葛遺跡の出土土器の「c類」を除く精製土器の多くは馬淵川以北の青森県、北海道道南地域の土器に近く、後期初頭の土器群「前入江・前十腰内様式」、「牛ヶ沢(3)式」、「葦窪式」に相当するとした。一方で「c類」に特徴的な「J字状文」「逆J字状文」は「大木10式土器の新段階からの系譜をひくもの」とし、大迫町観音堂遺跡29号住居跡、秋田県坂の上F遺跡57号土坑出土土器との関連性から門前式土器との併行関係を検討し、大葛遺跡の出土土器は熊谷常正氏による門前式5段階編年(熊谷 1996)の門前Ib式、観音堂遺跡第Ⅴ群(大槌町教育委員会 1979)に位置づけられるとした。本例も大葛遺跡c類土器同様、観音堂遺跡第Ⅴ群に位置づけられると考えられ、大葛遺跡の土器と同時期であると考えられる。ただし編年作業の結果、馬淵川以北の青森県、北海道道南地域との関連を指摘しながらも、大葛遺跡c類土器の文様要素である「J字状文」、「逆J字文」と結節点の「ボタン状貼付文(本報告ではボタン状突起)」が大木10式に近いからといって門前式5段階編年を借用し網の中に入れるのは説得力を欠くものであり、門前式5段階編年の門前Ib式に相当するという考えだけは時期尚早の感じがあると思われる。室野氏の指摘のように、大葛遺跡の土器は北東北との関連を無視できないものである。だからこそc類土器も包含して北東北との時間的位置づけについて検討すべきであり、大葛遺跡の土器と本遺跡の土器は門前式と別に論じることが求められる。

本遺跡の後期初頭の土器は頸部文様帯が確立しており、これは頸部文様帯をもたない門前式と一線を画し、北東北に多くみられ大木10式にはない、後期に出現する文様帯の系統である。本例では頸部文様帯に蛇行状の隆線上に円形刺突を施していたり、「Y」字状の空白部を設けボタン状突起を貼付している。大葛遺跡ではa類とb類の一部(『大葛遺跡』P31の1～4)にあり、波状口縁深鉢形土器にその特徴が窺える。後期初頭の土器編年については本間宏氏の論文があり、本間氏は3段階に細分し、その3段階は「上村式」、「葦窪式」、「蛭沢式」と繋ぎ、十腰内I式へ続いていくと指摘している(本間 1988)。本間氏は「葦窪式」を本間氏の「I」である頸部文様帯から垂下する縦位区画文をもつ土器の出現を指し、「葦窪式」成立の「根幹」としている。これは本遺跡出土土器の頸部、胴部文様に当てはまると考えられ、本遺跡の土器は「葦窪式」に関係があると考えられる。また、本例で見られる様な隆線上の円形刺突文とボタン状突起の貼付、そして胴部下位に隆線の下に垂れ下がったボタン状突起、といった文様は、観音堂遺跡第Ⅳ群、第Ⅴ群の特徴と共通している。つまり、本例は文様帯的には北東北の要素を受容しながらも個々の文様には門前式の要素を取り入れている土器ということになる。そして北の要素と南の要素を合わせもっているということは、後期初頭の時期に北東北の土器要素が南下していったことを物語っているといっても過言ではないであろう。市内周辺の沿岸ではいわゆる「狭義の門前式」がほとんど出土しな

いが、このような南北の属性を相容れた土器が発生したことは北の要素が南下したことを示す要因の一端なのかも知れず、当該期の土器は土器の系統を理解した上で門前式との併行関係を構築すべきなのである。

本例に市内で最も近い例としては、隆線上に円形刺突を施す例として崎山貝塚第12次調査N21W15-3号土坑跡出土土器(第32図1)、12次調査N3W57-1号竪穴住居跡出土土器(同図2)、大又沢Ⅱ遺跡10号土坑出土土器(同図3)他が、ボタン状突起を施す例として大又沢遺跡出土のⅢ群2、3類土器があげられる。本例は大又沢遺跡10号土坑出土土器よりも古く、崎山貝塚例がともに観音堂遺跡第Ⅳ群に相当すれば、本例は新手であると考えられる。また、白石遺跡第3次調査第15号竪穴住居炉跡では葦窪式と関係が深いと考えられる磨消縄文によるパネル文が横に展開した土器が出土している(同図4。4・5は同一住居跡内出土土器)。市内における後期前葉の資料は増加しているため、今後は他遺跡の事例を含め編年的位置付けについて分析していくことが課題である。

晩期は竪穴住居跡の土器と同様に晩期末葉から弥生時代初頭の土器がほとんどであるがまとまった資料はなかった。この中で第23図48の貼瘤を施す土器片については先述のように沈線内に炭化物が付着していたため、放射性炭素同位体年代測定を依頼した。その結果、補正年代が 2840 ± 40 BP、暦年較正年代で1048-967calBCの数値を示した。次項(7)の自然科学分析結果によると、この数値は近年の調査事例による、弥生時代の開始を500年早くする年代観の縄文時代晩期終末から弥生時代初頭に相当する年代であるとしながらも、従来の年代観との整合性を検討する必要があるということであった。文化事象に重きを置く年代観と従来の土器型式に重きを置く年代観は別の視点に基づいた年代観であり、それぞれは尊重すべきであるが、土器付着炭化物を試料とした炭素年代が新しい年代観と整合すると受け止めて良いか即断はできない。今後も炭素年代測定データを蓄積していくことが必要であろう。



第32図 市内における後期前葉の土器出土例(縮尺=1/6)

最後に石器について1、2点補足する。まず第29図152のほぼ全面に加工を施した石器である。上端部以外は細かい剥離調整を施し先端部が尖っていることが特徴である。最大長が8.0cmに対し最大幅は2.2cmしかなく細身である。高根遺跡に形態上類似した石器があるが(『高根遺跡』1992 P22の120)、剥離調整は本例のほうが緻密で、高根遺跡例の断面は扁平で本例のように膨らみがない。用途としては上部の括れが摘みであれば石匙と同様のスクレーパーが考えられるが、ほぼ全面加工の石匙は珍しく、本例のように断面が膨らむものは石匙やスクレーパー向きではないが、尖頭器や石槍にしても剥離調整が緻密すぎる感をもつ。石匙の摘みにアスファルトが付着する例から紐を巻き付けていたと考えられることから、本例も括れの所に紐を巻き付けて携帯した万能ナイフのような機能が想定される。石器の時期は基本土層V層から出土していることから、縄文時代前期から中期の間が考えられる。高根遺跡例は中期前葉の竪穴住居跡から出土しているが、先の沢田2遺跡では縄文前期中葉から後葉の土器を含む遺物包含層から類似資料が複数出土している。今後は機能、用途、分布、時期について石匙とは別に検討する必要があると考えられる。第30図157、158は磨石で157は円形で側面をほぼ全て使用し、158は楕円形で先端部にのみ機能面がある。どちらも調整痕があることから使用前あらかじめ素材を粗く整形していることが窺える。また、どちらも機能面に稜があり、表裏別の角度から、斜めの方向で使用している。石材は鑑定していないが、157が堆積岩の一種で、158は詳細不明であるが157より硬質で火山岩の一種であると考えられる。石器の石材選択、形態等の理由からこのような対照的な磨石となるのかは不明であるが、今後はこの他、磨る対象物の違い等を含め検討する意味はあるものと考えられる。

5. 総括

今回、早稲栃Ⅱ遺跡の第7次調査では縄文時代晩期末葉～弥生時代初頭の竪穴住居跡を中心に、土坑跡と縄文時代前期から晩期末葉、弥生時代初頭の遺物が出土したが、これまでの6次に亘る調査と比較すると、検出遺構、出土遺物どれをとっても異なる様相で、遺構と遺物は時期の空白を埋めるかのように検出・出土した。それはまず、縄文時代晩期末葉～弥生時代初頭の竪穴住居跡が早稲栃Ⅱ遺跡で初めて検出されたことがあげられる。当該期の竪穴住居跡は崎山地区では報告されていないが、崎山貝塚では当該期の土器が出土していることや、縄文晩期中葉の竪穴住居跡が検出された大付遺跡をはじめ周囲には多くの遺跡が分布していることから、今後周辺の報告例は増加すると考えられる。次に、出土遺物については前期中葉、中期中葉、後期初頭と判別できる土器が出土したことがあげられる。調査前、当遺跡は前期前葉、中期後半の遺物が主に出土していたが、今回の調査により時期的に広がり認められ、当遺跡は断続的ではあるが、縄文前期から弥生時代初頭までの遺物を包含している遺跡であることが分かった。このような遺跡は近隣で崎山貝塚が代表的であるが、この他大付遺跡も前期から晩期の遺跡であり、崎山貝塚を中心に長きにわたって形成された遺跡が周辺に点在していることが考えられる。

また、現代の盛土からは鉄滓・羽口片が出土した。当遺跡のものかは不明であるが、周辺に製鉄遺構が存在する可能性があり、今後古代以降の生活跡が検出されることも予想される。

今回の調査により早稲栃Ⅱ遺跡が縄文時代の長きにわたり生活が営まれ形成された遺跡であることが新たに分かったが、その全容把握は今後の事例の蓄積を待つより他はない。また、出土土器の編年的位置づけについても課題を残すこととなった。今後周辺での調査により解明していくことを期待し、早稲栃Ⅱ遺跡第7次調査の成果が先史時代の崎山地区が明らかになる上での一助となることを希望する。

(7) 分析・同定

宮古市早稲栃Ⅱ遺跡出土炭化材の樹種

高橋利彦（木工舎「ゆい」）

1. 試料

試料は1点で、第7次調査で出土した第8号竪穴住居跡の炉（地床炉）跡から検出されたものである。同住居跡は縄文時代晩期終末～弥生時代初頭のものと考えられている。

遺跡は山間地に広がる緩斜面上（標高約135m）に立地し、これまで行われた6回の調査により、縄文時代中期を主体とする集落跡が確認されている。遺跡の北東約700mには国史跡崎山貝塚が位置している。

2. 方法

同定には調査担当者によって採取・送付された材片を用いた。試料を室内で自然乾燥させたのち、試料の木口（横断面）・柃目（放射断面）・板目（接線断面）3断面を走査型電子顕微鏡（SEM, 加速電圧 10kV）で観察し同定した。併せて電子顕微鏡写真図版を作成した（PL2）。SEM観察にご協力いただいた（株）ニッテツ・ファイン・プロダクツ釜石試験分析センターに感謝いたします。なお、残った炭化材とネガ・フィルムは木工舎「ゆい」に保管されている。

3. 結果

試料はクリ（根材）に同定された。試料の主な解剖学的特徴や一般的な性質は次のようなものである。なお、学名は「日本の野生植物 木本Ⅰ」（佐竹ほか 1989）にしたがい、県内での自然分布については「岩手県植物誌」（岩手県植物の会 1970）を参照した。また、一般的性質については「木の事典 第4巻」（平井 1980）も参考にした。

・クリ（*Castanea crenata*）根材 プナ科

環孔材で孔圏部は1列であるが、管孔の分布が疎らなため孔圏部はやや不明瞭。孔圏外小道管は放射方向に配列する傾向があるが、こちら分布が疎らであるため不分明である。道管は単穿孔をもち、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、1～2列、1～15細胞高。柔組織は周囲状、短接線状。

クリは北海道南西部から九州の山野に自生し、また植栽される落葉高木である。県内でも各地で普通にみられる。材はやや重硬で、強度は大きく、耐久性が高い。土木・建築・器具・家具・薪炭材、楳木などに用いられる。

4. 考察

試料は検出状況から燃料と見てよいと思う。根は部材より堅いため燃え残りやすかったのであろう。囲炉裏の火を絶やさないように木の根をくべるといふ民俗例もあるようなので、そうした使い方をしていたのかもしれない。

沿岸地域の遺跡での近い時期の燃料材の検討結果は、筆者の知る範囲ではない。しかし、クリ材の利用は各地・各時代の遺跡で知られている。例えば、本遺跡の西南西3kmあまりに位置する近内中村

遺跡は縄文時代中期後半から晩期前半の集落跡として知られているが、そこで検出された遺構のうち、晩期前半とされる第257号竪穴住居跡出土の構築材（垂木や木舞とされている）からはクリも認められている*1し、中期後半とされる第156号住居跡検出材は検討試料すべて*2がクリに同定されている（宮古市教育委員会 2001）。また、本遺跡からは90kmほども離れた北上山系北端の軽米町大日向Ⅱ遺跡で検出された縄文時代晩期とされる木製品・加工材488試料からは453点が29分類群に同定されているが、クリが最多の109点（22%）を占めている例（高橋 1995）などもある。

<注>

*1) 検討された30点はオニグルミ24点、クリ5点、ヤマグワに同定されている。

*2) 手元の資料では11点になる。

引用文献

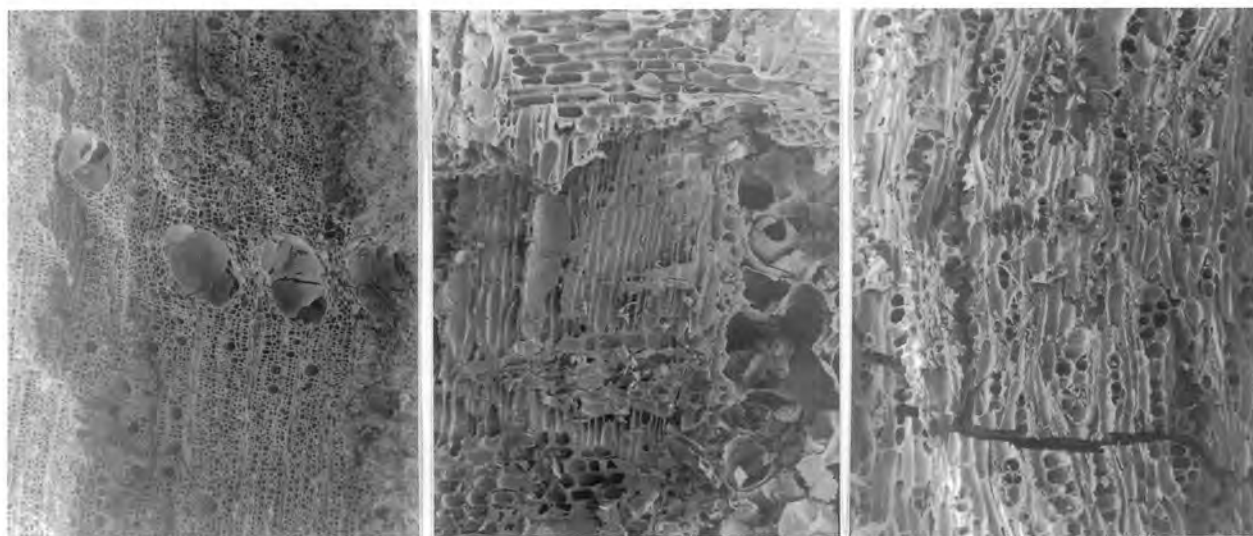
平井信二 1980 「木の事典 第4巻」, かなえ書房.

岩手植物の会 1970 「岩手県植物誌」.

宮古市教育委員会 2001 「近内中村遺跡 -第1次～第7次発掘調査の概要-」. (樹種同定は筆者による)

佐竹義輔・原 寛・亘理俊次・富成忠夫 (編) 1989 「日本の野生植物 大本Ⅰ」, 平凡社.

高橋利彦 1995 大日向Ⅱ遺跡出土材の樹種, 「岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第255集 国道395号線改良工事関連遺跡発掘調査 大日向Ⅱ遺跡発掘調査報告書 -第2次～第5次調査- 第1分冊」, 391-422, (財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター



木口 x40

柁目 x100

板目 x100

クリ（根材）第8号竖穴住居炉跡出土材
樹木の肥大生長方向は木口では画面下から上へ、柁目では左から右。

宮古市早稲栃Ⅱ遺跡第7次調査の放射性炭素年代測定

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

本報告では、早稲栃Ⅱ遺跡第7次調査において検出された第8号竪穴住居跡の年代観を検討するため、当住居跡内から出土した炭化材及び基本土層中から出土した土器付着炭化物を対象として放射性炭素年代測定を行う。

1. 試料

試料は、遺物の考古学的所見から縄文時代晩期終末-弥生時代初頭の可能性が示唆される第8号竪穴住居跡の炉跡内から出土した炭化物2点、縄文時代晩期-弥生時代の遺物包含層とされる基本土層Ⅲ層から出土した土器片(第23図48)に付着する炭化物1点の計3点である。

竪穴住居跡の炉跡内から出土した炭化物2点は、樹種の分析調査の結果が、クリの根材と同定されている。一方、基本土層Ⅲ層から出土した土器片は、外面には口唇部突起及び口縁部の沈線内に炭化物が付着し、内面には薄くおこげ状に付着する炭化物が認められる。

試料の採取は、炭化材2点からは0.5g前後を抽出し、土器片からは匙状用具を用いて付着炭化物の採取を行っている。なお、土器内面の炭化物は付着範囲が広がったものの、部分的に試料採取を行ったところ乾燥重量0.01g未満であった。そのため、内面全体の炭化物を対象の採取を行い乾燥重量0.04gを得ている。

2. 分析方法

(1) 放射性炭素年代測定

測定は、株式会社加速器分析研究所の協力を得て、AMS法により行う。測定機器は、3MV小型タンデム加速器をベースとした ^{14}C -AMS専用装置(NEC Pelletron 9SDH-2)を使用する。AMS測定時に、標準試料である米国国立標準局(NIST)から提供されるシュウ酸(HOX-II)とバックグラウンド試料の測定も行う。また、測定中同時に $^{13}\text{C}/^{12}\text{C}$ の測定も行うため、この値を用いて $\delta^{13}\text{C}$ を算出する。放射性炭素の半減期はLIBBYの半減期5,568年を使用する。測定年代は1950年を基点とした年代(BP)であり、誤差は標準偏差(One Sigma)に相当する年代である。暦年較正は、RADIOCARBON CALIBRATION PROGRAM CALIB REV5.0(Copyright 1986-2005 M Stuiver and PJ Reimer)を用い、いずれの試料も北半球の大気圏における暦年校正曲線を用いる条件を与え計算を行っている。

3. 結果及び考察

(1) 放射性炭素年代測定

測定結果を表9に、暦年較正結果を10に示す。各試料の年代(補正年代)は、第8号竪穴住居跡の炉跡内から出土した炭化材は、1210BP・1180BP、基本土層Ⅲ層から出土した土器付着炭化物は2840BPを示した。また、暦年較正結果のうち、確からしさを示す相対比の大きい年代範囲に着目すると、炭化材2点は8世紀後半~9世紀後半頃(炭化材(1):772-881calAD、炭化材(2):779-890calAD)、土器付着炭化物は1048-967calBCを示す。

第8号竪穴住居跡の炉跡内から出土した炭化材は、樹種及び出土状況等の所見、さらに、本分析結果を考慮すると、同一試料の可能性や同時期に利用された木材の可能性もある。ただし、得られた年代観については、出土遺物から想定される遺構の年代と大きく異なることから、試料の由来等を含め改めて検討することが望まれる。一方、土器付着炭化物は、約3000年前頃の年代を示した。当分析結果は、近年の調査事例の蓄積（国立歴史民俗博物館，2003）によれば縄文時代晩期終末－弥生時代初頭に相当する年代である。ただし、当該期の年代観の評価（谷口，2001・森岡，2001）と比較や、対象とした土器の考古学的所見に基づく年代観との整合性については課題とされる。そのため、本地域における同様の分析事例を蓄積し、検討する必要がある。

第9表 放射性炭素年代測定結果

試料番号	遺構名	試料名	試料の質	補正年代 BP	σ 13C (%)	測定年代 BP	Code.NO.
1	第8号竪穴住居跡	炉跡内出土炭化材(1)	タリ(根材)*	1212±40	-26.83±0.77	1240±40	IAAA-41742
2	第8号竪穴住居跡	炉跡内出土炭化材(2)	タリ(根材)*	1180±40	-25.94±0.74	1200±40	IAAA-41743
3	基本土層Ⅲ層	土器内面付着炭化物	炭化物	2840±40	-26.36±0.58	2860±40	IAAA-41744

- 1) 年代値の算出には、Libbyの半減期5568年を使用。
 - 2) BP年代値は、1950年を基点として何年前であるかを示す。
 - 3) 付記した誤差は、測定誤差 σ （測定値の68%が入る範囲）を年代値に換算した値。
- *…調査担当者の御教示による

第10表 暦年較正結果

試料番号	補正年代 (BP)	暦年較正年代 (cal)			相対比	Code.NO.
1	1213±40	cal AD 772 - cal AD 881	cal AD 1,178 - 1,069	1.000	IAAA-41742	
2	1183±41	cal AD 779 - cal AD 890	cal AD 1,171 - 1,060	1.000	IAAA-41743	
3	2838±41	cal BC 1,048 - cal BC 967	cal BC 2,998 - 2,917	0.700	IAAA-41744	
		cal BC 965 - cal BC 928	cal BC 2,915 - 2,878	0.300		

- 1) 計算には、RADIOCARBON CALIBRATION PROGRAM CALIB REV5.0 (Copyright 1986-2005 M Stuiver and PJ Rimer) を使用
- 2) 計算には表に示した丸める前の値を使用している。
- 3) 付記した誤差は、測定誤差 σ （測定値の68%が入る範囲）を年代値に換算した値。

引用文献

- 国立歴史民俗博物館，2003，炭素14年代測定と考古学 国立歴史民俗博物館研究業績集. 370p
- 谷口 康浩，2001，「縄文時代遺跡の年代」. 季刊考古学. 第77号. p17-21.
- 森岡 秀人，2001，「弥生時代遺跡の年代」. 季刊考古学. 第77号. p22-26.

参考文献

- 青森県教育委員会 2003 『畑内遺跡Ⅸ ―平成13年調査編―』 青森県埋蔵文化財調査報告書第345集
- 岩手県埋蔵文化財センター 1991 『上村遺跡』 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第158集
- 岩手県埋蔵文化財センター 2002 『沢田2遺跡』 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第396集
- 岩手県埋蔵文化財センター 2002 『新田遺跡』 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第405集
- 大迫町教育委員会 1986 『観音堂遺跡』
- 宮古市教育委員会 1990 『崎山遺跡群Ⅳ』 宮古市埋蔵文化財調査報告書23
- 宮古市教育委員会 1992 『崎山遺跡群Ⅵ』 宮古市埋蔵文化財調査報告書37
- 宮古市教育委員会 1992 『高根遺跡』 宮古市埋蔵文化財調査報告書33
- 宮古市教育委員会 1995 『崎山貝塚―範囲確認調査報告書―』 宮古市埋蔵文化財調査報告書44
- 宮古市教育委員会 1999 『崎山貝塚第12次・13次内容確認調査概報』 宮古市埋蔵文化財調査報告書55
- 宮古市教育委員会 1999 『千鷲Ⅳ遺跡』 宮古市埋蔵文化財調査報告書54
- 宮古市教育委員会 1999 『赤前Ⅳ八枚田遺跡』 宮古市埋蔵文化財調査報告書53
- 宮古市教育委員会 2003 『大又沢Ⅱ遺跡』 宮古市埋蔵文化財調査報告書59
- 宮古市教育委員会 2003 『早稲栃Ⅱ遺跡第6次調査』 宮古市埋蔵文化財調査報告書61
- 宮古市教育委員会 2003 『下在家Ⅰ遺跡』 宮古市埋蔵文化財調査報告書62
- 盛岡市教育委員会 1995 『大葛遺跡―第1次発掘調査報告書―』
- 盛岡市公民館 1960 『門前貝塚』
- 本間 宏 1988 「縄文時代後期初頭土器群の研究2」『よねしろ考古』第4号
- 熊谷常正 1986 「門前式土器の検討」『岩手県立博物館研究紀要』第4号
- 小田野哲憲 1987 「岩手の弥生式土器編年試論」『岩手県立博物館研究紀要』第5号
- 山内清男 1979 『日本先史土器の縄紋』

写 真 图 版



1. 本調査区内基本土層Ⅲ層除去後近景（北西から）



2. 本調査区内東壁土層堆積状況（西から）

PL 4

1. 本調査区内完掘（南東から）



2. 本調査区内北壁土層堆積状況（南から）



3. 第8号竖穴住居炉跡検出状況（南から）





1. 崎山地区航空写真（南西から）



2. 調査地区周辺航空写真（南東から）



3. 第1次～第7次調査地区航空写真（東から）



1. 調査区遠景（南東から）



2. 本調査区内完掘近景（南東から）



1. 本調査区内基本土層Ⅲ層除去後近景（南東から）



2. 確認調査区内完掘（南から）



3. 確認調査区内土層堆積状況（南東から）



4. 本調査区内基本土層Ⅱ層除去状況（南東から）



5. 本調査区内北部基本土層Ⅲ層除去状況（南東から）



1. 本調査区内基本土層Ⅴ層以下断面（南東から）



2. 本調査区内基本土層Ⅳ、Ⅴ層検出状況（北から）



3. 本調査区内基本土層Ⅴ層検出状況（北西から）



4. 本調査区内東壁土層堆積状況（西から）



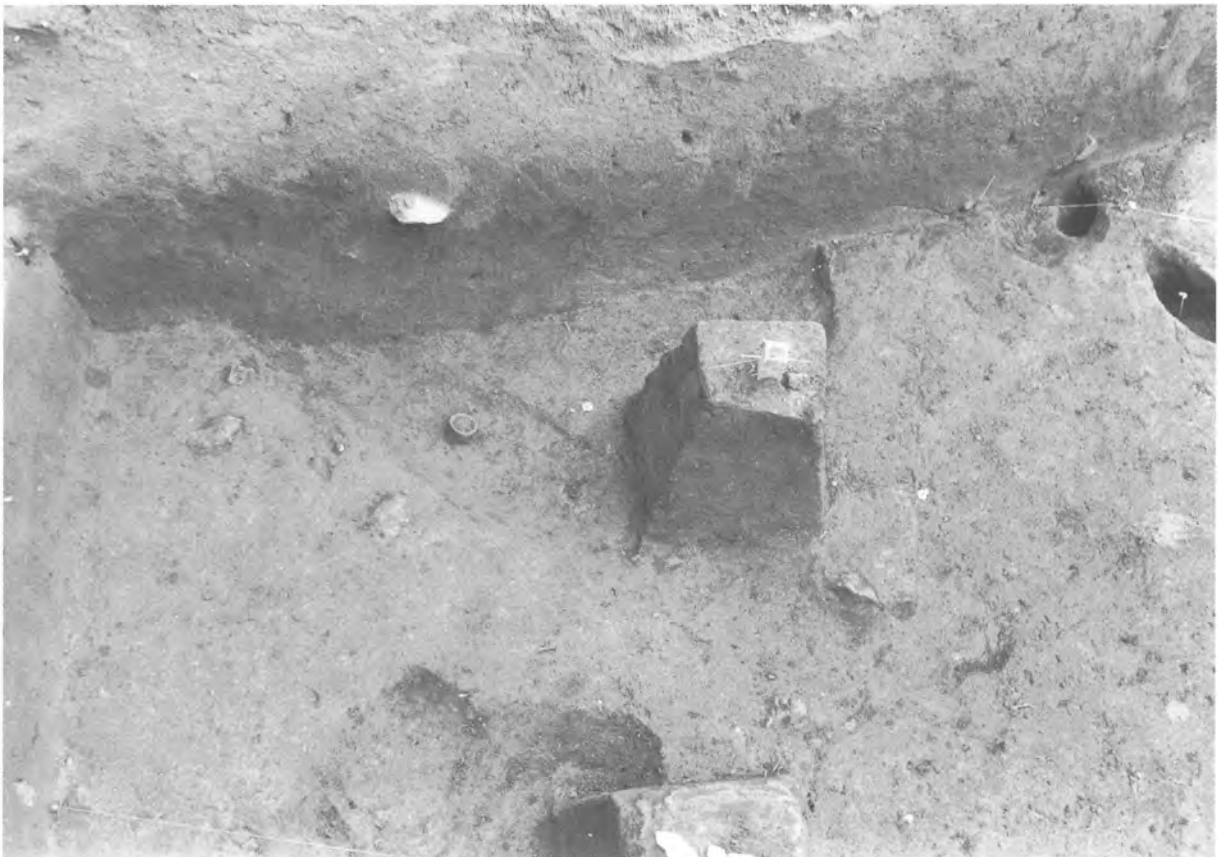
5. 本調査区内東部基本土層Ⅴ層以下断面（北から）



1. 本調査区内基本土層Ⅶ・Ⅷ層検出状況(南西から)



2. 本調査区内東部基本土層Ⅶ層断面(南西から)



3. 第7号竪穴住居跡調査状況(西から)



4. 第7号竪穴住居跡検出状況(1)(南西から)



5. 第7号竪穴住居跡検出状況(2)(東から)



1. 第7号竖穴住居跡内土器出土状況(1) (北から)



2. 第7号竖穴住居跡内土器出土状況(2) (西から)



3. 第8号竖穴住居炉跡検出状況 (南西から)



4. 第8号竖穴住居炉跡検出状況 (南西から)



5. 第8号竖穴住居跡出土礫 (北西から)



1. 第8号竖穴住居炉跡上面確認状況（南西から）



2. 第8号竖穴住居炉跡炭化材確認状況（南西から）



3. 第8号竖穴住居炉跡土層断面（南西から）



4. 第8号竖穴住居炉跡完掘（南西から）



5. 第11号土坑土層断面（西から）



6. 第11号土坑完掘（東から）



7. 第14号土坑土層断面（南から）



8. 第14号土坑完掘（南から）



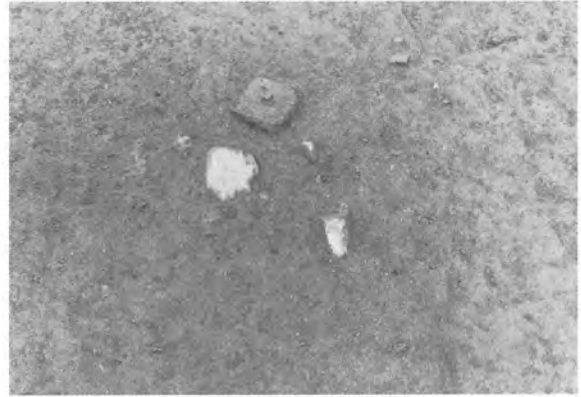
1. 第15号土坑土層断面 (南東から)



2. 第15号土坑完掘 (南西から)



3. 第17号土坑検出状況(1) (南西から)



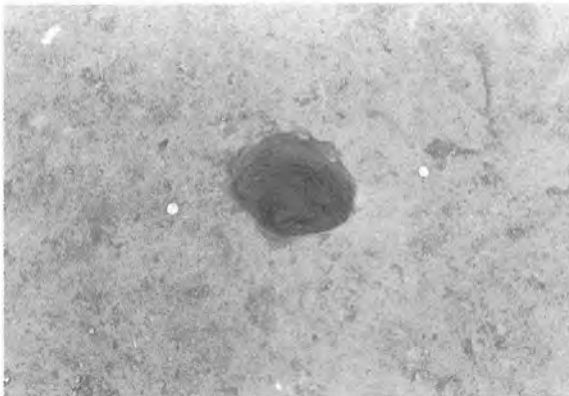
4. 第17号土坑検出状況(2) (南から)



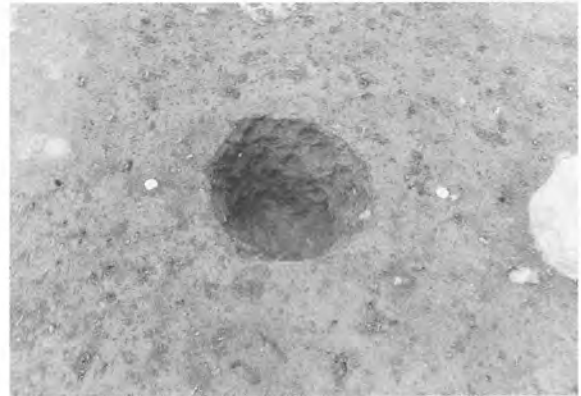
5. 第17号土坑土層断面 (南西から)



6. 第17号土坑完掘 (南西から)



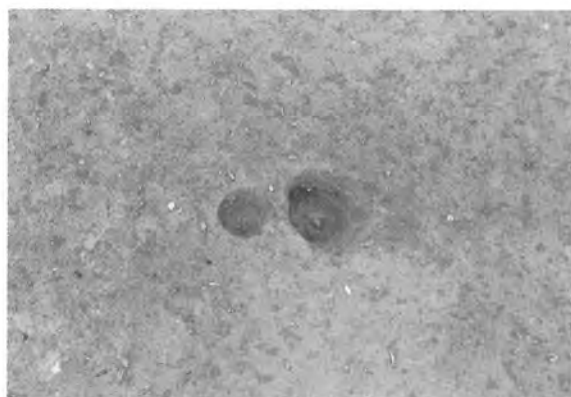
7. 第19号土坑完掘 (南から)



8. 第20号土坑完掘 (東から)



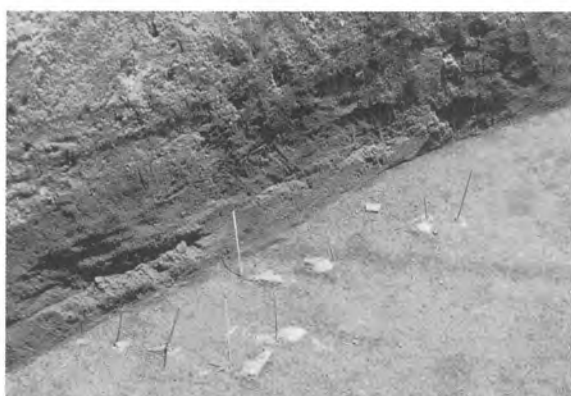
1. 第21～第23号土坑完掘（東から）



2. 第24、25号土坑完掘（南から）



3. 第8号竖穴住居跡内土器出土状況（南から）



4. 本調査区東端部基本土層IV層中出土土器（北西から）



5. 基本土層IX層中出土石器（南から）



6. 基本土層V層中出土石器（南から）



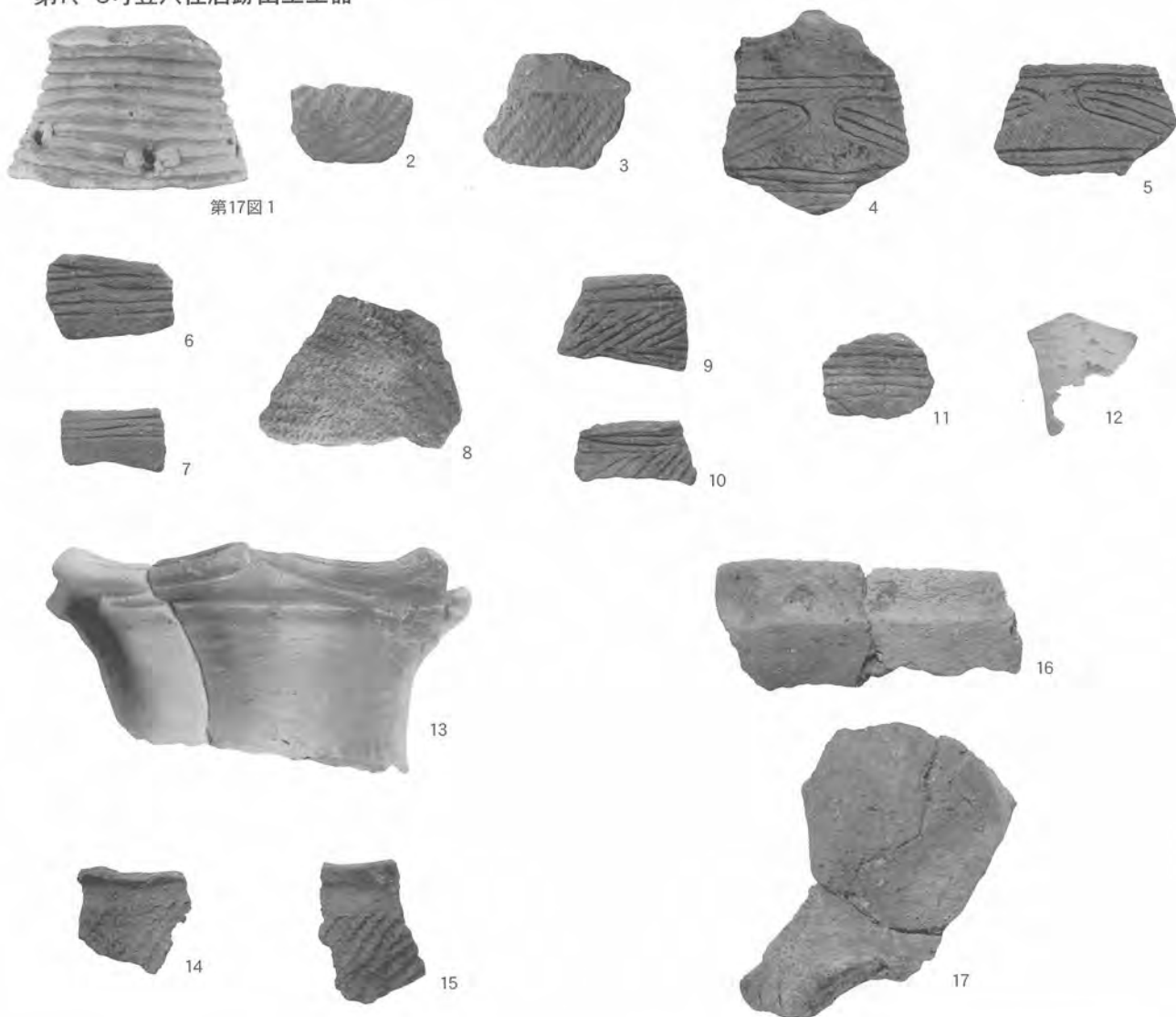
7. 基本土層IV層中出土石器（東から）



8. 調査状況（南西から）

P L 14

第7、8号竖穴住居跡出土土器



第17図 1

2

3

4

5

6

9

11

12

7

8

10

13

16

14

15

17

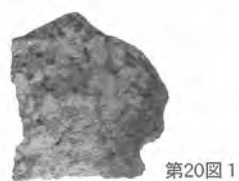
第17号土坑出土土器



第19図 1

2

第22号土坑出土土器



第20図 1

遺構外出土土器



1

2

3

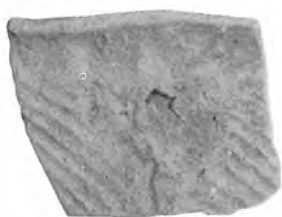
4

5

遺構内・遺構外出土土器 (1)



6



7



8



9



10



11



12



13



14



15



16



17



18



19



20



21



22



23



24



25



26



27



28



29



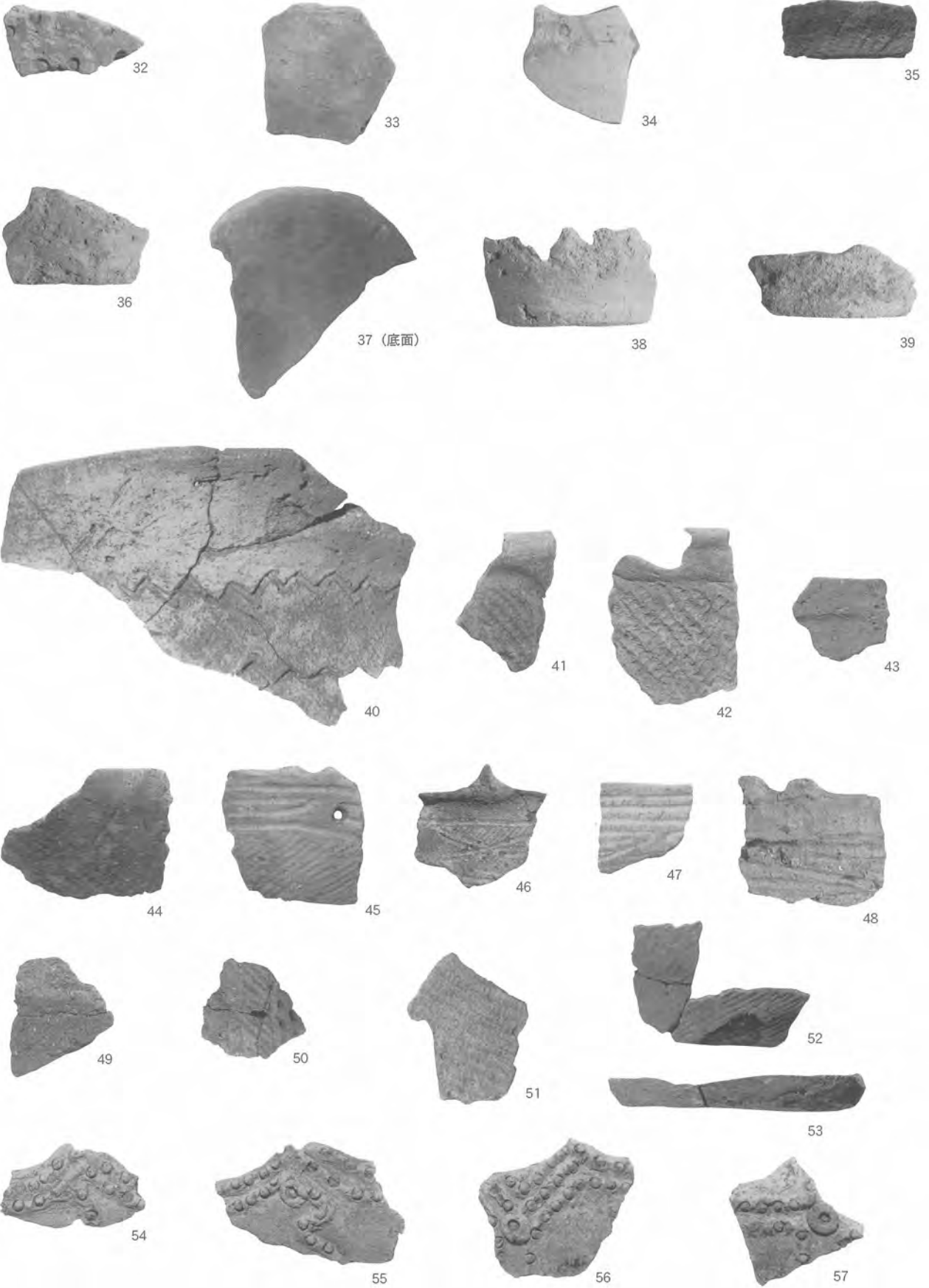
30



31

遺構外出土土器 (2)

P L 16



遺構外出土土器 (3)



58



59



60



61



62



63



64



65 (底面)



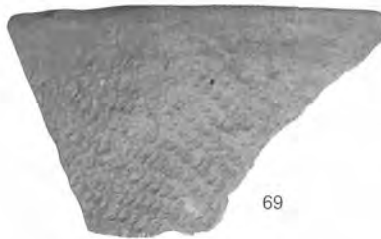
66



67



68



69



70



71



72



73



74



75



76



77



78



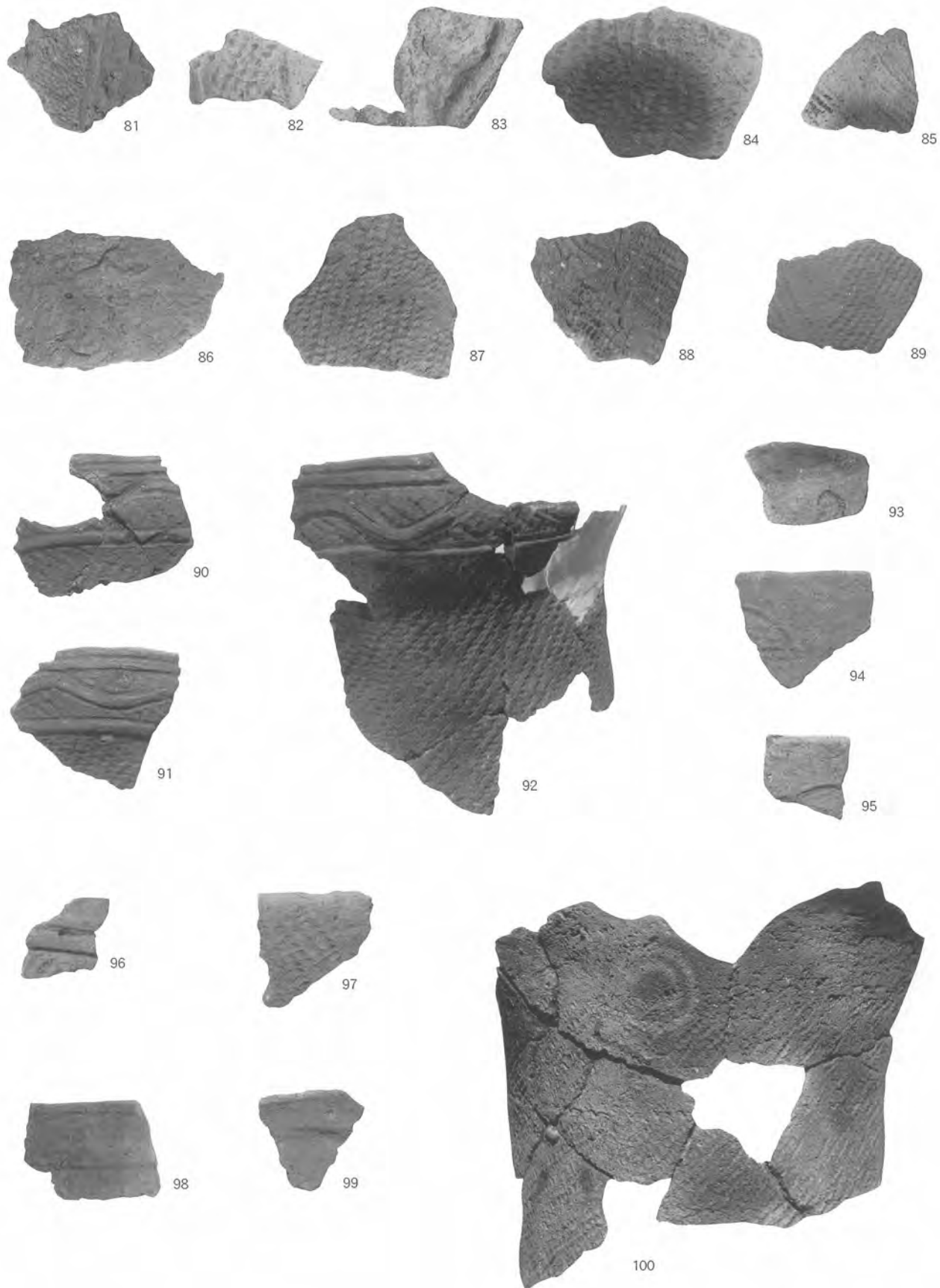
79



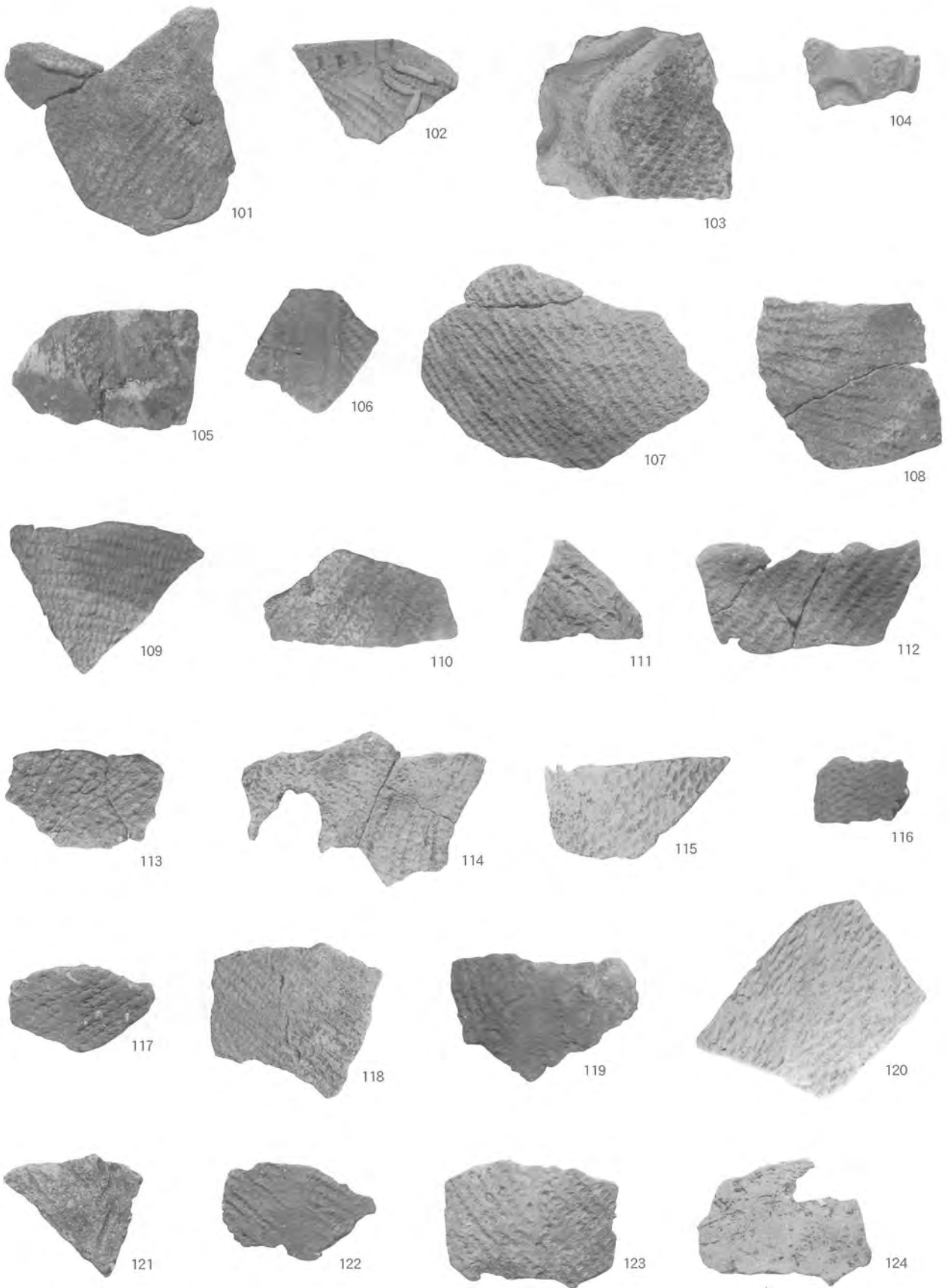
80

遺構外出土土器 (4)

P L 18

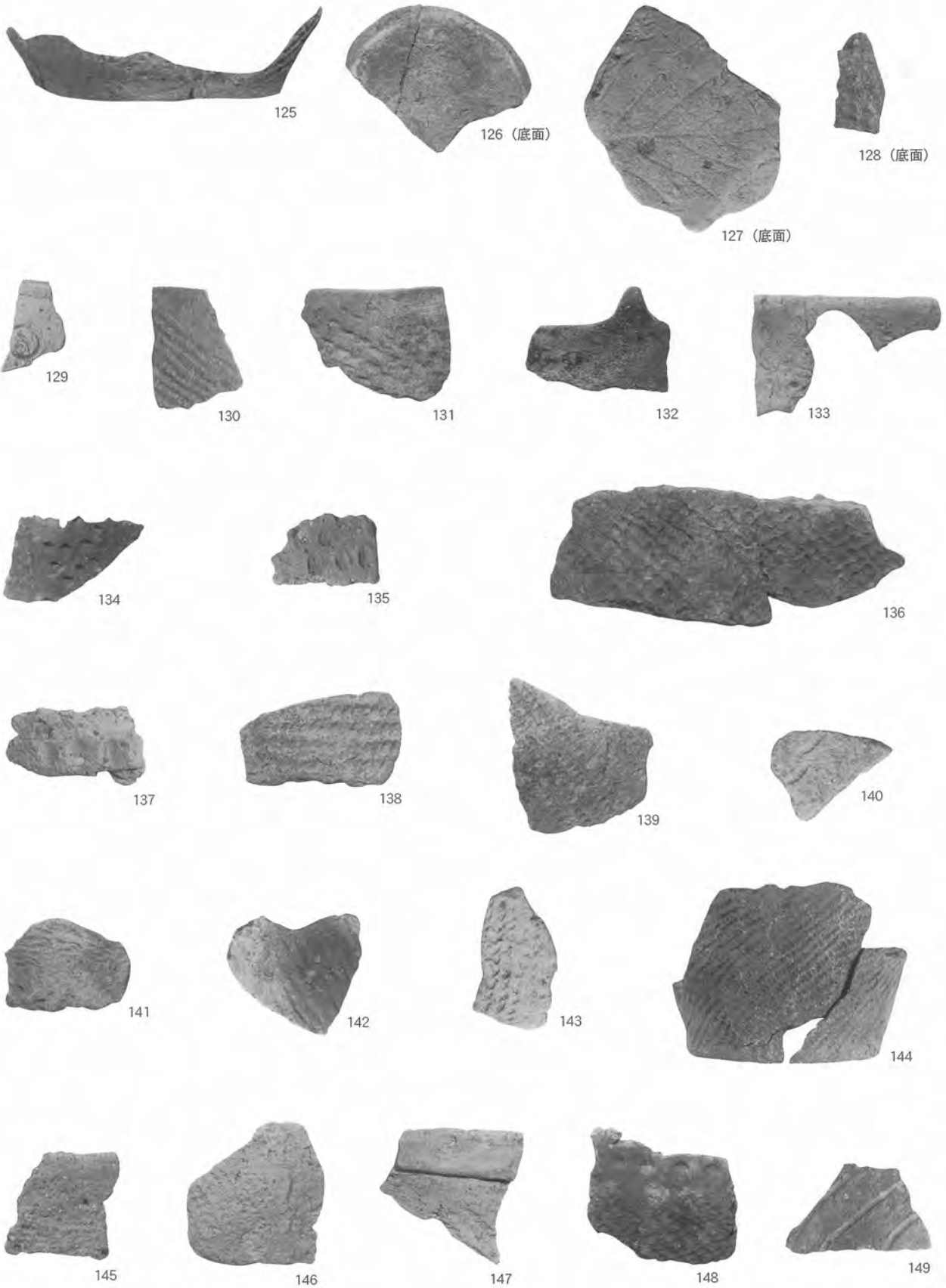


遺構外出土土器 (5)

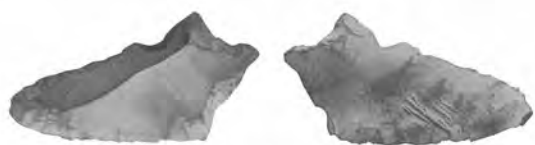


遺構外出土土器 (6)

P L 20



遺構外出土土器 (7)



150



151



152



153



154



155



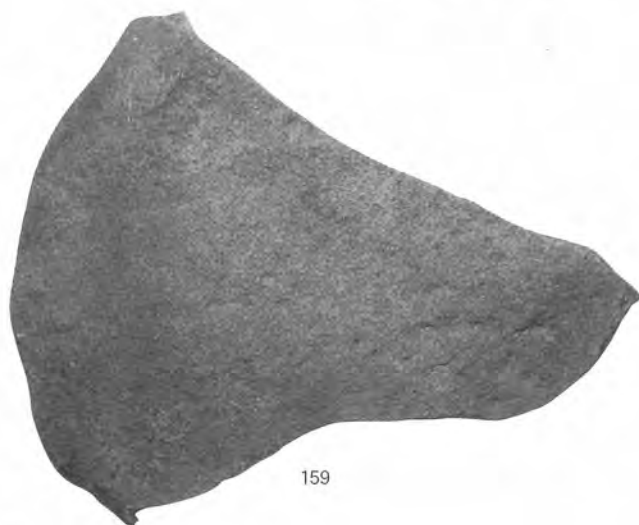
156



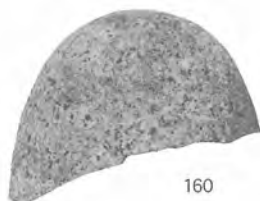
157



158



159



160



161



162

報告書抄録

ふりがな	さきやまかいづかだい20じちょうさ、わせとち2いせきだい7じちょうさ							
書名	崎山貝塚第20次調査、早稲栃Ⅱ遺跡第7次調査							
副書名	市内遺跡発掘調査報告書							
巻次	5							
シリーズ名	宮古市埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ番号	66							
編著者名	江口 邦泰 加納 由美 長谷川 真							
編集機関	岩手県宮古市教育委員会							
所在地	〒027-8501 岩手県宮古市新川町2番1号 TEL. 0193-62-2111 FAX. 0193-63-9119							
発行年月日	2006年3月24日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 ° ' "	東経 ° ' "	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号					
さきやまかいづか 崎山貝塚 だい20じちょうさ 第20次調査	岩手県宮古市 さきやま 大字崎山第1 地割7番	03202	LG14-2180	39°40'31"	141°57'24"	20030504 ～ 20030613	74㎡	個人住宅建築
わせとち2いせき 早稲栃Ⅱ遺跡 だい7じちょうさ 第7次調査	岩手県宮古市 さきくわか 大字崎ヶ崎 第7地割字鬼 越5番	03202	LG14-0020	39°40'18"	141°56'55"	20030603 ～ 20030808	330.2㎡	個人住宅建築
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
さきやまかいづか 崎山貝塚	集落跡 貝塚	中世以降	土 抗 1基		土師器、陶磁器、石器		遺跡南限での調査	
わせとち2いせき 早稲栃Ⅱ遺跡	集落跡	縄文時代 弥生時代	竪穴住居跡 土 抗 遺物包含層 2棟 15基		縄文土器（前期、中期、後期、晩期） 弥生土器（初頭期） 石器（石匙、磨製石斧、磨石など） 鉄滓 羽口 鉄銭（寛永通宝）		遺跡内で新たに縄文時代～弥生時代初頭の竪穴住居跡が検出された。 遺跡内で新たに縄文時代前期中葉、中期中葉、後期初頭、晩期末葉～弥生時代初頭の土器が出土した。	

宮古市埋蔵文化財調査報告書一覧

- | | |
|---|---|
| 1 1979 『宮古市大付遺跡発掘調査報告書』 | 36 1992 『細越Ⅰ遺跡・芋野Ⅱ遺跡－農林課関係田代地区埋蔵文化財発掘調査報告書－』 |
| 2 1980 『宮古市千徳遺跡発掘調査概報』 | 37 1992 『崎山遺跡群Ⅵ－平成3年度発掘調査概報－』 |
| 3 1983 『宮古市遺跡分布調査報告書1』 | 38 1993 『萩沢Ⅱ遺跡－平成4年度発掘調査報告書－』 |
| 4 1984 『宮古市遺跡分布調査報告書2』 | 39 1993 『早稲枋Ⅱ遺跡－第1次・第2次発掘調査報告書－』 |
| 5 1984 『赤前遺跡群第1次・第2次発掘調査報告書』 | 40 1993 『崎山遺跡群Ⅶ－平成4年度発掘調査概報－』 |
| 6 1985 『宮古市遺跡分布調査報告書3』 | 41 1994 『崎山遺跡群Ⅷ－平成5年度発掘調査概報－』 |
| 7 1985 『金浜館跡発掘調査報告書』 | 42 1995 『赤前Ⅰ牛子沢遺跡－平成4年度発掘調査報告書－』 |
| 8 1986 『宮古市遺跡分布調査報告書4』 | 43 1995 『磯鶴館山遺跡発掘調査報告書』 |
| 9 1986 『宮古市遺跡分布図－昭和60年度版－』 | 44 1995 『崎山貝塚－範囲確認調査報告書－』 |
| 10 1986 『中谷地・島田遺跡調査報告書』 | 45 1995 『笹川Ⅰ・加村・仲組Ⅲ・堺ノ神遺跡－市道浦の沢線改良工事関係埋蔵文化財発掘調査報告書』 |
| 11 1987 『崎山貝塚・トロノ木Ⅳ遺跡調査報告書』 | 46 1995 『花原市遺跡－平成4年度発掘調査報告書－』 |
| 12 1987 『寒風・早稲枋Ⅳ遺跡調査報告書』 | 47 1995 『宮古市内遺跡発掘調査概報Ⅰ 早稲枋Ⅱ遺跡・崎山貝塚』 |
| 13 1987 『崎山遺跡群Ⅶ－昭和61年度発掘調査概報－』 | 48 1996 『大付遺跡－平成5年・6年度発掘調査報告書－』 |
| 14 1988 『青猿Ⅰ・下在家Ⅱ・千徳城遺跡群(堀合館)－昭和62年度発掘調査報告書－』 | 49 1997 『花原市遺跡－平成8年度発掘調査報告書－』 |
| 15 1988 『崎山遺跡群Ⅰ－昭和62年度発掘調査概報－』 | 50 1997 『白石遺跡－第6次発掘調査報告書－』 |
| 16 1989 『千鶴遺跡－昭和62年度発掘調査報告書－』 | 51 1998 『赤畑・天神山・山口館－北部環状線道路改良工事関係埋蔵文化財調査報告書－』 |
| 17 1989 『トロノ木Ⅰ遺跡－第1～7次発掘調査報告書－』 | 52 1998 『藤畑遺跡－平成9年度発掘調査報告書－』 |
| 18 1989 『崎山遺跡群Ⅲ－昭和63年度発掘調査概報－』 | 53 1999 『赤前Ⅲ・赤前・八枚田・赤前・柳沢・赤前Ⅵ釜屋ヶ沢・小堀内Ⅲ遺跡－水産課津軽石環境整備事業関係埋蔵文化財発掘調査報告書－』 |
| 19 1989 『高根遺跡－昭和63年度発掘調査報告書－』 | 54 1999 『千鶴Ⅳ遺跡－水産課千鶴地区漁港漁村総合整備事業関係埋蔵文化財発掘調査報告書－』 |
| 20 1989 『狐崎Ⅱ遺跡－昭和63年度発掘調査報告書－』 | 55 1999 『崎山貝塚－第12次・13次内容確認調査概報』 |
| 21 1989 『崎山トロノ木Ⅳ遺跡－昭和63年度調査報告書－』 | 56 2000 『木戸井内Ⅱ・木戸井内Ⅲ・上村Ⅲ遺跡－特別高圧送電線沖工業宮古支線新設工事関係埋蔵文化財調査報告書－』 |
| 22 1990 『狐崎遺跡－平成元年度発掘調査報告書－』 | 57 2002 『山口館跡－北部環状線道路改良工事関係埋蔵文化財調査報告書－』 |
| 23 1990 『崎山遺跡群Ⅳ－平成元年度発掘調査概報－』 | 58 2002 『小沢Ⅱ大上遺跡－市内遺跡発掘調査報告書2－』 |
| 24 1990 『磯鶴館山遺跡－昭和63年度発掘調査報告書－』 | 59 2003 『大又沢Ⅱ遺跡－東北電力宮古ヘリポート移設工事関係発掘調査報告書－』 |
| 25 1990 『鎌ヶ崎館山貝塚－平成元年度発掘調査報告書－』 | 60 2003 『上根井沢Ⅰ遺跡、沼里遺跡－市内遺跡発掘調査報告書3－』 |
| 26 1991 『崎山遺跡群Ⅴ－平成2年度発掘調査概報－』 | 61 2003 『早稲枋Ⅱ遺跡第6次調査－市内遺跡発掘調査報告書4－』 |
| 27 1991 『青猿Ⅰ・千徳城遺跡群－平成元年・2年度発掘調査報告書－』 | 62 2003 『下在家Ⅰ遺跡－平成14年度発掘調査報告書－』 |
| 28 1990 『熊野町遺跡－昭和63年度発掘調査報告書－』 | 63 2004 『大程Ⅱ遺跡・平浜遺跡－市道関伊崎線改良工事発掘調査報告書－』 |
| 29 1991 『弘川Ⅰ遺跡－平成2年度発掘調査報告書－』 | 64 2005 『弘川館跡－瑞雲寺裏庭整備関係発掘調査報告書－』 |
| 30 1992 『金浜Ⅰ遺跡(昭和58年度)・大付遺跡(平成2年度)発掘調査報告書』 | 65 2006 『高浜Ⅵ地神遺跡－高浜四丁目宅地造成工事関係発掘調査報告書－』 |
| 31 1992 『重茂館遺跡群－第1次調査報告書－』 | 66 2006 『崎山貝塚第20次調査・早稲枋Ⅱ遺跡第7次調査－市内遺跡発掘調査報告書5－』 |
| 32 1992 『黒森町Ⅰ遺跡－平成2年度発掘調査報告書－』 | |
| 33 1992 『高根遺跡－平成3年度発掘調査報告書－』 | |
| 34 1992 『鯉沢遺跡群－平成2年度発掘調査報告書－』 | |
| 35 1992 『大付遺跡－平成3年度発掘調査報告書－』 | |

宮古市埋蔵文化財調査報告書66

崎山貝塚第20次調査・早稲枋Ⅱ遺跡第7次調査
－市内遺跡発掘調査報告書5－

平成18年3月24日発行

発行 岩手県宮古市教育委員会
〒027-8501 宮古市新川町2番1号
TEL.0193-62-2111

印刷 株式会社文化印刷
〒027-0037 宮古市松山5-13-6
TEL.0193-62-4578

